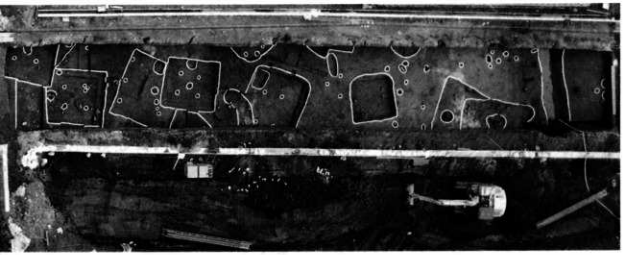
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（16）

県道高山～吾平線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

東　田　遺　跡

（平成５年度調査）



1996年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

本書は，県道高山～吾平線整備事業に伴って鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査した記録です。

高山町は，豊かな自然や歴史，風土の中，国指定史蹟「塚崎古墳群」をはじめとする遺跡が数多く周知され，文化財や埋蔵文化財の保護と活用の場となっています。埋蔵文化財は，大地の中で眠りから醒めた遺構や遺物が，我々の前にその姿を現したとき，文化的な充実感を求めてやまない私たち現代人にとっての過去から現在への生きざまと，そして未来への道標となってくれます。

本遺跡は工事中発見による緊急発掘調査で，調査期間や調査による事業の遅滞等，遺跡の取り扱いについて，県教委と県土木部との間で迅速な協議が図られ，円滑に調査が実施・完了しました。しかし，今後開発と埋蔵文化財との事前の調査と綿密な調整，そして適切な対応がますます必要となってきます。

調査の結果，低地の沖積平野に営まれた古墳時代における大集落の存在が明らかになり，この時期の大隅地域の集落形態の解明に多くの資料を提供してくれました。

今後，この報告書が古代史研究の解明と，埋蔵文化財をより深く理解していただくために活用いただければ幸いです。最後に，調査の実施にご理解とご協力をいただいた鹿屋土木事務所や関係者並びに発掘作業に従事された地元の方々に心から感謝いたします。

平成８年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　内村正弘

例　言

1　この報告書は，平成５年11月８日～12月24日にかけて実施した県道高山～吾平線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本遺跡の調査については，県土木部鹿屋土木事務所・高山町教育委員会の協力を得，県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　遺物の実測，トレース，写真撮影については青崎が行い，遺物整理・復元・実測作業は県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行った。

4　遺物番号は，本文及び挿図・図版の番号と一致する。

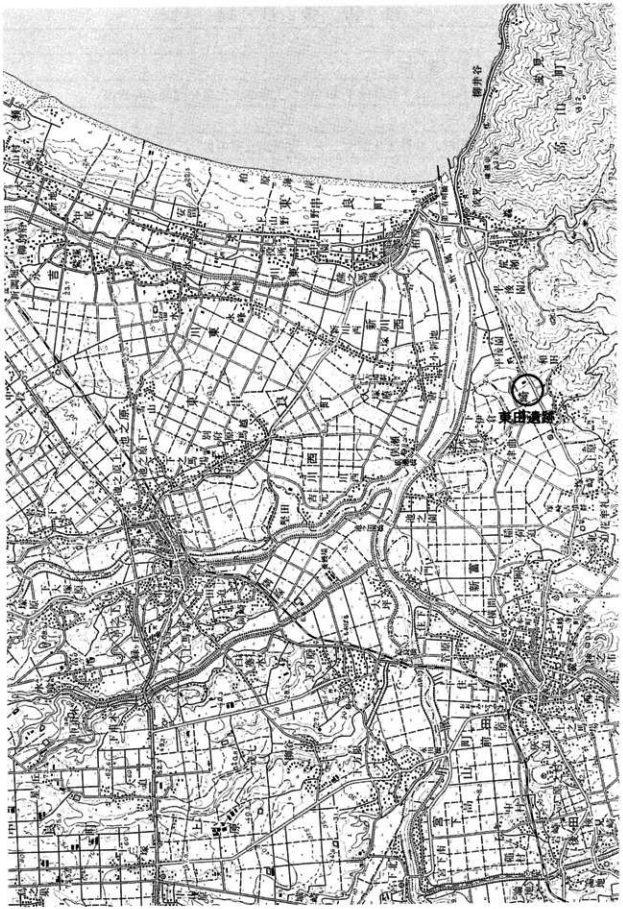
5　本報告書の編集・遺物写真・主な執筆は青崎が行い，立神次郎（第Ⅱ章，弥生・石器），彌栄久志（縄文土器），堂込秀人（住居内遺物）の協力を得た。

報告書抄録

ふりがな	
書名	東田遺跡
副題名	県道高山～吾平線整備事業に伴う土器蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	16
編集者名	青崎和憲
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-56　鹿児島県姶良郡姶良町平松6,252
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしだいせき 東田遺跡	かごしまけんきもつき 鹿児島県肝属 ぐんこうやまちょうのざき 郡高山町野崎 ひがしだ 東田	4648-48	74-134	31°20′	130°59′	1995 11/8～ 12/24	1,200㎡	県道高山～吾平線整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東田遺跡		縄文時代	竪穴住居址　1基	縄文時代後～晩期土器・石器	
		弥生時代	U字溝　1本 方形周溝　1基	弥生時代中～後期土器	
		古墳時代	竪穴住居址　40基	古墳時代土器	



第1図 東田遺跡位置図（5万分の1）

目　　次

序　　文
例　　言
報告書抄録
位 置 図
目　　次
第Ⅰ章　調査の経過…… 1
　第１節　調査の経過…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
第Ⅱ章　位置と環境…… 3
第Ⅲ章　発 掘 調 査…… 10
　第１節　調査の概要…… 10
　第２節　層　　位…… 10
　第３節　縄 文 時 代…… 15
　　(1)　遺　　構…… 15
　　円形竪穴住居…… 15
　　(2)　遺　　物…… 15
　第４節　弥生時代…… 19
　　(1)　遺　　構…… 19
　　①　Ｕ字溝…… 19
　　②　方形周溝…… 19
　　(2)　遺　　物…… 25
　第５節　古墳時代…… 26
　　(1)　遺　　構…… 26
　　①　竪穴住居跡…… 26
　　②　土器溜まり…… 80
　　(2)　遺　　物…… 81
　　大　溝……101
第Ⅳ章　まとめにかえて……104

挿　図

第 1 図　東田遺跡位置図
第 2 図　周辺遺跡……　8
第 3 図　東田遺跡調査区……　9
第 4 図　土層図……11・12
第 5 図　遺構配置図……13・14
第 6 図　円形竪穴住居……　16
第 7 図　円形竪穴住居内出土遺物……　17
第 8 図　縄文時代出土遺物……　18
第 9 図　U字溝出土・弥生土器……　20
第10図　方形周溝……　21
第11図　方形周溝出土遺物(1)……　23
第12図　方形周溝出土遺物(2)……　24
第13図　1号住居……　29
第14図　1号住居……　30
第15図　2号住居……　31
第16図　3号住居……　32
第17図　3号住居(1)……　33
第18図　3号住居(2)……　34
第19図　4号住居……　36
第20図　4号住居(1)……　37
第21図　4号住居(2)……　38
第22図　5号住居……　39
第23図　5号住居(1)……　40
第24図　5号住居(2)……　41
第25図　6号住居……　42
第26図　6号住居……　43
第27図　7号・8号住居……　44
第28図　7号住居……　45
第29図　8号住居……　46
第30図　9号住居……　47
第31図　9号住居……　48
第32図　10号住居……　50
第33図　11号住居……　51
第34図　11号・13号住居……　52
第35図　13号住居……　54
第36図　13号(2)・12号住居……　55
第37図　14号・20号・22号住居……　57
第38図　14号住居……　58
第39図　15号住居……　59
第40図　16号住居……　60
第41図　24号・28号・31号住居……　62
第42図　21号(1)・22号住居……　63
第43図　21号(2)号住居……　64
第44図　24号住居……　65
第45図　24号住居……　66
第46図　25号住居……　67
第47図　26号住居……　69
第48図　26号住居(1)……　70
第49図　26号住居(2)……　71
第50図　27号住居……　72
第51図　27号住居出土遺物(1)……　73
第52図　27号住居出土遺物(2)……　74
第53図　28号・29号・30号……　75
第54図　31号・34号・35号……　76
第55図　竪穴住居実測図12号ほか……77・78
第56図　土器だまり……　80
第57図　土器だまり出土遺物(1)……　82
第58図　土器だまり出土遺物(2)……　83
第59図　土器……　84
第60図　出土土器……　85
第61図　出土土器……　86
第62図　出土土器……　87
第63図　出土土器……　88
第64図　出土土器……　89
第65図　出土土器(手づくね)……　91
第66図　出土土器……　95
第67図　出土土器……　96
第68図　出土土器……　97
第69図　出土土器……　98
第70図　須恵器(1)……　99
第71図　須恵器(2)……　100
第72図　大溝……　102

表 目 次

表－1　周辺遺跡……　8
表－2　主な竪穴住居……　27
表－3　主な竪穴住居……　28
表－4　手づくね計測表……　91

図　　版

図版 1　東田遺跡竪穴住居群 ……106
図版 2　東田遺跡遠景・調査風景 ……107
図版 3　縄文時代円形竪穴住居 ……108
図版 4　26号住居内土器出土状況……109
図版 5　26号・5号・6号住居……110
図版 6　3号・9号住居・方形周溝 ……111
図版 7　21号住居他……112
図版 8　12号・24号住居 ……113
図版 9　大溝他・U字溝 ……114
図版 10　土器出土状況 ……115
図版 11　土器出土状況 ……116
図版 12　土器だまり ……117
図版 13　円形竪穴住居内出土 ……118
図版 14　U字溝出土遺物 ……119
図版 15　方形周溝内出土遺物 ……120
図版 16　出土遺物 ……121
図版 17　出土遺物 ……122
図版 18　出土遺物 ……123
図版 19　出土遺物 ……124
図版 20　出土遺物 ……125
図版 21　出土遺物 ……126
図版 22　出土遺物 ……127
図版 23　出土遺物 ……128
図版 24　出土遺物 ……129
図版 25　出土遺物 ……130
図版 26　出土遺物 ……131
図版 27　出土遺物 ……132
図版 28　出土遺物 ……133
図版 29　出土遺物 ……134
図版 30　出土遺物 ……135
図版 31　出土遺物 ……136
図版 32　出土遺物 ……137
図版 33　出土遺物 ……138
図版 34　出土遺物 ……139
図版 35　出土遺物 ……140
図版 36　出土遺物 ……141
図版 37　出土遺物 ……142
図版 38　出土遺物 ……143
図版 39　出土遺物 ……144
図版 40　出土遺物 ……145
図版 41　出土遺物 ……146
図版 42　出土遺物 ……147
図版 43　出土遺物 ……148
図版 44　出土遺物 ……149

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至までの経過

鹿児島県教育委員会は，埋蔵文化財の保護と活用を図るために諸開発関係機関と事業着手前に文化財の有無について協議し開発との調整を図っている。

鹿児島県農政部（鹿屋耕地事務所）は，肝属郡高山町野崎地区にほ場整備事業の計画にあたり，事業計画地内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会（以下，県文化課）に照会した。県文化課は，これを受け平成元年・２年に埋蔵文化財の分布調査および確認調査を実施し，事業対象地には遺跡（東田遺跡）が存在することが確認され，協議の結果，埋め土工法等の設計変更によって遺跡保存を図った。なお当事業区外にも遺跡が広がることも予想された。

鹿児島県土木部（鹿屋土木事務所）は平成４年度に，県農政部が平成２年度に実施した高山町野崎地区ほ場整備事業区に隣接して縦走する県道高山～吾平線の整備事業を計画した。県教育委員会は，鹿屋土木事務所と協議し，路線内に位置する東田遺跡の発掘調査を平成４年に実施した。調査の結果，縄文・弥生・古墳時代の遺物が発見されたが，遺構等は発見されず調査区東側の近世の溝等によって遺跡は撹乱され，当調査区以東には遺跡は広がらないものと予想された。発掘調査終了後，道路整備事業が進む中，昨年の発掘調査区以東の平成５年度事業施工中に，地元住民より土器が出土しているとの通報が事業者にあり，県文化課は現地で確認し，鹿屋土木事務所とその取り扱いについて協議した結果，発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は，県立埋蔵文化財センターが行い，調査は平成５年11月８日～12月24日にかけて実施した。

第2節　調査の組織

＜発掘調査・平成５年度＞

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村正弘
調査企画	〃	次長	水口俊雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	青崎和憲
	〃	文化財主事	長野真一
		文化財研究員	富田逸郎
	〃	文化財研究員	東　和幸
	〃	文化財研究員	前迫亮一
調査事務	〃	主査	成尾雅明
	〃	主事	中村和代

調査における実測および写真撮影等，県立埋蔵文化財センター職員の大野繁行，繁昌正幸，堂込秀人，鶴田静彦，栗林文夫，園田逸美があたった。

<整理・報告書作成・平成７年度>

作成主体	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村正弘
作成企画	〃	次長	川原信義
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
作成担当者	〃	文化財主事	青崎和憲
事務	〃	主査	成尾雅明
	〃	主事	追立ひとみ

整理報告書作成については，当センター職員立神次郎，堂込秀人，繁昌正幸の支援と作業員の協力を得た。

第Ⅱ章　調査の位置及び環境

東田遺跡は，鹿児島県肝属郡高山町野崎字東田に所在し，肝属川によって形成された沖積平野の一角で，肝属平野の東南部端の水田地帯内にあたる。

遺跡の所在する大隅半島は，県本土の中央部に陥入した鹿児島湾を挟んで，東部に南へ向かって突出した地域であり，西は鹿児島湾，東は志布志湾と太平洋に面し，北東部は宮崎県との県境を成し，北西部は姶良郡に相接している。

この大隅半島は，肝属全域と曽於郡の南部を含む地域で，半島の南部には肝属山地があり，北西部には高隈山地が，北東部には宮崎県境の鰐塚山地の末端がのびている。これらの山地に囲まれた地域は，広大なシラス（姶良丹沢火山灰）堆積地域で，さまざまなシラスの浸食地形が見られる。

遺跡の所在する高山町は，大隅半島のほぼ東南部中央にあり，北側には大隅半島最大の肝属川を境として東串良町や串良町，西側は吾平町や鹿屋市，南側は甫与志岳（968ｍ）を中心とした国見山系の山々となり内之浦町や大根占町とそれぞれ相接している。また，東側には石油備蓄基地のある志布志湾に面している。

高山町の地勢は，概して南側が高く北側へ行くにつれ次第に低くなり，最南部には花崗岩を基盤とする国見山系とも呼称されている約1,000ｍに近い肝属山系から，中生層の砂岩や頁岩から成る約300ｍ内外の低い山地となり，東側は海岸部まで山地が迫っており急崖を呈している。これらの山地を源とする高山川や荒瀬川等の中小河川は肝属川へ流れ込み，浸食谷を多く形成しており荒瀬川に見られるような轟の滝などの景勝地も形成している。

一方，国見山地から北側へは，約20ｍから60ｍの緩やかな台地が広がり畑地地帯を形成し，低地へとのびている。低地との境付近には舌状台地も多くみられる。さらに，肝属川域の数ｍの低地となり広大な水田地帯を形成している。

本遺跡の周辺は，東串良町との境界に近い和田集落に隣接した県道敷を含む水田内に位置している。北側は，肝属川が東流しているが，現在では河川改修がすすみ，複雑に入り込んだ旧河川跡が行政区画区域となり，かなり蛇行していたようすが推察され，過去には氾濫が多かったという。

この肝属川は，高隈山地の御岳に源を発し，姶良川・高山川・串良川の支流と合流して志布志湾へ蛇行しながら流入している。この河川流域は肥沃で広大な肝属平野が形成され，水田地帯となっている。さらに，北側を概観すれば，志布志湾沿岸には新旧の砂丘が北東方向へのび，この砂丘と並行して永吉台地となり，串良川を挟んで広大な笠野原台地へと続いている。南側は肝属山地へ続く台地や丘陵が迫った地勢となり，西側は水田を経て高山町の市街地などが所在する新富台地へと続いている。

本遺跡は，このような環境に位置しているために，周辺には遺跡地も多い。周辺遺跡について概観すれば，これまで旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡には，川上の岩屋遺跡をはじめ新富の鐘付遺跡や後田山下遺跡などが縄文時代早期，後田山下遺跡では縄文時代前期及び中期の遺跡でもある。後田の瀬戸宇治遺跡・道中原遺跡・山ノ下遺跡・川上の片野遺跡・奥野遺跡・折小野遺跡などは縄文後期で，指宿式土器や市来式土器などを確認している。野崎和田の和田城跡遺跡・有明の床滑遺跡をはじめ，乙子神社遺跡を含む海岸沿の畑地や水田内一帯には，縄文晩期の遺跡がみられる。

後田山下遺跡は，農道整備事業により平成４年から平成６年から３か年計画で調査が実施され，縄文時代早期の前平式土器・塞ノ神式土器・手向山式土器をはじめ，縄文時代前期の轟式土器，縄文時代中期の春日式土器，縄文時代後期の岩崎式土器や指宿式土器などが出土していることから長期にわたり生活した痕跡がみられる。

また，後期の遺構として土坑１基が検出され，遺物は，土器のほかに石鏃・石匙・石斧・磨石・石皿等の石器も出土し，石斧製作所ではないかと推定される箇所も検出されている。

高山町における縄文時代の遺跡は，町の地勢やこれまでの発掘調査の事例が少ないことから弥生時代や古墳時代の遺跡に比べるとその数は非常に希薄なものである。

弥生時代についてみると，肝属川流域に広がる肥沃な低湿地は，弥生時代から始まったといわれる水田稲作農耕に適した土地で，その周縁にある台地上には例外なくと言っていいほど弥生時代の遺跡が散在している。特に，弥生時代中期になると遺跡の数は増大する傾向がみられ，瀬戸内・機内地方との交流も頻繁に行われるようにな環境であったと言われている。

新富の花牟礼遺跡では，昭和24年に年東大の駒井和愛博士，八幡一郎氏等による調査で竪穴住居跡が確認され，本県で最初の竪穴住居跡の発見として著名である。この住居跡は，床面直径６ｍほどの隅丸の平地住居であると報告されている。当時の調査では，包含層が黒色土のために竪穴住居の掘り込みが確認されなかったのではと推察できるが，その中央部に炉跡と周辺部に柱穴がならんで検出され，弥生式土器と磨製石鏃が出土したと報じている。

後田白坂の瀬戸口原Ｃ遺跡・永野遺跡では，土器片とともに石包丁及び磨製石鏃等が，同じ永野遺跡では，籾殻圧痕のある土器片の採集がある。波見荒瀬にある松山遺跡では，石包丁・打製石斧・磨製石斧のほか籾殻圧痕のある土器片が確認され，下永山遺跡では土器片と打製石斧などが大隅地区埋蔵文化財分布調査により発見されている。

野崎の塚崎遺跡は，国指定史跡の塚崎古墳群が所在する標高約20ｍの台地内に所在し，歴史民俗資料館建設事業及び大隅地区分布調査の一環として調査が行われている。この遺跡は，弥生時代中期の山ノ式土器が多く，甕形土器・大型甕形土器・壺形土器・蓋形土器等の器種とともに土製勾玉も出土している。壺形土器には，櫛描波条文を施しているものもある。この櫛描波条文は，瀬戸内・機内地方を中心にした櫛描文（櫛目文）土器が在地の山ノ口式土器に施されており，交流の一旦を垣間見ることができる遺跡である。

野崎の上原遺跡は，昭和33年に上原入口の道路断面に竪穴住居跡と思われる落ち込みが確認されている。また，昭和52年の大隅地区埋蔵文化財分布調査の一環で，調査を行った際にも竪穴住居跡と思われる遺構が確認されいる。

昭和63年のシラス土採取に伴う調査では，遺跡包含層の有無を確認する目的で実施された結果，弥生時代の古道・柱穴・土坑などを検出し，遺物は，山ノ口式土器・古墳時代の成川式土器や弥生時代で東九州や瀬戸内地方でよくみられるタイプの石包丁などが出土している。

野崎の東田遺跡は，今回調査を実施した遺跡の隣接部に位置し，平成５年に県道高山一吾平線道路整備事業に伴う事前調査として行われている。この遺跡では，遺構として溝状遺構が検出されたのみであったが，調査区を北方向に走る凹地状の窪地から刻目突帯文土器の時期から中世の時期の遺物が混在して出土した。

本遺跡の主な出土遺物には，縄文時代の刻目突帯文土器・組織痕文土器・孔列文土器をはじめ，

弥生式土器の山ノ口式土器や古墳時代初頭ぐらいまでに位置づけられる安国寺式土器・古墳時代の成川式土器，そのほか土師器・須恵器・陶器・磁器等が出土している。一方，石器としては，磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・凹石・石皿・石鍋などが出土し，鉄器として刀子１点がみられている。

これらの土器には，在地の山ノ口式土器や成川様式土器とともに，凹線文土器や櫛描文土器，安国寺式土器などがあり，東九州や瀬戸内地方との交流があったことが知られる遺跡である。

波見西遺跡は，平成７年に調査が行われた遺跡で，肝属川により形成された沖積平野の標高約３mの水田内に位置している。弥生時代中期の山ノ口式土器を有する竪穴住居跡５基を検出している。同じ波見の荒瀬では，松山遺跡が周知され，石包丁・打製石斧・磨製石斧・籾殻圧痕のある土器片がみられ，一方，下永山遺跡は，大隅地区埋蔵文化財分布調査により確認された遺跡で，土器片とともに打製石斧が表採されている。

古墳時代においても弥生時代と同様に遺跡の数は多く，いたるところで成川式土器が採集され，集落遺跡をはじめ埋葬遺跡等の遺跡が周知及び確認されている。

古墳時代の集落遺跡には，昭和55年に調査が行われた花牟礼の大戸原遺跡があり，成川式土器に伴う竪穴住居跡が14基（うち11基はプラン未確認）・土坑11基，・溝状の土坑２基，柱穴群，溝状遺構などが検出され，古墳時代の集落跡であることが確認されている。出土遺物の大半が成川式土器で，甕形土器は刻目突帯を有し，口縁部は外反・直口なすもの，壺形土器の口縁は短い外反型のタイプが大半であったと報告され，磨製石斧・局部磨製石斧・磨石・凹石・敲石・石錘などの石器も出土している。

後田山下遺跡は，縄文時代のところで若干触れたが，古墳時代の時期も中心のひとつで，成川式土器とともに竪穴住居跡３基，溝状遺構なども検出され，土器は甕形土器・壺形土器・高坏形土器などが多くみられ，完形品も多く出土している。

このほか，野崎の東田遺跡や上原遺跡などが上げられるが，弥生のところで略述してある。

宇都の上遺跡は，肝属川の支流高山川に東面する標高約３０mの台地上にあり，地主が耕作中に発見した遺跡で，土師器の坩といわれる小型丸底壺２点である。いずれも古墳時代の早い時期で，４世紀後半ごろのものと報告されている。

後田の軍並木では，須恵器には坏蓋や樽型瓶などの表採がある。この樽型瓶は，須恵器Ⅰ式で５世紀に畿内方面からの移入品であるとされ，隣接の串良町上小原古墳群から出土したものを含めて県内では２例目で希少なものである。

埋葬跡としては，高塚古墳や地下式横穴も塚崎古墳群をはじめ，宮ノ上古墳群・辺塚古墳群・辻古墳群・稲村古墳・津曲古墳群・軍原古墳群・上原古墳や上原地下式横穴群・上西方古墳群・西横間古墳群及び横間地下式横穴群・丸岡古墳群・北後田古墳群（検見崎古墳群）・白坂瀬戸口地下式横穴群など県内でも有数の古墳地帯である。以下，いくつかの古墳群や地下式横穴群について，概観してみたい。

塚崎古墳群は，野崎塚崎台地に広がる日本最南端の古墳群で，肝属川により形成された沖積平野を見下す標高約20mの舌状台地内に所在し，前方後円墳が４基，円墳が39基で構成され，昭和20年２月20日に国の指定史跡に指定されている。また，塚崎１号墳上にある塚崎の大クスは国の天然記念物に指定されている

この塚崎古墳内には，これまで約10基の地下式横穴群の存在も確認され，昭和5年には鳥居龍藏博士による調査も行われている。

辺塚古墳群は，富山の辺塚に所在する古墳群で，標高約35mの台地内にあり，円墳8基が，辻古墳群は，富山の辻に所在する古墳群で，台地の東西に肝属川の支流中山川などが流れる舌状台地内にあり，円墳8基で構成されているが，すでに墳丘の削平を受けているものもあり，ともに詳細は明らかでない。

宮ノ上古墳群は，宮下の宮ノ上に所在する古墳群で，肝属川の支流中山川に東面している標高約30mの台地上にあり，円墳5基で構成されている。

軍原古墳群は，前田の軍原に所在している古墳群で，肝属川の支流高山川に東面する標高約50mの台地上にあり，円墳10基が周知されている。この古墳群の周辺では，須恵器の樽型甕や坏などが採集され，畿内地方との交流を示す資料である。

前田の上ノ原古墳・上ノ原地下式横穴群は，前田の上原に所在する円墳及び地下式横穴群で構成され，肝属川の支流である高山川に西面する標高約25mの台地上にあり，古墳の存在があったが，宅地化のために消失している。本古墳の主体部には凝灰岩組合箱式石棺で，直刀・刀子・鉄斧・銅鏡などが副葬品として確認されている。

また，同台地には11基の地下式横穴群が発見されている。うち，1基については，昭和54年に高山町老人福祉センターへの取付け道路整備事業中に玄室の一部が削平を受け発見されている。

この地下式横穴は，全長4.5mで，竪穴部は玄室の南側に位置し，その規模は2m四方のほぼ方形で，深さ1.8mを測り，玄室及び竪穴部を掘った時の土で埋め戻してあった。玄室内には，幅70㎝，長さ180㎝，高さ35㎝の軽石製組合せ石棺が納められていたが，天井部の落盤のため原形は留めず散乱し，羨道部の天井部も同様な状態であった。この墓の時期については，玄室の形態が切妻の家型で平面プランが長方形をなし，羨道部が妻入であることから古いタイプと報告されている。副葬品としては，棺内に鹿角製の柄をもつ刀子1点と棺外には6世紀前半に比定される土師器の椀が埋納されていた。

上西方古墳群は，前田の諏訪ノ上・堂園ノ上・長能寺ノ上に所在する古墳群で，円墳5基で構成され，詳細は不明である。地下式横穴2基が発見され，1基は下西方で，軽石製組合石棺を持ち，もう1基は西方で，昭和48年の砂防工事中に発見され，県教育委員会に調査されている。工事中発見のため定かでないが，玄室は長方形の家形プランを呈していたとの報告がある。

西横間古墳群・西横間地下式横穴群は，新富の横間及び西横間に所在する古墳群で，肝属川及び高山川により形成された沖積平野へ突出した標高約20mの舌状台地上に位置し，円墳8基が周知されているが，その後の宅地化のために損傷を受けている。

古墳の調査は，ほとんど行われていないが，昭和53年に西横間古墳群の4号墳が調査され，埋葬主体が地下式横穴でよくみられる軽石製組合石棺であることが判明している。

西横間地下式横穴群は，同古墳群と同台地に位置し，これまで宅地や道路工事等により11基が発見され，これまでにも埋葬施設として精巧な軽石製組合石棺が発見され，直刀・蕨手刀・蛇行鉄剣・鉄鏃・刀子・馬具・貝釧などを持つもの，須恵器や土師器を供献するものもみられる。

丸岡古墳群は，新富の米山寺墓地公園周辺に所在する古墳群で，西横間古墳群と同一台地で，僅かに南側に位置している。墓地公園造成でかなりの影響を受け詳細は不明である。

北後田古墳群（検見崎古墳群）は，後田の稲村・検見崎に所在する古墳群で，肝属川の支流境川に西面する標高約20～30mの台地上に位置し，円墳4基が周知されている。

平成3年に土地造成中に，地下式横穴群2基が発見され，町教育委員会により調査された結果，1号は，軽石製組合石棺を持つもので，さらに追葬が想定される地下式横穴としては珍しく，玄室が長方形の家形プランの古式タイプで，鉄剣（鞘金具）・刀子・鉄斧・鏃先・鉄鏃等の副葬品が発見され，2号は，羨道部の取り付けは平入りで新しいタイプで，副葬品は皆無との報告がある。

これまで古墳群や地下式横穴群について概観してきたが，南九州独自の地下式横穴という墓制も高塚古墳と共存するようになり，当地方の古墳時代の特質がうかがわれる。また，地下式横穴は，地下にある施設のために偶然で突発的に発見されるのがほとんどで調査されたものは少ない。

古墳時代以降の遺跡については，調査例が希薄であり，採集品が主である。これまで横間地下式横穴群では，須恵器・土師器・鉄器などが知られている。この蕨手刀は，この地下式横穴が8世紀までに造られていたことを示す資料であると報告されている。

調査例としては，波見西遺跡があり，農業基盤整備事業に伴って弥生時代の竪穴住居跡5基とともに，奈良・平安時代の遺構・遺物が発見されている。遺物は土師器の坏や椀などが大量に破棄された状態で土器溜まりや掘立柱建物跡3棟を検出している。

西大園遺跡・西山ノ上遺跡・平後園などから遺物が表採され，大園遺跡は，野崎の西大園に所在し，肝属川により形成された沖積平野に突出した標高約20mの舌状台地上にあり，土砂採取により先端部が削平を受けている。土師器の甕や坏などの破片が採集され，墨書土器の土師器破片もみられている。平成7年には県営農業基盤整備事業に伴って確認調査が行われてた結果，平安時代の土師器の坏や椀の完形品が数個体がみられる。

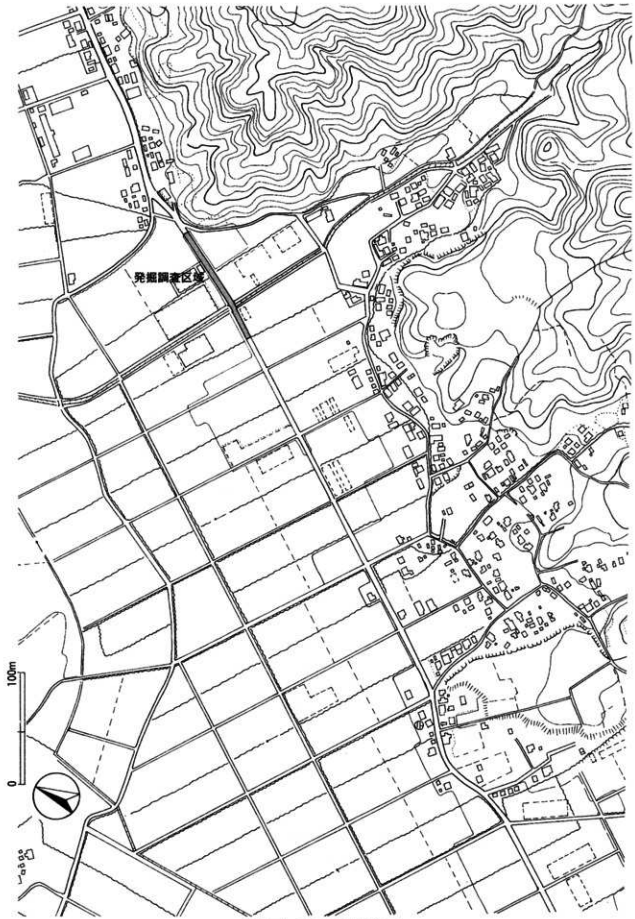
西山ノ上遺跡は，波見の西山ノ上に所在しており，肝属川の支流荒瀬川に東面する標高約100mの丘陵地に位置し，須恵質の風字硯が採集されている。また，野崎の平後園のミカン園から魚住古窯跡で生産されたものと類似した片口鉢が採集品として歴史民俗資料館に保管してある。

中世においては，肝付氏が後田の本城（高山城）に居城を築き，本遺跡の後背地の台地上に和田城跡が所在しているのをはじめ，検見崎城跡・富士城跡等の出城が築かれている。

第２図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
1	東田	高山町野崎東田	沖積地	縄文～中世	弥生～古墳が中心	本報告
2	和田城跡	〃　野崎字和田	〃	鎌倉？年 永禄９年	野崎氏居城か。二の丸 馬場、堀跡確認。	
3	横溝	〃　野崎和田横溝	山麓	弥生中期	弥生土器・打製石斧	
4	平後園	〃　〃　平後園	山腹	弥生	須恵器・磨製・打製石斧	
5	西山ノ上	高山町波見西山ノ上	山腹	奈良	須恵器（風字硯）	高山町歴民館に展示
6	波見城跡	〃　〃　字轟	〃	弘安の役 永禄年間		
7	波見の陣跡	〃　波見字牟礼	山麓	弘安の役 永禄年間		
8	長谷	〃　〃　荒瀬長谷	〃	古墳	土師	
9	西大園	〃　〃　西大園	台地末端	弥生	弥生土器	
10	天道山墓跡	〃　〃　天道山	丘陵	鎌倉中期～ 永禄９年		
11	上原	〃　〃　上原	〃	弥生中期	弥生土器・磨製石斧	S33住居跡発見
12	塚崎城跡	〃　野崎字塚崎	平地	南北朝～ 永禄年間		
13	塚崎古墳群	高山町野崎塚崎	台地末端	古墳	土師器	
14	丸岡古墳群	〃　〃　米山寺墓地	〃	古墳	古墳群	
15	横間土址	〃　〃　横間	〃	弥生・古墳		発掘調査済み。詳細は調査報告書参照。遺物は当館収蔵資料を含む
16	弓張城跡	〃　新富字城山他	丘陵	正平５年～ 天正９年		（別）鷲ノ城
17	津曲	〃　〃　津曲	沖積地	弥生	弥生大型壷	
18	子伊倉城墓	東串良町新川西下伊倉	微高地	弥生・中世		
19	別府ヶ城跡	〃　小字別府ヶ城	〃			
20	堀込城跡	〃　〃　字鼻尾	〃			
21	笹塚城跡	〃　〃　字笹塚	〃			
22	唐仁古墳群	〃　川西	〃	古墳		
23	新川西	〃　新川西妻塚	沖積地	弥生	弥生土器	
24	曲之城跡	東串良町新川西字曲之城	平地			
25	古市	〃		弥生・古墳	土師、奈良平安	
26	三十石	〃　〃　三十石		弥生・古墳	成川式土器	
27	役所	〃　〃　役所	〃	〃　中期	整形・高杯等	
28	肝付氏古城跡	〃　下小原字堀田	〃	鎌倉時代～ 永禄９年		（別）城ノ園
29	肝付氏古城跡	串良町岡崎字西ノ丸	〃	平安末期～		（別）西ノ丸居館
30	堅田	串良町上小原岡崎堅田	〃	弥生	成川式	
31	北田ノ上古墳	〃　〃　北田ノ上	〃	古墳		
32	岡崎古墳群	〃　有里岡崎	台地末端	古墳		

表－１　周辺遺跡一覧表



第3図　東田遺跡調査区

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査の概要

本遺跡の調査は，平成５年度の県土木部（鹿屋土木事務所）の県道高山～吾平線整備事業工事中発見による緊急発掘調査であった。遺跡の取り扱いについて鹿屋土木事務所（工事業者関係者を含む）と県教育庁文化課・県立埋蔵文化財センターの三者で協議し，発掘調査を実施することとなった。

発見時には現道路面のアスファルト以下，床掘りが行なわれており，また一部遺物包含層の直上まで掘り下げられていた。調査対象区は，平成４年度発掘調査区で道路整備事業工事終了地点の西側端に隣接した所から東方の波見方向へ約150ｍの地点までの約1,200㎡が調査対象面積であった。

発掘調査は，まず平成４年度調査時に設定した東西の基準線を基本線として，各10ｍ毎のグリッドを設けて進めた。

遺跡は，北側前面に串良川が肝属川と合流する肥沃な三角州が形成された沖積平野が広がった水田地帯と国見岳から延びた丘陵裾部（この裾部に現在の集落が点在する）に挟まれた標高約５ｍの微高地に立地する。また，西側約２kmの地点に塚崎古墳群や肝属川を越えて岡崎古墳群が位置する。

調査の結果，現地表面から約２ｍ下の砂層から（Ｘ層が遺物包含層）古墳時代の竪穴住居が総計40基発見され，微高地に形成された古墳時代の集落跡として貴重な資料となった。また，縄文後期の円形竪穴住居や弥生後期末の方形周溝も検出された。

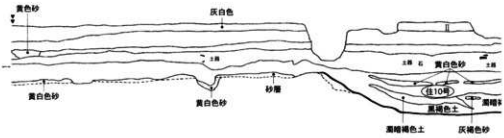
第２節　層　序（第６図）

本遺跡は沖積平野に立地するため，国見山系から流出した河川堆積物（主として砂）による層を形成している。Ⅰ層の客土以外は全て砂層である。ここでは，基本的な層序を示した各区の堆積状況は次ページ以下の土層断面図にあるように，場所や地点によって堆積や層厚，色調等に微妙な差異が見られる。

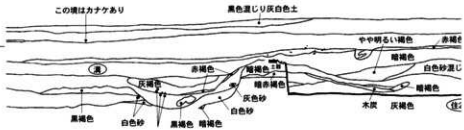
Ⅰａ層……明灰色砂質土を呈し，シラスを客土とする。
Ⅰｂ層……グライ土混じり暗灰色土で，旧水田面である。
Ⅱ層……灰色で細粒砂層。
Ⅲ層……黄褐色混じり灰色細粒砂のカナケ層となる。
Ⅳ層……青灰色で細粒砂層。
Ⅴ層……黄褐色砂混じり灰色細粒砂のカナケ層。
Ⅵ層……青灰色細粒砂層。
Ⅵ層……黄白色砂層（部分的に宙水状に見られる）。
Ⅶ層……暗灰色細粒砂層。
Ⅷ層……赤点粒子混じりの赤褐色土砂層。
Ⅸ層……黒褐色土で粒子が粗い砂層。
Ｘ層……暗茶褐色土を呈する砂層で本遺跡の遺物包含層である。約20～30㎝堆積。
Ⅺ層……黄褐色砂層。　Ⅻ層……黄色粗粒砂層。

なお，古墳時代の住居跡遺構は，堆積層の色調等に差異（ある程度の色調の幅）があるものの，Ⅺ層を掘り込んでおり，明～黒褐色を呈する土（Ｘ層該当）を埋土としている。

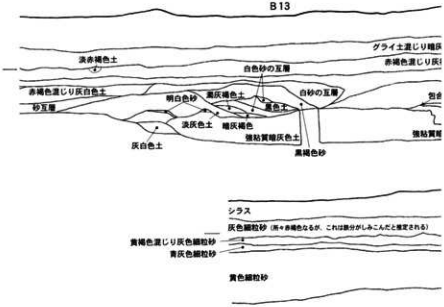
B9

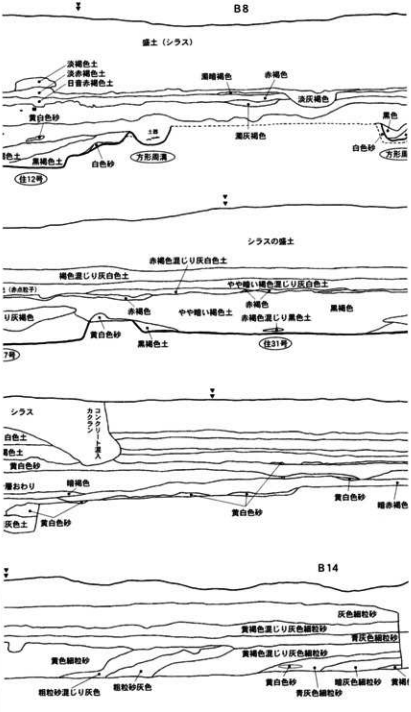

黄色砂
灰白色
黄白色砂
黄白色砂
砂層
黄白色砂
注10層
黒褐色土
黒暗褐色土
灰褐色砂

B11

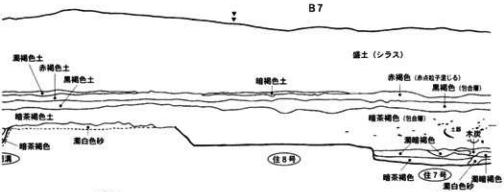

この境はカナケあり
黒色混じり灰白色土
やや明るい褐色
暗褐色
白色砂混じ
赤褐色
暗褐色
暗赤褐色
灰褐色
灰色砂
暗褐色
木炭
灰褐色
黒褐色
白色砂
黒褐色
暗褐色
白色砂

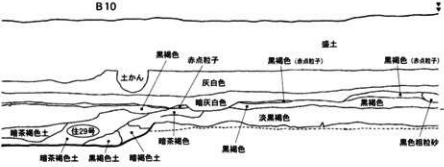
B13

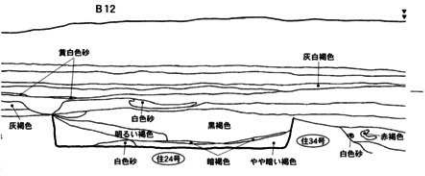

グライ土混じり暗
赤褐色混じり灰
淡赤褐色土
白色砂の互層
赤褐色混じり灰白色土
明白色砂
灰褐色土
白砂の互層
砂互層
黒色土
淡灰色土
暗灰褐色
強粘質暗灰色土
灰白色土
黒褐色砂
強粘質
シラス
灰色細粒砂（黒＋赤褐色なるが、これは混分がしみこんだと推定される）
黄褐色混じり灰色細粒砂
青灰色細粒砂
黄色細粒砂

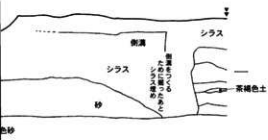

B8
盛土（シラス）
淡褐色土
淡赤褐色土
日置赤褐色土
黒褐褐色
赤褐色
淡灰褐色
黒色
黄白色砂
黒灰褐色
白色砂
方形周溝
黒褐色土
白色砂
住12号
シラスの盛土
赤褐色混じり灰白色土
褐色混じり灰白色土
やや暗い褐色混じり灰白色土
赤褐色
やや暗い褐色土
赤褐色
赤褐色混じり黒色土
黒褐色
黄白色砂
黒褐色土
住31号
シラス
コンクリート流入
カクラン
白色土
黄白色砂
暗褐色
黄白色砂
黄白色砂
暗赤褐色
灰色土
黄白色砂
B14
灰色細粒砂
黄褐色混じり灰色細粒砂
黄灰色細粒砂
黄褐色混じり灰色細粒砂
黄色細粒砂
黄白色砂
暗灰色細粒砂
黄灰色細粒砂
粗粒砂混じり灰色
粗粒砂灰色

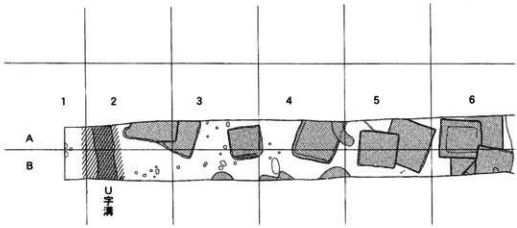
第4図　土層

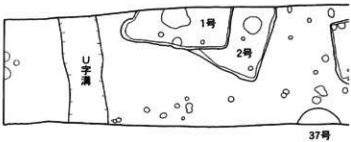

B7
盛土（シラス）
黒褐色土
赤褐色土
黒褐色土
暗褐色土
暗茶褐色土
暗褐色
黒白色砂
暗褐色土
赤褐色（赤点粒子混じる）
黒褐色（包含層）
暗茶褐色（包含層）
黒暗褐色
木炭
往8号
暗茶褐色
往7号
黒暗褐色
黒白色砂


B10
盛土
黒褐色
赤点粒子
黒褐色（赤点粒子）
黒褐色（赤点粒子）
土かん
灰白色
暗灰白色
黒褐色
決黒褐色
暗茶褐色土
往29号
暗茶褐色
黒褐色
黒色粗粒砂
暗茶褐色土
黒褐色土
暗褐色土

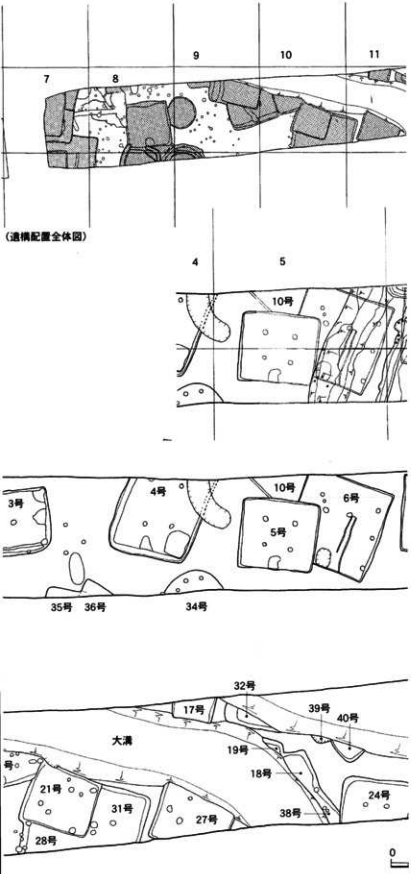

B12
黄白色砂
灰白褐色
白色砂
灰褐色
黒褐色
暗褐色
往34号
赤褐色
白色砂
白色砂
往24号
暗褐色
やや暗い褐色


側溝
シラス
シラス
茶褐色土
砂

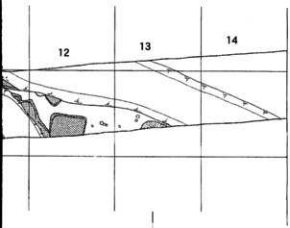

1
2
3
4
5
6
A
B
U字溝

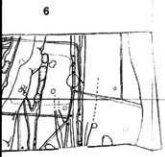

U字溝
1号
2号
37号

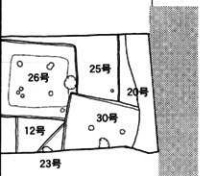
土器だまり
15号
14号
29号
20号
円形竪穴
住居
13号
11号
22号
9号
7号
8号
12号
方形周溝

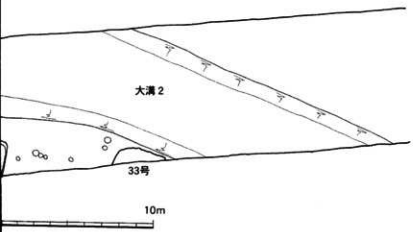

7
8
9
10
11
(遺構配置全体図)
4
5
10号
3号
4号
10号
6号
5号
35号
36号
34号
32号
17号
39号
40号
大溝
19号
18号
21号
31号
27号
38号
24号
28号
0

第5図　遺構配置図


12
13
14


6


26号
25号
20号
12号
30号
23号


大溝2
33号
10m

第３節 縄文時代

縄文時代として，竪穴住居跡が１基と若干土器が出土した。

(1) 遺 構

円形竪穴住居（第６図）

Ａ－９区から長径350㎝，短径320㎝の円形竪穴住居がほぼ完全な状況で発見された。検出面での深さは中央部で13㎝を測る。床面の中心でやや深く壁はゆるやかに立ち上がる。床面の北側と南側には壁から約60㎝の位置に径20㎝，深さ10㎝前後の２本の柱穴を持つ。また，床中心部の西側寄りには，厚さ３㎝で平面状に30㎝～40㎝前後の範囲に焼土が検出された。床面は砂層となるがわずかに硬化している感触を持つ程度である。なお，住居跡の西側は９号住居跡（古墳時代）と重複する。

出土遺物（第７・８図）

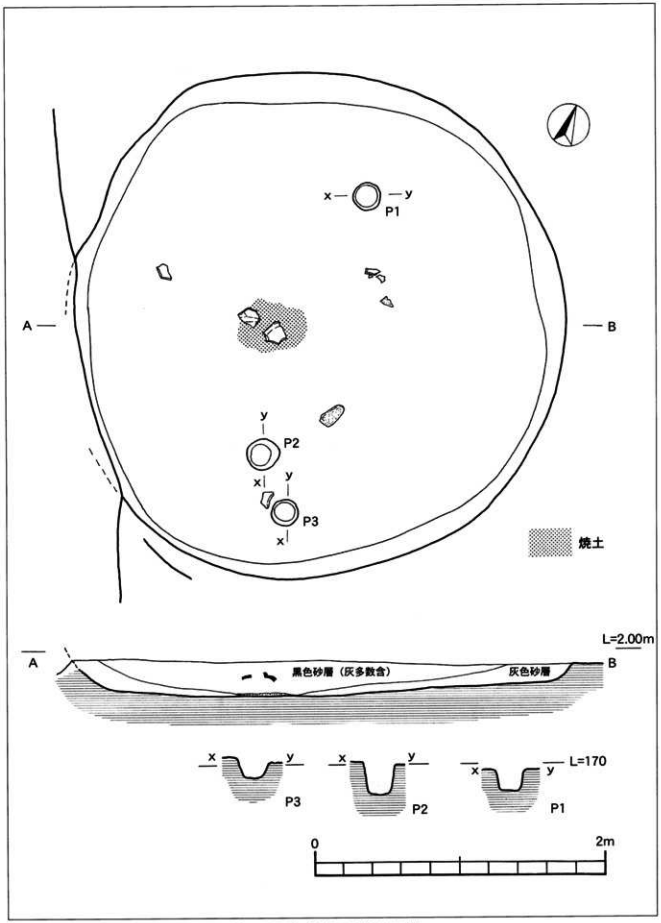
１は，深鉢形土器の頸部から口縁部にかけてである。器形としては直線的に外反し口縁部で外側に丸味を持ちながら曲がる。器面調整は外面を黒色研磨状に，内面は篦ナデ横位及びに斜位に施している。器面の色調は全体的に黒茶褐色であるが，部分的に茶色の所がみられる。文様は口縁部に幅広い凹線を施している。胎土は，金雲母が目立ち石英，長石，角閃石が混入している。２は，深鉢形土器の胴部から口縁部にかけてである。器形としては肩部で「く」の字状に張り，頸部は湾曲し，口縁部はやや内側に向かって立ち上がっている。器面調整は外面を横位に黒色篦研磨を施し，内面は篦撫で施している。器面の色調は外面が全体的に暗茶褐色であるが，部分的に黒茶褐色の焼成されている。文様は口縁部に浅い凹線を２条，肩部に太い連点文を施している。胎土には，金雲母が目立ち細礫，石英，長石，角閃石が混入している。３は，深鉢形土器の胴部から頸部にかけてである。器形としては肩部で「く」の字状に張り，屈折部は盛り上がっている，頸部は湾曲している。外面の器面調整は，頸部を縦位に，肩部を横位に黒色篦研磨で，胴部は縦位に研磨で施し，内面は篦撫で横位に施している。器面の色調は外面の頸・肩部が黒褐色であるが胴部は茶褐色，部分的に黒茶褐色の焼成されている。内面は，全体的に暗茶褐色で，部分的に茶褐色がみられる。文様は肩部に浅い沈線を１条，段を付ける状態で施している。胎土には，金雲母が目立ち細礫，石英，長石，角閃石が混入している。４は，厚手の浅鉢形土器である。口縁部は立ち上がり，頸部で幅狭く湾曲し肩部で「く」の字状に折れ胴部に至る器形である。器面調整は横位の黒色研磨で，口縁部には２条の凹線を施している。器面の色調は，黒褐色である。胎土には，金雲母が目立ち細礫，石英，長石，角閃石が混入している。

これらは，住居内より出土したもので，土器は厚みのある深鉢・浅鉢でセット関係に捉えることができ，縄文後期の三万田式土器の影響を受けた大隅地方に良く見られる末吉町中岳洞窟出土の中岳式に比定できよう。

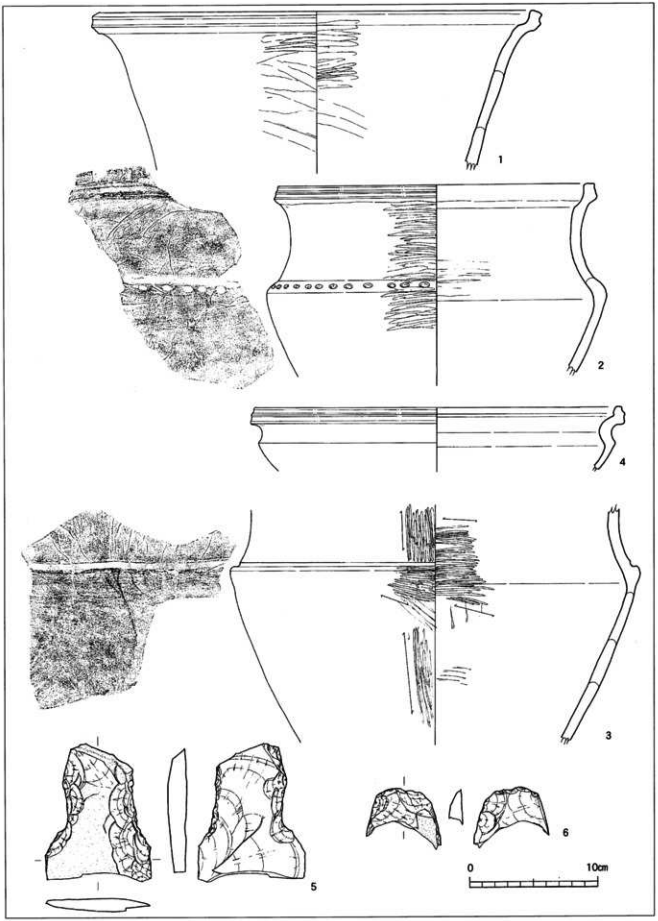
５は，頁岩製の扁平打製石斧である。円礫の自然面残した一次剥片を利用したもので，ラケット状につくっている。柄の部分はやや厚く作り，使用部はやや薄めに作られている。使用部の先端は折れている。６は，扁平打製石斧の柄の頭部分である。石材は頁岩である。

(2) 縄文時代出土遺物（第８図）

７は，凹線と刻み文を組み合わした文様で，断面三角形を持つ深鉢の口縁部である。裏面には貝殻条痕があり縄文後期の市来式に比定される。色調は外面が茶褐色で内面は黒茶褐色を呈する。

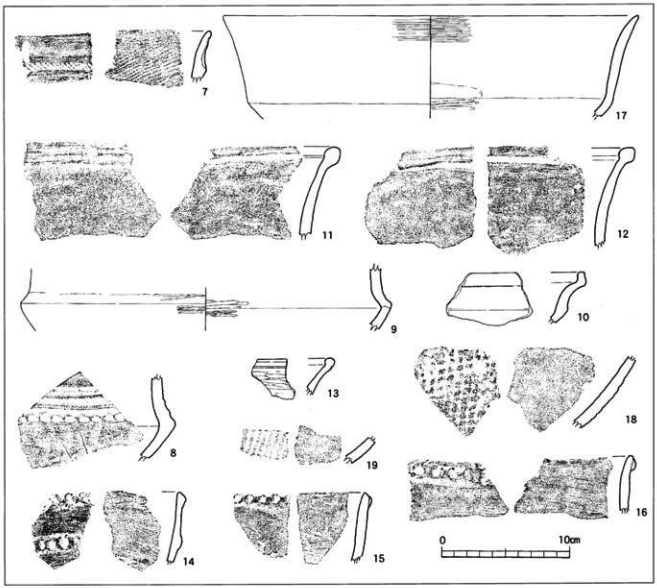


第6図竪穴式住居（縄文時代）



第７図　円形竪穴住居内出土遺物

胎土には雲母，石英，長石，各閃石がみられる。8は，深鉢形土器の肩部で「く」の字状に折れる器形である。篦研磨調整の器面の上に，数条の凹線と太い連点の文様がある。色調は暗茶褐色である。縄文後期の中岳式に比定できる。9は，深鉢形土器の肩部で「く」の字状に折れる器形である。10は，浅鉢である。口縁は立ち上がり頸部は，幅狭く屈曲し胴部は丸味を持つ。色調は明茶褐色で，器面はもろい。中岳式土器の浅鉢に比定できる。胎土には雲母，石英，長石，各閃石がみられる。11は，口縁部を玉縁状に肥厚させた厚みのある大型の浅鉢形土器である。器面は灰茶褐色で横位の研磨調整が見られる。胎土には雲母，石英，長石，各閃石がみられる。この浅鉢形土器時期は器形状からみれば，縄文後期末から晩期初頭であろう。12は，11と同じ器形であるが器面は黒茶褐色である。13は，元来見られる浅鉢の口縁部である。薄手で黒色研磨されている。口縁部は玉縁状になり，器形は外反している。時期としては縄文後期末から縄文晩期初頭と考えられる。14・15・16は縄文晩期末である刻目突帯文土器の深鉢形土器である。内向気味に立ち幅広突帯に幅の広い刻み目を施している。器面の色調は暗茶褐色で，横ナデ調整を施している。胎土には雲母，石英，長石，各閃石がみられる。17は縄文晩期で，ボール状浅鉢の口縁部である。



第8図　縄文時代出物遺物

肩部から外反した器形で，肩部で「く」の字状に折れている。内・外器面は丁寧なナデ研磨があり，色調は外が黒褐色で内が茶褐色である。18・19は縄文晩期でボール状浅鉢の底部にあたる組織痕土器である。18は赤褐色で，粗い網目編み痕である。19の組織痕はこま目のすだれ編み状で，器面は，茶褐色の色調である。

第4節 弥生時代

弥生時代の遺構としては，調査区西側に南北に構築された1条のU字溝を検出した。遺物としては弥生中期～後期終末の土器が出土するが，量的には極めて少ない。

(1) 遺 構

① U字溝（第5図参照）

調査区西側のA・B-1区に県道と直行して，地表面から約2m下，調査区での長さ6.5m，幅約2.4m，深さ約1mを測るU字溝が検出された。遺構検出面は古墳時代の包含層直下から掘り込んでいる。覆土内から弥生中期の土器が出土した。さらに本溝遺構の直下には，重複して幅約3.5m，深さ約1.5m以上の規模の溝が検出されたが湧水や基盤が砂の堆積層ということもあり，県道側で壁面が崩壊した。そのため調査は不能となり完掘出来ず詳細については不明であるが，溝の側面が急傾斜を呈することや深く掘り込まれている状況からV字溝の可能性がある。

出土土器（第9図20～21）

甕形土器と壺形土器が出土している。20は，「く」の字状に折れた口・頸部で受け手状にになり，内側の稜線ははっきりしている。口縁端部は角張以上の沈線がみられる。外面には3条以上の断面三角突起帯がみられ，煤も多く付着している。色調は外面が黒茶褐色で内面が茶褐色である。器面調整は良く，胎土には雲母，石英，長石，各閃石がみられる。弥生中期末～後期にあたる山ノ口式土器に比定される。21は，甕形土器の底部である。器形はいはゆる充実高台と言われているもので，底面は平坦で，縁にはM字状に沈線を施している。器面調整は丁寧な撫で調整で，胎土には，雲母，石英，長石，各閃石がみられる。22は壺形土器の肩部である。外面は，断面M字状突起帯を張り付け丁寧な器面調整を施している。色調は外面が赤茶褐色で，内面は灰褐色である。胎土には，雲母，石英，長石，各閃石がみられる。

② 方形周溝（第10図）

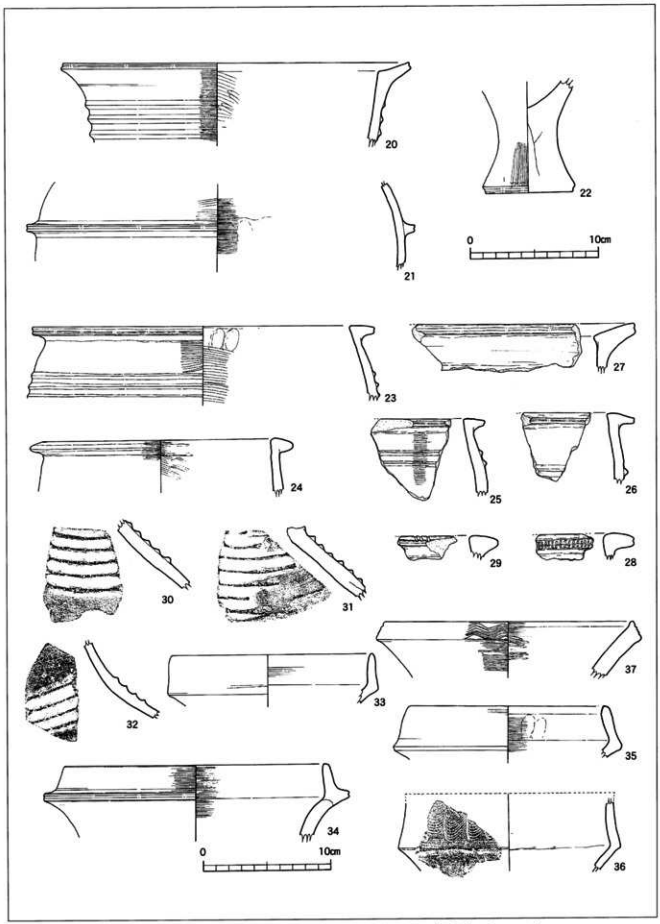
B8区で検出された。遺構の半分以上は調査区外の南側に延びる。西側溝はやや内側に内湾し，東側溝は緩やかに屈曲した平面プランとなり方形周溝と想定される。両溝の末端は幅1.6mの空間となり周溝の陸橋部が想定される。方形周溝の外径は約4.5m，溝の幅は東側で60cm，深さは約60cm，東側は幅50cm，深さ35cmを測る。溝底面はU字状を呈する。

西側周溝内から弥生後期末の甕や壺・蓋がセットで検出された。

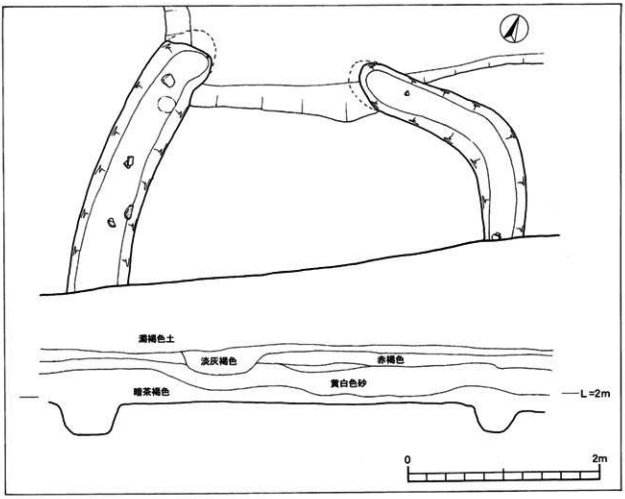
出土遺物（第11・12図）

46・47は壺形土器の完形品である。47は底部付近の一部を欠損している。

46は口縁径18.4cm，最大胴部38.4cm，底径5cm，器高45.2cmを測る。器形は平底をもつ底部から胴部は大きく膨らみ，頸部でしまり，大きく外反する口縁部となる。口縁部端部は僅かに窪む器形で，ナデ整形である。内面は，頸部付近から下位付近までは，指頭を中心とした整形で，口縁部にかけては，ヘラによる調整である。外面はヘラ磨きによる整形で，口縁部は



第９図　Ｕ字溝出土遺物（20～22）・弥生土器一般遺物（23～36）



第10図　方形周溝（弥生）

縦位に，頸部から底部にかけては，斜位及び縦位の整形である。口縁部上位は横位のハケナデ調整による整形である。

胎土には，長石・石英・金雲母などを含み，外面は赤茶褐色や暗茶褐色で，内面の観察できる部位は茶褐色を呈している。

47は口縁径11.8㎝，最大胴部25.3㎝，復元器高29.4㎝を測る。器形は丸底をもつと思われる底部から胴部は大きく膨らみ，頸部でしまり，大きく外反する口縁部となるが，頸部から口縁部までは短い。口縁部の内外面は，横位のハケナデ調整で，内面の頸部付近は指頭による調整を顕著に残している。外面の頸部付近から底部付近にかけては，縦位を中心としたヘラ磨きにより整形している。胎土には、石英・長石・金雲母を含み，外面は赤茶褐色から茶褐色で，内面で観察できる部位は暗茶褐色を呈する。

38～40は，甕形土器である。

38は「く」の字状に外反する口縁部からやや胴部は張って底部へすぼまっていく器形で、中空の脚台を有する完形品である。復元口縁径は29.5㎝で、脚台の裾部は欠落しているが推定復元によれば、器高は28.5㎝を測る。口縁端部は、平坦面を呈しハケなでにより仕上げ、頸部内面には鈍い稜線をもつもので、脚台の中空は浅く調整している。色調は暗茶褐色を呈し、器面の内外面には横位及び斜位のハケナデ調整を全体的に施しているが、内面は僅かであるが摩滅を受けて

いる。残存している胴部付近には，煤の付着が著しく，胎土には長石・石英や多くの金雲母を含んでいる。

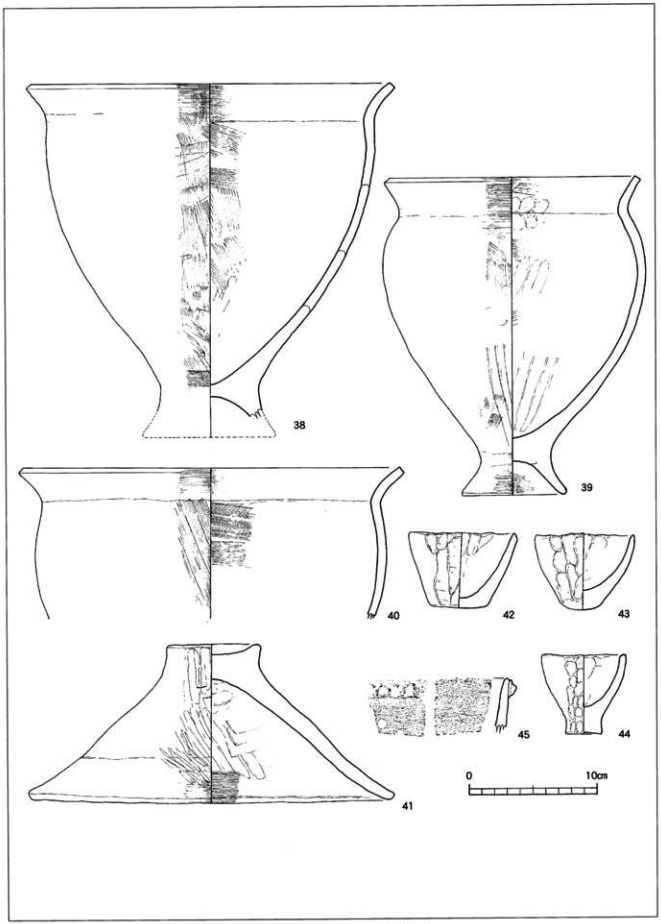
39は「く」の字状に外反する口縁部から胴部は大きく張って底部へすぼまっていく器形で，中空の脚台を有する完形品である。口縁径は，23.4㎝，器高24㎝，底部径11.4㎝を測る。口縁端部は，平坦面を呈しハケナデにより仕上げ，頸部内面には鈍い稜線をもつものである。脚台の中空は浅いものである。色調は赤茶褐色を呈し，外面は斜位のハケナデ，口縁部及び底部周辺は横位のハケナデ調整を施している。内面は頸部付近に指頭調整後横位のハケナデを施し，大半は摩滅を受けている。胴部付近には，煤の付着を認め，焦げ付き状の部位も観察できる。胎土には長石・石英や多くの金雲母を含んでいる。40は「く」の字状に外反する口縁部からやや丸味を帯びた胴部の破片で，復元口縁径30.9㎝を測る。頸部の内外面は鈍い稜線をもつものである。口縁端部は，やや窪んでいるがハケナデによる仕上げ，内面は横位を主体としたハケナデ，外面の口縁部から頸部にかけては横位のハケナデによるが，下位は斜位のハケナデによる調整を施している。色調は外面が暗茶褐色で内面は赤茶褐色を呈し，胎土には長石・石英や多くの金雲母を含み，胴部の一部には煤の付着を確認する。

41は，蓋形土器である。器形の器高は12.6㎝。つまみ部径7.5㎝を測り，つまみ部は指頭による調整が施され，僅かに窪んでいる。内面は，つまみ部付近が指頭による調整で，裾部付近では横位のナデ，その間はハケナデ調整，外面は斜位及び横位のハケナデ調整である。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し，胎土には，石英・長石・金雲母などを含み，外面の一部には煤の付着を認める。

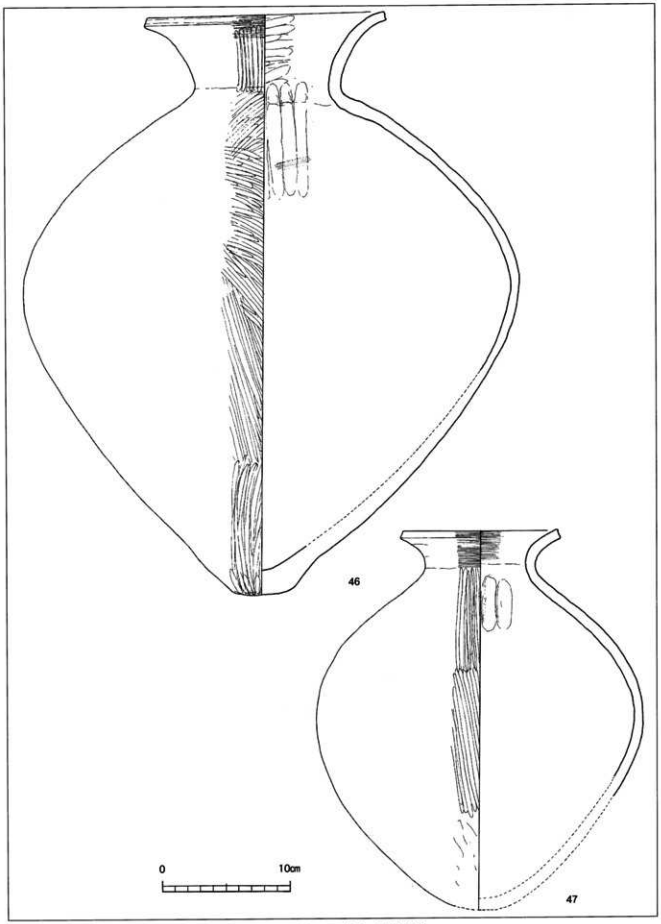
42～44は，小型の鉢形土器の完形品である。鉢形土器の底部は，それぞれ形状を異にするタイプである。

42は底部より外側へ開きながら直口する口縁部をもつ器形で，口縁端部は指頭により不整形を呈し，平底を呈する。この土器は，手捏ね手法で仕上げ，口縁径は，8.4㎝，底径4.5㎝，器高6㎝を測り，内外面ともに指頭による調整後ハケなで調整痕を認める。色調は内外面ともに茶褐色を呈し，胎土には石英・長石や多くの金雲母などを含んでいる。43・44は底部より外側へ開きながら胴部付近で，僅かに内湾するような形で口縁部となる。43は口縁端面が尖り気味な形状で，底部は丸底を呈する。この土器は手捏ね手法で仕上げられ，口縁径は，8.1㎝，器高6㎝，底径2.4㎝を測る。内外面ともに指頭による調整で，一部に指紋の付着をも認める。色調は，内外面ともに暗茶褐色を呈し，石英・長石・金雲母などを含んでいる。44は底部より外側へ開きながら胴部付近で僅かに内湾しながら口縁部となる器形で，口縁端部は指頭により不整形に仕上げ，丸味を呈している。底部は小さな柱状の脚台をもつもので，手捏ねの手法で仕上げ，底面は若干窪んでいる。復元口径は，6.9㎝，器高6.3㎝，底径2.8㎝を測る。

45は，縄文時代晩期の刻目突帯文土器の口縁部破片である。小破片のために傾き不明で，刻目突帯文土器で，口縁部外側に粘土紐を貼付け，指頭による刻目を施すものである。口縁部下位には，外側から径6㎜の円孔を穿っている。



第11図　方形周溝出土遺物(1)



第12図　方形周溝出土遺物(2)

(2) 出土遺物（第９図）

23～27は甕形土器である。時期は弥生中期が主体であるが，27は弥生中期～後期に比定される。23はいわゆるL字口縁で，口縁部はやや内傾する。口縁端部は小型のM字状断面となる。肩部には断面三角の貼付け突帯を３本以上施こすものである。この土器は，薄手に作られたもので，胎土には白い粒の小さい粘土を使用し，器面は赤茶褐色を呈し，丁寧な調整がみられる。胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。24の口縁部の形状は23と類似している。違いはL字口縁部は丸く仕上げる。丹が塗られた部分が外面にみられる。25は器面が暗茶褐色である。胎土は粗めの土を使用している。L字口縁を持ち２状の断面三角の貼付け突帯文が施されている。26はL字口縁を持ち，端部は，丸味をもっている。器面は外面が黒茶褐色で内面が茶褐色である。胎土は茶褐色で礫を含む荒い粘土である。胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。これらは，吉ケ崎式に比定できる。27は「く」の字状口縁を持つもので内側に張り出しがみられる。

胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。これは山ノ口式土器に比定できる。

28～37は，壺形土器である。28はL字状口縁部で，端部はM字状断面に刻みがみられる。

胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。29はL字状口縁部で，口縁部はやや傾斜する。内側口唇部には舌状に張り出し，明瞭な稜が付される。端部にはM字状断面がみられる。胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。30から32は断面三角貼付け突起帯を多条に施した壺形土器である。30・31は茶褐色を呈し，32は明茶褐色である。器面調整は丁寧で，胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。これらの壺形土器は吉ケ崎式に比定できる。

33～37は弥生後期にあたる壺形土器である。この内33～36は二重口縁を持つものである。口縁部は垂直に立つ33と内傾して立ち上がる35～36がある。33は直に立ち上がり，無文である。胎土は若干紫を帯びたもので。中には雲母，石英，長石，角閃石がみられる。34の器形は，断面M字突帯が回りやや内側に立ち上がっている。色調は茶褐色で丁寧調整がみられる。胎土には，雲母，石英，長石，角閃石がみられる。35は内側に立ち上がり「く」の字状口縁部である。無文で，胎土は雲母，石英，長石，角閃石がみられる。36は，直に立ち上がり，外面に流水文を施している。

外面は茶褐色で内面は灰茶褐色である。胎土は雲母，石英，長石，角閃石がみられる。

37は，外反する口縁部で，平坦な口唇部には流水文を施している。色調は暗茶褐色で，器面調整は丁寧に施している。胎土は雲母，石英，長石，角閃石がみられる。

第5節 古墳時代

古墳時代は本遺跡の主体となるもので，長さ140m，幅9m，約1,300㎡の調査面積の範囲の中に，竪穴住居跡が総数40基をはじめ，土坑や土器だまり遺構が検出された。

遺物包含層は地表面から約2m下の暗茶褐色層で，遺構は下層の濁白色砂層を掘りこんでいる。

(1) 遺　構（第5図）

① 竪穴住居跡

竪穴住居は総数40基検出することが出来た。この中で，円形竪穴住居である12号・34号・37号住居を除いた37基の住居は，全て正方形に近い方形竪穴住居であるといえる。検出状況はXI層の黄褐色の砂層を掘り込み，X層の暗茶褐色が埋土となる。完全な形状で検出されるものは少なく，大半が切り合い関係にあることや調査区外に広がること，時期不明の大溝，調査区を横切る現代の排水溝施設によって断ち切られていることから，多数の住居については，全体像を明らかに出来なかった。また，切り合い関係にある住居間の埋土の変化は見られず，先後関係を把握することは出来なかった。

40基の住居は調査区全体に密集して配置され，その分布範囲は調査区西側AB-2区を西側端とし，東側AB-14区を東側端とする東西約150mに形成された集落跡である。

この中で本遺跡の象徴的な住居は4本柱を主柱とする26号住居があるが，1号・3号～6号・9号・11号・21号・24号・26号住居は規模・形態・関連遺構・出土遺物と検出状況が良好であった。他の住居はそれぞれが，7号・8号，14号・20号・22号，11号・13号・16号，21号・31号・28号住居などのように2重あるいは3重の切り合い関係のものや17号～19号・32号・38号～40号住居の新しい溝によって寸断され，遺構の一部のみ検出できたものなど，規模や計測が不可能な状況であった。特に東側にその傾向が見られる。

ここでは主な住居について表でまとめて見た。

1号住居（第13図）

48は縄文時代晩期の入佐式土器の口縁部の破片で，内外面ともにナデ調整である。49は口縁端部のみ丹塗りの高坏の坏部で，口縁部は外反して立ち上がり，屈折して脚部に至る。内外面ともによく研磨される。50は甕形土器の突帯部分である。51は壺形土器の頸部突帯部分である。52は小型甕形土器の胴部で，外面はハケ目が残るが研磨されている。内面はハケ目工具痕を残しナデられている。53は底部で，高い中空の脚台である。54は平底の底部で，葉痕状の圧痕がある。55は甕形土器の胴下半部分で，底部があげ底で低い脚台を付けている。外面はカキアゲ状の工具によるナデ調整で，内面に工具痕が残る。56は椀形土器と考えられるが，高坏の杯部の可能性もある。内外面とも研磨される。57・58は高坏の脚部で緩やかに裾部へ開く。ともに外面は研磨される。57は外面が丹塗りである。59は坩の下半部で，内面に工具痕が顕著に残る。60は外面が丹塗りの小型甕で，コップ形の土器である。内外面ともに丁寧にヘラミガキされている。61は花崗岩を石材とする長楕円形の凹石で，平坦面の両面に凹部がある。62は花崗岩を石材とする凹石で，一面の平坦面に凹面がある。63は打製土掘具の基部で，石材は頁岩である。64は花崗岩を石材とする凹石で，平面形が円形で，平坦面の両面に凹部がある。

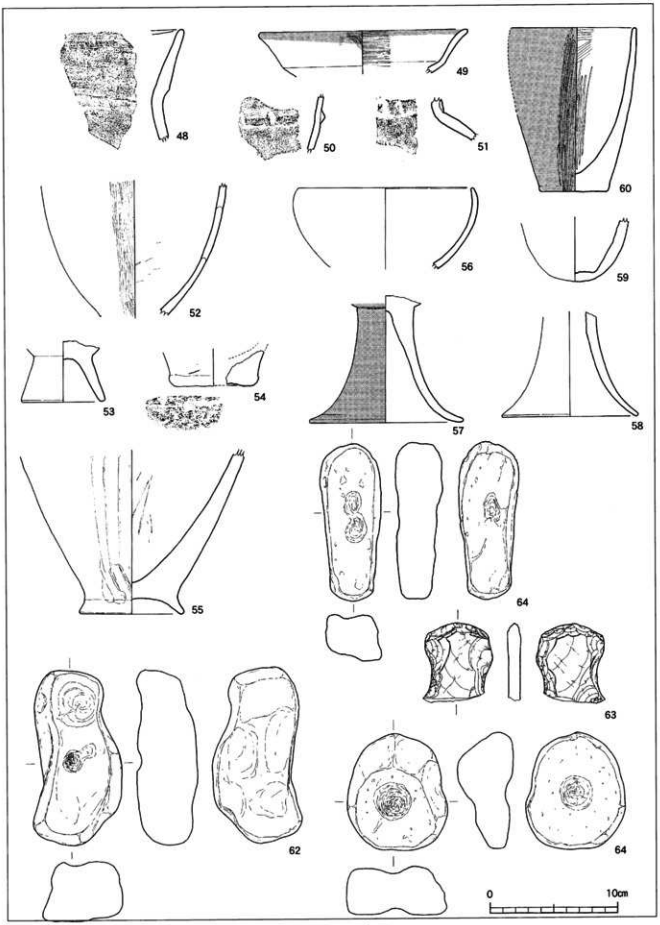
表－2　主な竪穴住居

番号	検出区	平面形	長軸×短軸（m） 主軸方向	検出面からの深さcm	柱穴	備　　考
1	A2	方形	6.2×（2.2） N-11.5°-W	9	3	南側壁際に径30cmの主柱と両サイドに小ピット。中央部に方形土坑（+110・140，深さ13cm）。2号住居と重複。
2	A3	方形	（4.6）×4.2） N-4.5°-W	25	2	柱穴深さ20cm前後。中央東側壁寄りに，円形土坑（径120，深さ20cm）。1号住居と西側が重複
3	A3	略正方形	3.9×3.7 N-26.5°-W	60	6	三隅に柱穴（PSは小ピット）。南側壁面に幅約24cm，高さ約30cmの段を有す。床面中央に径約35cm前後でファイヤーピット。東側に隣接して径約20cm前後の範囲に焼土。北側角に土坑（幅約100cm，深さ25cmと東側壁に幅約100，深さ15cm）。
4	A4	方形	（5.0）×（5.0） N-0°-W 磁北	60（堀方） 40	4	遺物の出土レベルから堀方と床面を確認。4本柱（径24cm前後，深さP1-50cm，P2-70cm，P3-90cm，P4-70cm）。 南東隅に方形土坑（長さ1.5mcm，幅1.2m，深さ48cm）。 床面中央西側寄りに50cmの範囲に焼土。 北側に炭化した木材（復元長2.8m，太さ約15cm）2本と南側2か所。
5	A5	略正方形	4.4×4.1 N-16.5°-W	50 （90）	4	主柱4本柱（径25cm前後，深さP1-40cm，P2-25cm，P3-40cm，P4-44cm）。床面は東側で高くなる。 南側壁際に方形土坑（75cm，54cm，深さ14cm）。東側は6号住居と重複。
6	A5	略正方形	5.4×5.0 N-0°-W 磁北	50	6	P2～4東側壁近くに直線的に並ぶ。南西隅床面は5号住居と重複しているため柱穴の状況は不明。柱穴（径13cm前後，深さP1-20cm，P2-32cm，P3-50cm，P4-44cm，P5-18cm，P6-50cm）。南壁際に楕円形土坑（長経108cm，短経80cm，深さ20cm，土器・石器が出土）。
7	B7	方形	（2.3）×（1.9） N-　°-W	20	3	北東側は8号住居と重複。柱穴3（径20cm前後，深さP1-15cm，P1-25cm，P3-35cm）。
8	B7	方形	（3.6）×（5.7） N-17°-W	10	13	南東側は7号住居，北西側23号住居と重複。主柱は明確ではない。主な柱穴（P9-12cm，P10-20cm，P7-7cm，P12-20cm），土坑2基（北側壁際ST1-直径90cm，深さ10cm・南側隅ST2-長経53cm，短経30cm，深さ20cmの楕円形）。溝4状（1-長106cm，12cm幅，深さ10cm，-長さ156cm，幅30cm，深さ6cm，-長さ80cm，幅12cm，深さ9cm4-長さ190+cm，幅30cm，深さ7cm）。
9	A8	略正方形	5.2×5.1 N-11.5°-W	20	8	主柱4本柱（径22cm，深さP1-50cm，P2-40cm，P3-30cm，P4-36cm），P1・P2・P5・P6とP3・P4・P8・P9はそれぞれ一列に並び主柱の補助柱と推定される。中央部に焼土（約30cmの範囲）。南壁際に円形土坑（径100cm，深さ15cmで鉢と高坏の完形品出土）。南側は周溝と重複する。

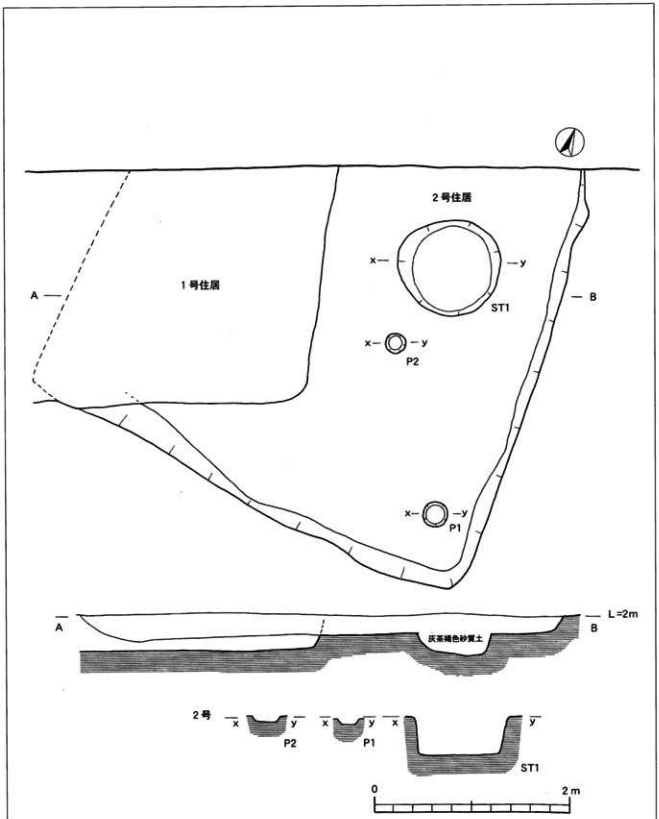
表－3　主な竪穴住居

番号	検出区	平面形	長軸×短軸（m） 主軸方向	検出面からの深さcm	柱穴	備　　考
11	A 9	方形	5.5×（3.6） N-32.5°-W	30	7	北側は13号住居重複，大溝1で欠損する。南側壁面に幅50cm，高さ21cmの長方形の段を持つ。P4・P5は主柱の片方と想定。P1・P2・P3は東壁面に約120cm隔てて並列する。20～30cm，深さP1-10cm，P2-10cm，P3-20cm，P4--40cm，P5-30cm，P6-20cm，P7-10cm，なおP5・P6は2段ピットである。
12	B 9	円形	（5.2） N-　°W	90	5	4分の3は調査区外となる。詳細は不明である。床面から30cmで幅約40cmの段を有す。この一段高い段に柱穴5本がほぼ等間隔に設置されている。柱穴（形18～23cm，深さP1-18cm，P2-26cm，P3-14cm，P4-21cm，P5-cm）。
13	B 9	方形	（4.1）×（2.4） N-6°-W	25	6	北側半分は大溝で欠損，西側は土坑が重複する。主柱は定かでないが，径cm前後で深さはP1-10cm，P2-43cm，P3-10cm，P5-20cm。
21	A 10	略正方形	4.0×3.55 N-0°-W 磁北	17	7	ほぼ完全な状態で検出できた。東側は32住居と南側29号住居と重複する。床面は22号住居が低い。中央部に30cmの範囲に焼土検出。柱穴は7個あるが配置から主柱は定かではない。径20cm～38cmで，深さはP1-42cm，P2-17cm，P3-12cm，P4-10cm，P5-18cm，P6-17cm，P7-10cm。
24	B 12	方形	4.1×（2.5） N-16°-W	50	2	南側は調査区外に延びる。柱穴の位置・配置から4本柱と推定される。床面は平坦で中央部に径80cmの範囲で焼土を検出。柱穴の径は28cm前後。深さはP1-64cm，P2-68cm。
26	A 6	略正方形	4.8×4.4 N-18°-W	53	6	4本柱の主柱を持つ典型的な住居である。壁の立ち上がりはほぼ垂直で四隅もしっかりした造りである。床面はほぼ水平。壁際四面には幅45cm～70cm，高さ3cm～7cmの低い段を設けている。なお，東隅は床面へ緩やかな傾斜となって床着となる。段遺構の西隅には鉢形土器が出土した。主柱はP1～P4で（深さはP1-28cm・P2-23cm・P3-35cm・P4-28cm，P2・P3は二重ピット）。P5・P6はP4の補助ピットである。東側壁際中央部に径80cm，深さ20cmの円形土坑と，それに接して70cm××50cmの範囲に木炭を含む焼土が検出された。土坑や焼土遺構から鉢・壺・高坏・石器等が出土した。
30	B 6	方形	（3.5）×（3.8） N-9.5°-W	46	2	2個の柱穴が検出されたが，4本柱の一辺のものと思われる。径28cm，深さ32cm，を測る。中央部には幅56cm，長さ63cm以上の楕円形の炉穴が位置する。北側に高坏が出土した。

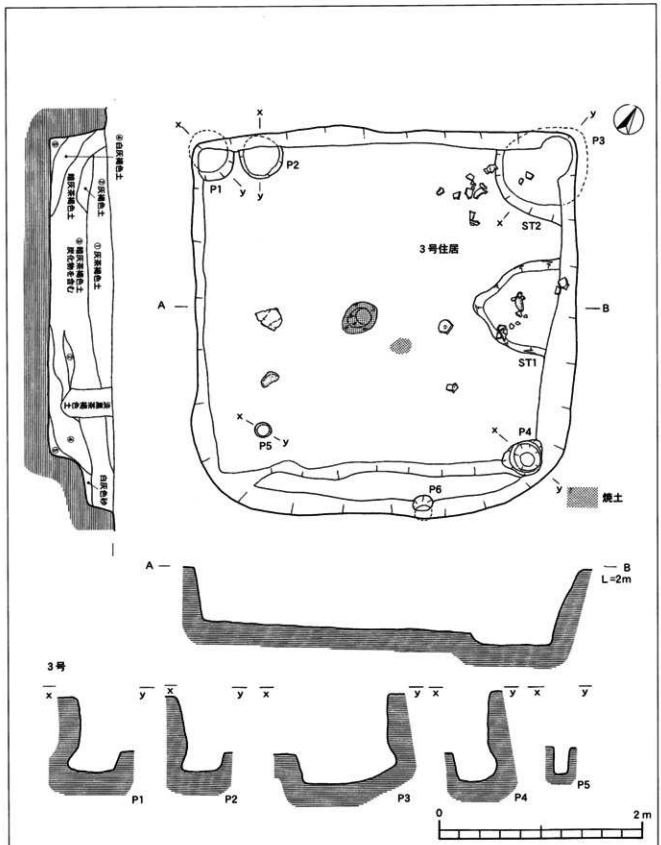
第13図　1号住居



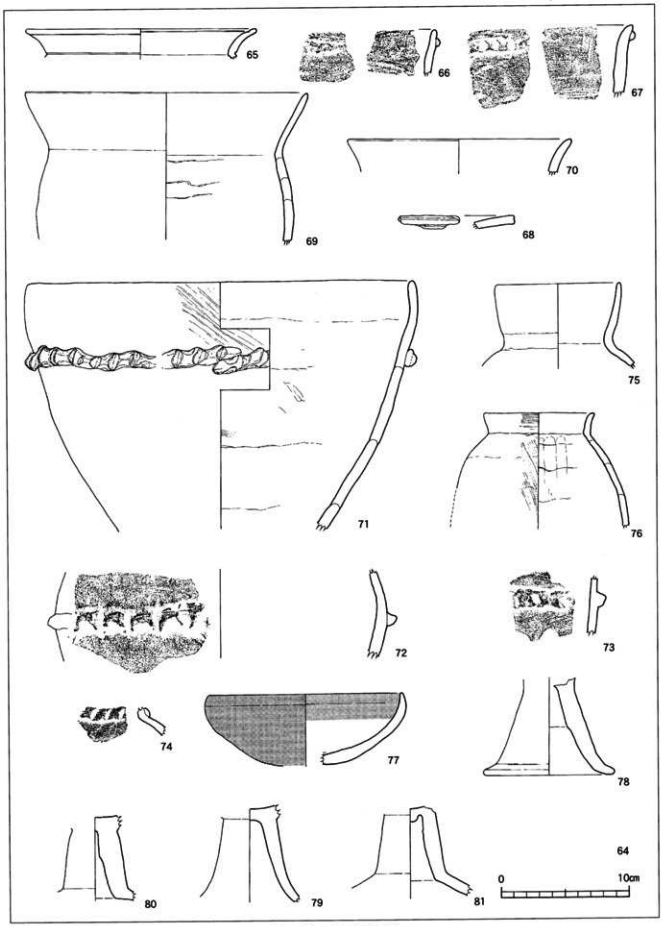
第14図　1号住居



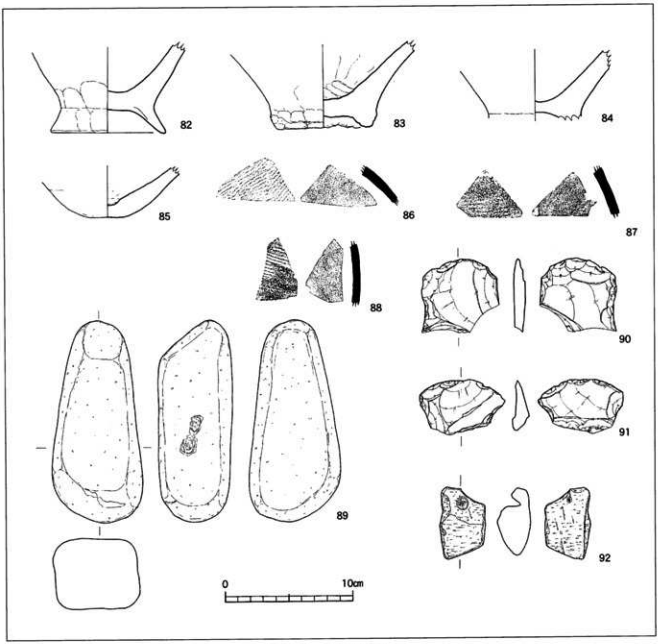
第15図　2号住居



第16図　3号住居



第17図　3号住居(1)



第18図　3号住居(2)

3号住居（第16～18図）

65は縄文時代晩期後半の黒川式土器の精製鉢形土器の口縁部で，内外面ともにヘラ研磨される。66・67はいわゆる突帯文土器で，甕形土器の口縁部である。口縁端部から下がったところに突帯を貼り付け，66は棒状工具で，67はヘラ状工具で刻んでいる。いずれも内外面ともに条痕をナデ消している。68は弥生時代中期の壺形土器の口縁部で，69・70は土師器の甕である。いずれもヨコナデ・ナデで調整されている。71は淡赤褐色を呈する甕形土器で，真っすぐ内湾気味に立ち上がる。内外面ともに工具痕を残しながら，最終的にはナデられており，接合痕が残る。72は壺形土器の胴部片で，突帯部分である。73は甕形土器の突帯部分である。74は壺形土器の頸部突帯部分である。75は小型の壺で，二重口縁をなし，ナデで調整されている。76は甕で，内湾気味に立ち上がる短い口縁部に，楕円形の胴部がつくものであろう。75・76ともに土師器である。

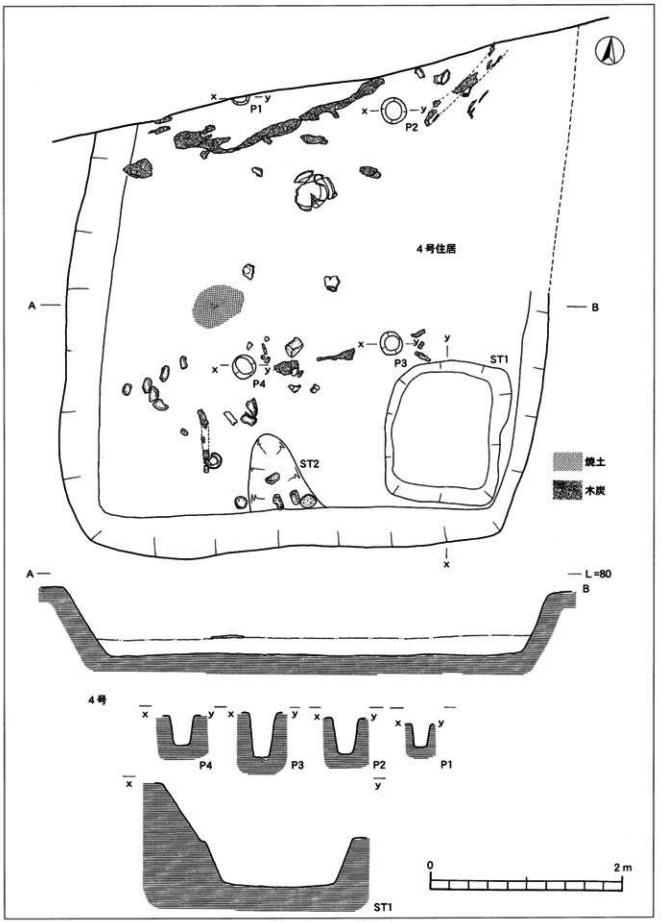
77は丹塗りの椀形土器で内外面とも研磨される。78～81は高坏の脚部で，78は緩やかに開き，裾部でわずかに屈折する。80・81は円筒状の脚柱部に，裾部は外に折れ曲がる。82～85は底部で，83は上げ底のもの，85は壺形土器の丸平底である。86～88は須恵器で，甕の胴部破片で頸部近くの肩部にあたると考えられる。外面は平行叩きで内面はナデられている。特に87・88には自然釉の灰釉がかかる。89は花崗岩を石材する磨石・凹石である。90・91は頁岩製の打製土掘具の基部である。92は軽石で穿孔しようとした痕跡がある。

4号住居（第19～21図）

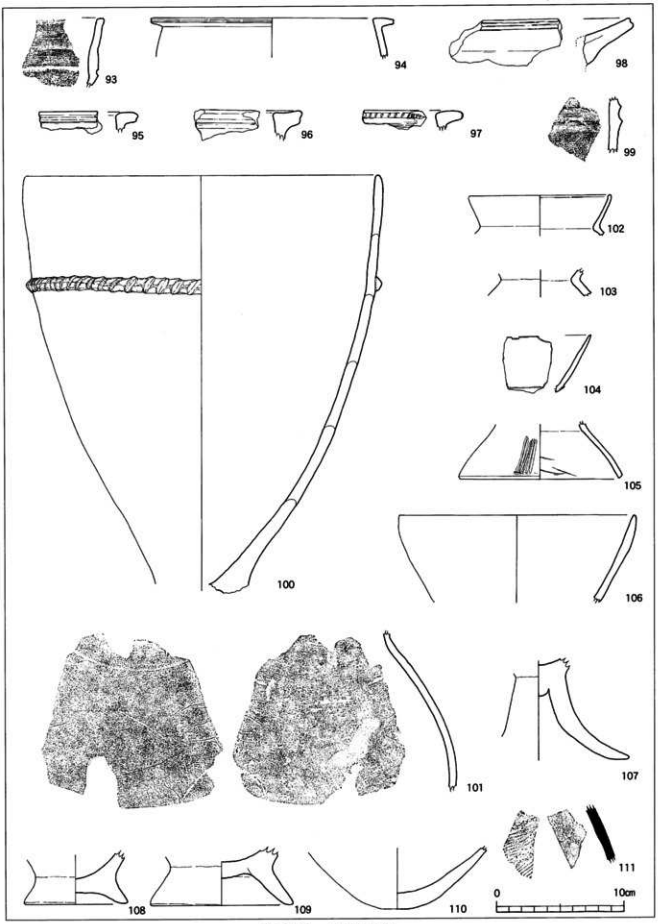
93は縄文時代晩期の粗製浅鉢で，黒川式土器の新しいところから突帯文土器に伴うものであろう。頸部が閉まらず沈線の下で大きく屈曲していくものである。94は弥生時代中期の甕形土器で，器壁も薄く在地の土器でない可能性も考えられる。95～97は弥生時代中期の入来式に該当する。98は弥生時代中期の大型の壺形土器の口縁部である。99は傾き不明であるが，やはり弥生時代中期の壺形土器の胴部突帯部分と考えられる。100は口縁部が内湾気味にまっすぐ立ち上がる甕形土器で，外面はハケ目が残るがよくナデ（工具で）られ，内面は斜め方向のハケ目でナデ消されている。胴部上部，全体の3／5は炭化物が付着し，それ以下は付着していない。101は土師器の壺で，胴部外面はカキ目調整，内面はヘラケズリされる。102・103は小型坩の口縁部と頸部で，いずれも外面がよく研磨されている。104は高坏の坏部分で，口縁がまっすぐ外反し，杯部中央に沈線で稜を表現し，丁寧にヘラミガキされている。105は高坏の脚裾部分で丹塗りの痕跡がある。外面は縦方向のヘラミガキを行い，暗文様にしている。106は小型鉢形土器で，外面に炭化物が付着している。107は高坏の脚部で，大きく外にひろがる裾部である。108・109は底部で，低い脚台をなす。110は丸底の壺形土器の底部である。111は須恵器の甕の破片で，外面は平行叩きで，一部灰釉がかかる。内面は同心円叩きが丁寧にナデ消されている。112は硬質の頁岩を石材とする磨製石斧の基部である。113は硬質の頁岩を石材とする磨製石斧の刃部である。114は一面に平坦面をつくる軽石製品である。115は花崗岩を石材とする凹石である。116は花崗岩を石材とする敲石で，側面を使用している。117は頁岩の打製土掘具の基部である。

5号住居（第22～24図）

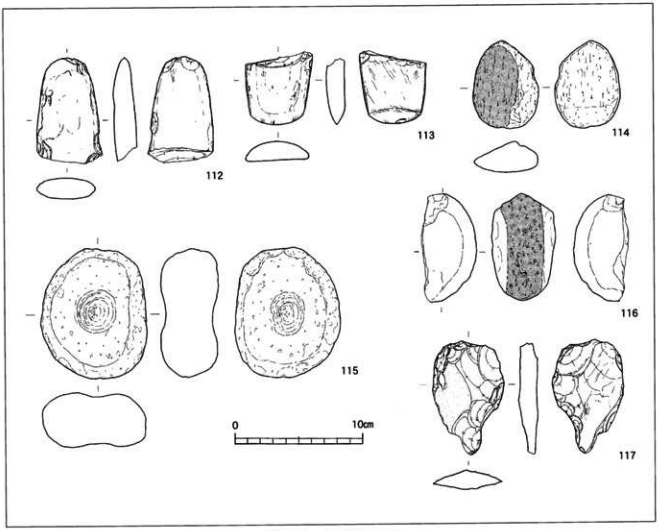
118は突帯文土器に伴う精製の台付鉢の口縁部分で，内外面ともに研磨されている。119は突帯文土器で粗製の鉢形土器になる可能性が強い。孔が3穴穿たれており，孔列文の影響を受けたものであろう。120は縄文時代晩期の，胴部で屈曲する甕形土器の胴部破片と思われる。121・122は高坏の杯部で，121は中央に沈線を，122は貼り付け突帯を巡らす。123は弥生時代前期の壺形土器の底部と思われる。内外面がヘラ研磨され，内面に丹の痕跡がある。124は弥生時代の甕形土器の口縁部であろう。125は口縁部が大きく内湾する甕形土器で，外面はハケ目の後ナデられ，内面もナデ調整である。126～130は甕形土器で126～129は突帯部分，130は口縁部破片である。131は土師器の甕の口縁部破片である。132は高坏の脚部で緩やかに開く。133は蓋である。134は須恵器の杯身で，稜がシャープで，須恵邑Ⅰ－5段階のものと考えられ，5世紀末から6世紀はじめに位置付けられる。135は壺の口縁部で，櫛描の波状の沈線を施す。瓶の口縁部の可能性がある。136～138・140は須恵器の甕の破片で，139は壺か瓶の肩部と考えら



第19図　4号住居


93
94
98
95
96
97
99
102
103
104
105
100
106
101
107
108
109
110
111
0
10cm

第20図　4号住居(1)

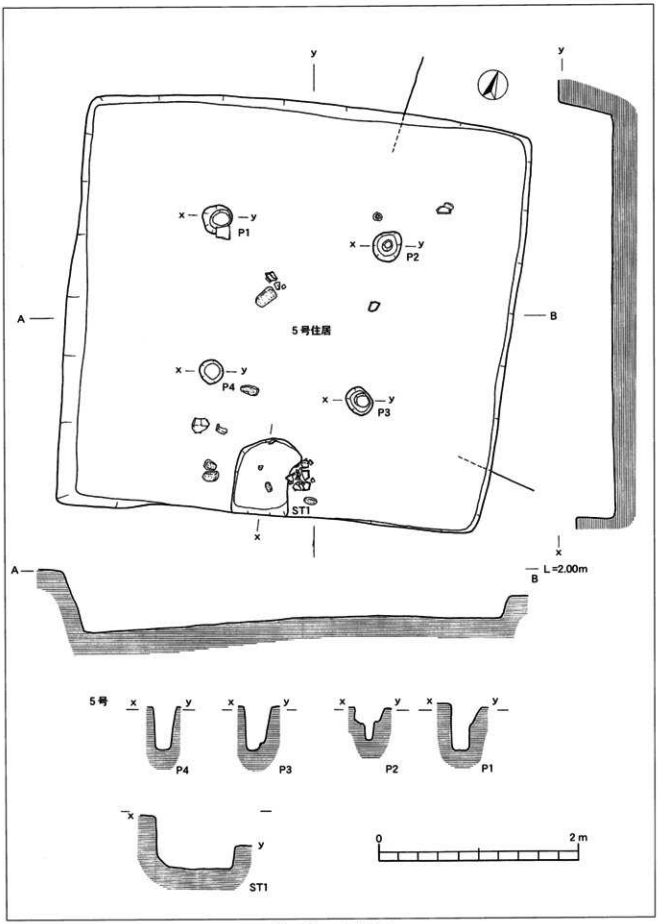


第21図　4号住居(2)

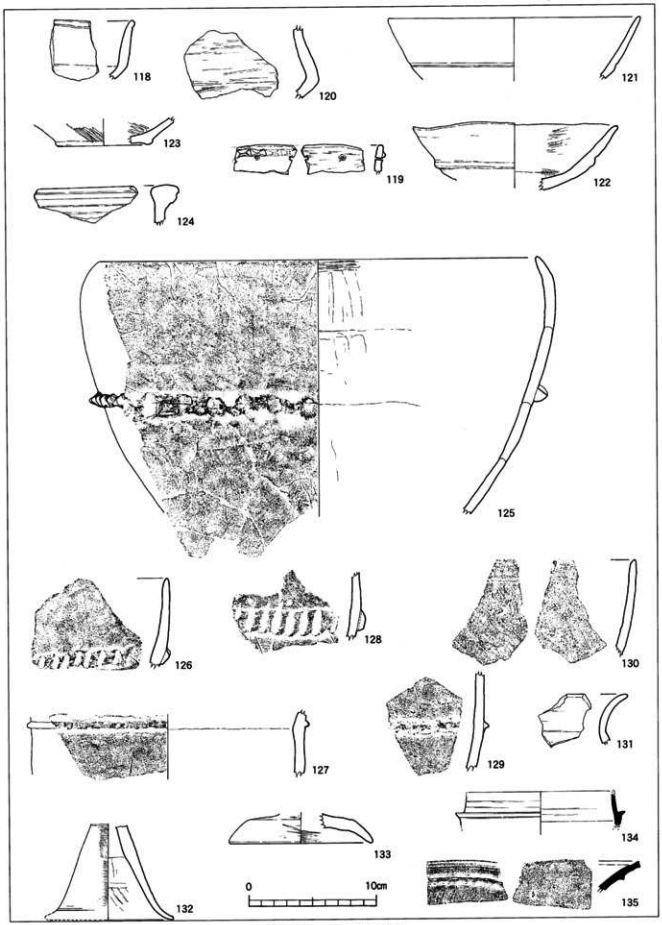
れる。136～138・140は外面が平行叩き，内面が同心円叩きを丁寧にナデ消している。139は外面に沈線が一条巡り，灰釉がかかる。141は粘板岩を石材とする磨製石鏃で，なかごを模しており鉄鏃を模しているものと考えられる。142は細粒の花崗岩の磨石・敲石である。

6号住居（第25・26図）

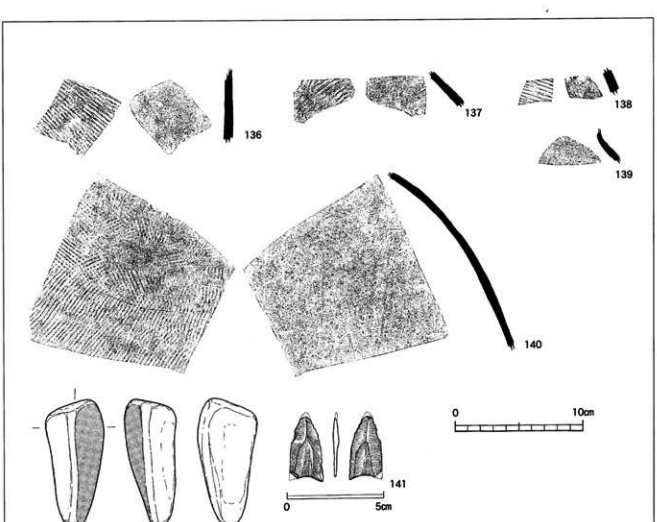
143は縄文時代晩期の黒川式の粗製浅鉢形土器で，リボン状突起を有する。144・145は弥生時代中期の甕形土器の口縁部。146は甕形土器で，内湾の度合いは強くない。147・148・149は壷形土器の胴部突帯部である。150は土師器の甕で，内外面ともにハケ目調整後にナデられている。151は高坏の杯部で，口縁部は外反し，杯部中央で反転して，稜を明確にして屈折する。152は高坏の脚部で，円柱状の脚柱部より裾部は屈折して外に広がる。153は高坏の杯部で，椀形をなし，杯部の中央部に沈線を施し，内外面ともにハケ目調整後にナデられている。154は坩の胴部で，外面は丁寧にヘラミガキされ，そろばん玉状である。155～158は底部である。156・157はあげ底気味で，155・158は脚台となる。159・160は壷形土器の底部で，いずれも外面はヘラミガキされる。161は砂岩の磨石・敲石で，両端部を中心に細かい敲打痕がある。162は花崗岩を石材とする敲石・磨石で，163は同じく花崗岩を石材とする磨石である。164は頁岩製の石鏃で，縄文時代か弥生時代のものと判断できる。



第22図　5号住居


118
120
121
123
119
122
124
125
126
128
130
127
129
131
134
133
132
0
10cm
135

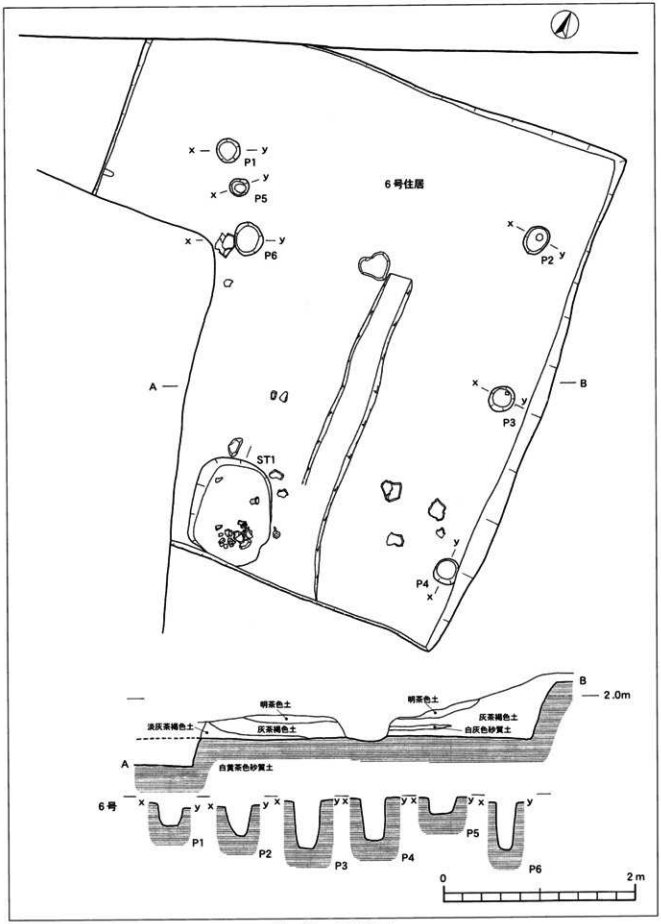
第23図　5号住居(1)



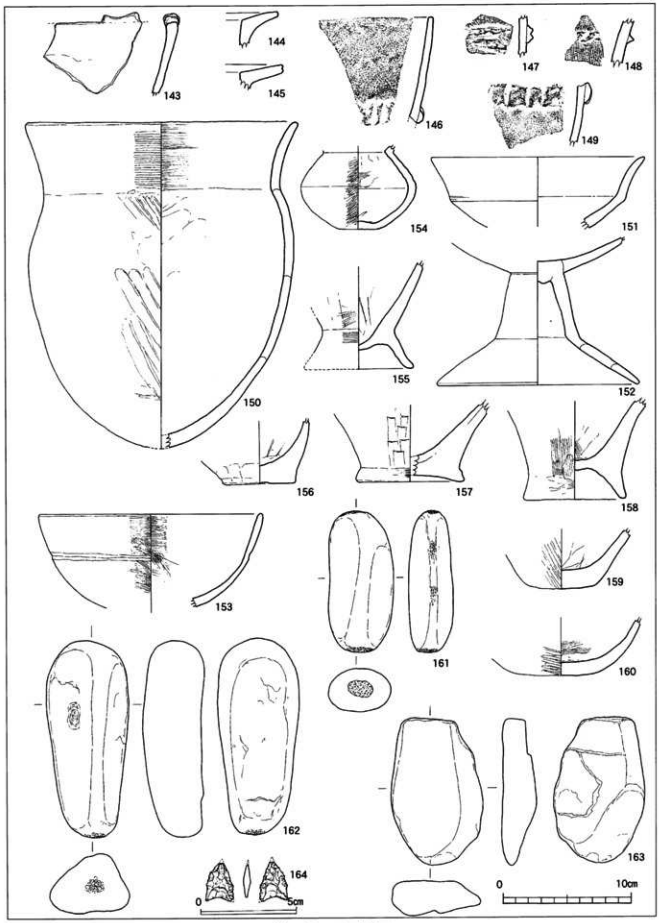
第24図　5号住居(2)

7号住居（第27・28図）

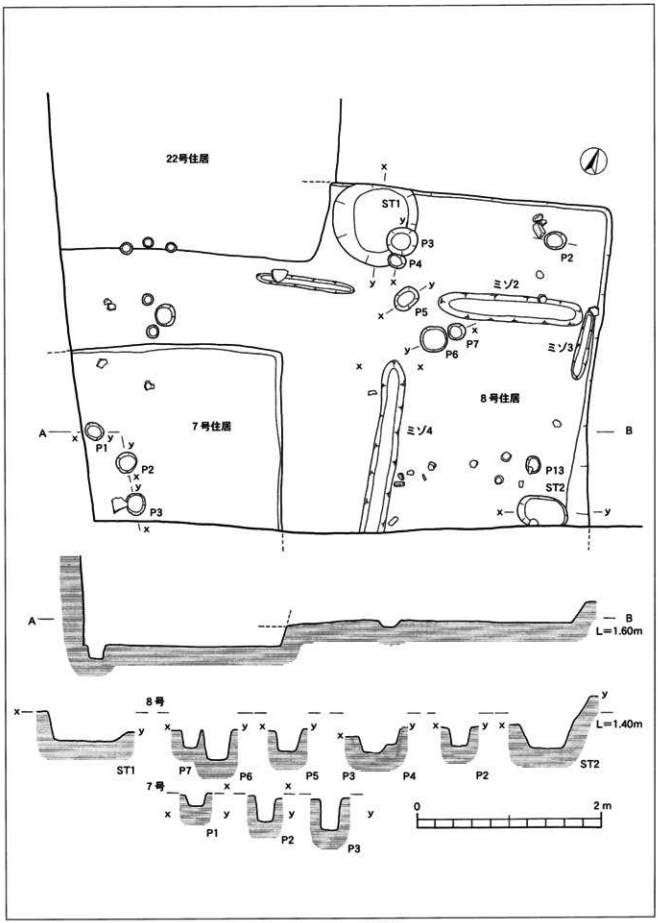
165・166は真っすぐ立ち上がる口縁部の，砲弾形の器形をなす甕形土器で，165は淡赤褐色で，内外面ともにハケ目調整後ナデられており，調整具痕が残る。166～169は甕形土器の突帯部分である。166・167は突帯上部に刻みのためのヘラ痕跡を残す。168・169は突帯を両方から指でつまむように押さえている。170は土師器の甕である。赤褐色を呈し，口縁部は内外面ともにヨコナデで，頸部以下は内外面ともに工具痕がのこるが，おそらく指頭とおもわれるナデで仕上げられる。底部は丸底と考えられる。171は土師器の壺で口縁部分はヨコナデで，外面は丁寧なナデ，胴部内面は工具痕が顕著である。170と比べると頸部が絞まり，卵倒形の胴部と推定される。172も壺の口縁部としたい。173は頸部に突帯をもつ壺形土器である。174は壺形土器の頸部突帯部分である。175は高坏の杯部で，屈曲がやや緩やかで稜が鈍い。176は高坏の脚部で末広がりになっていくものであろう。177は壺形土器の胴部下半で，小さな高台様の底部を粘土貼り付けで作っている。外面はハケ目が残り，内面は下から上にカキアゲ様にナデられる。178は甕形


6号住居
P1
P2
P3
P4
P5
P6
ST1
A
B
x
y
明茶色土
淡灰茶褐色土
灰茶褐色土
白灰色砂質土
白黄茶色砂質土
2.0m
6号
0
2m

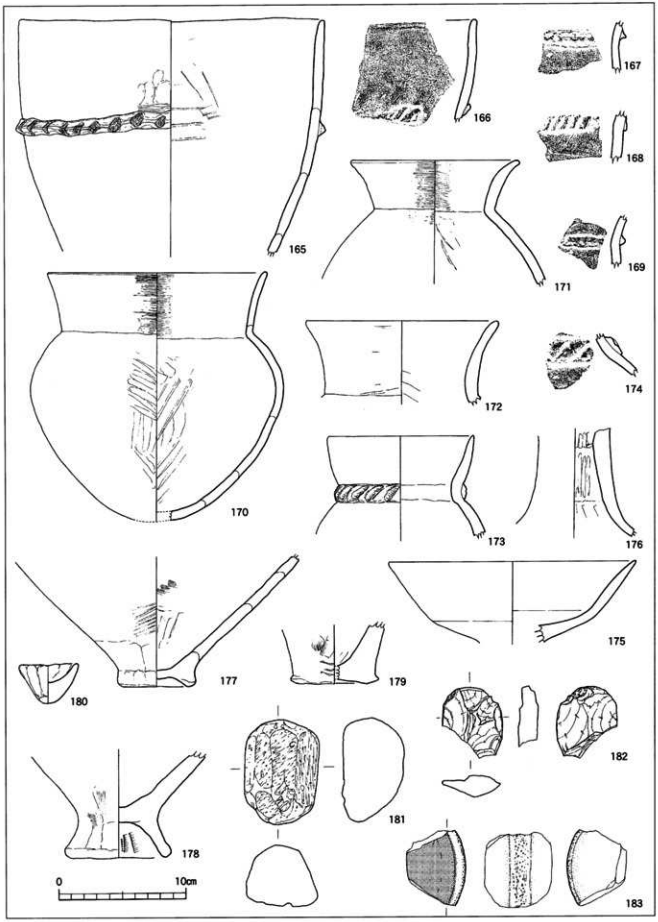
第25図　6号住居


143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
0
5cm
0
10cm

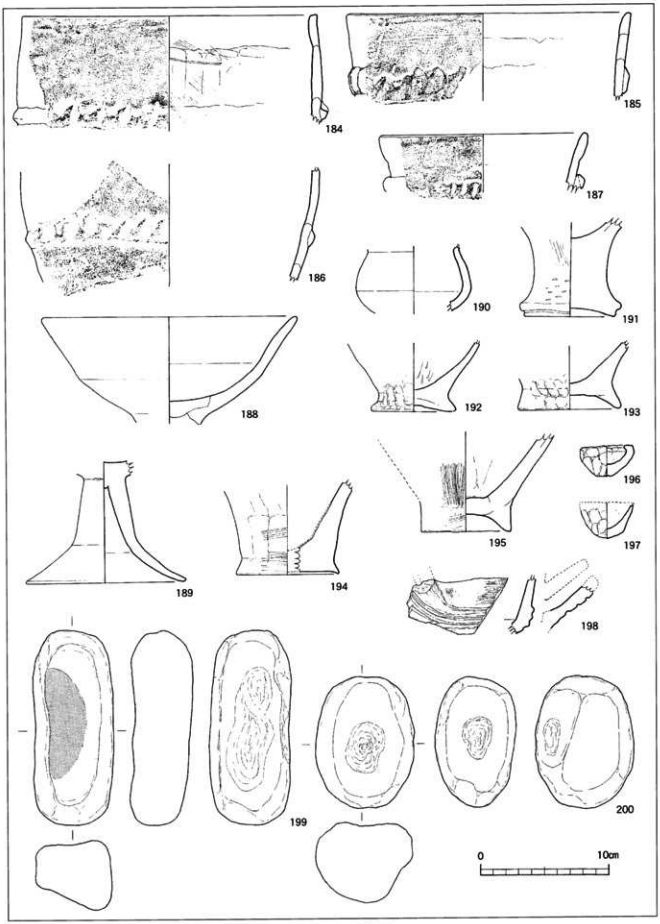
第26図　6号住居


22号住居
ST1
P3
P4
P2
ミゾ2
P5
P7
P6
ミゾ3
8号住居
7号住居
ミゾ4
A
B
P1
P2
P3
P13
ST2
L=1.60m
8号
L=1.40m
ST1
P7
P6
P5
P3
P4
P2
ST2
7号
P1
P2
P3
0
2m

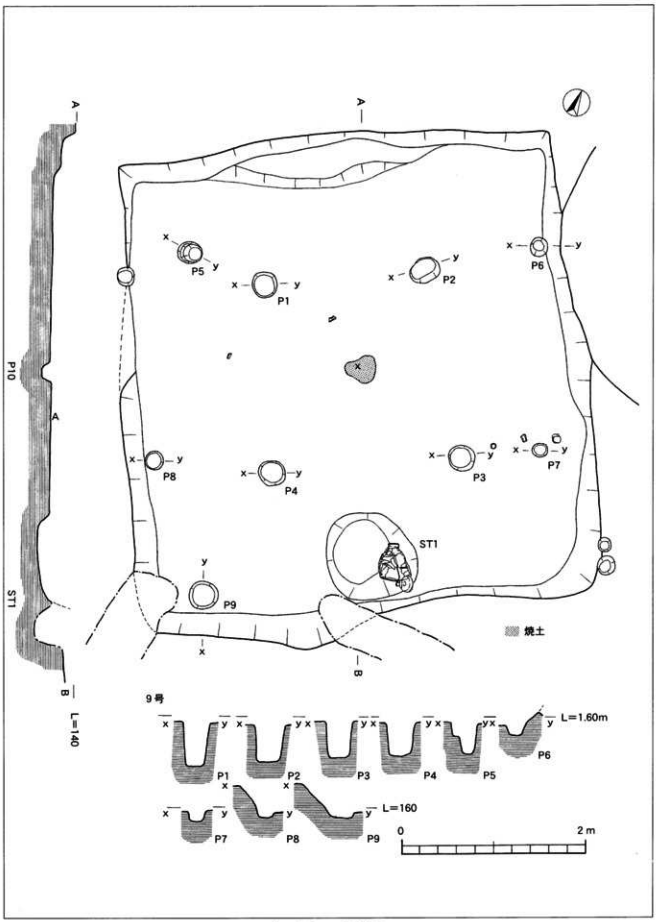
第27図　7号・8号住居


165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
0
10cm

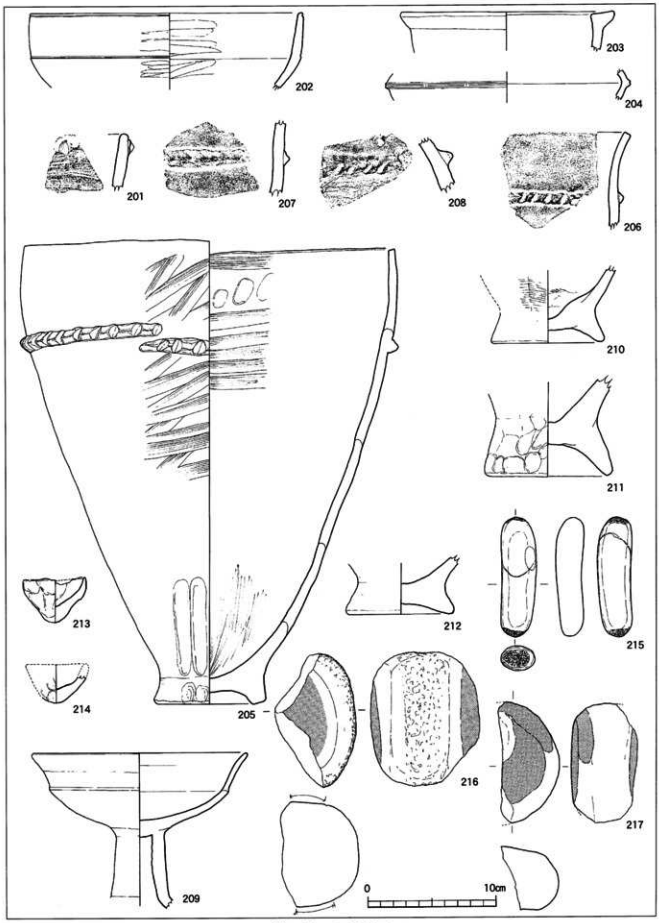
第28図　7号住居


184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
0
10cm

第29図　8号住居



第30図　9号住居


202
203
204
201
207
208
206
210
211
213
212
215
214
205
216
217
209
0
10cm

第31図　9号住居

土器の底部で，高めの脚台である。179は柱状の底部である。180は手づくね土器である。181は面取りされた軽石で，用途は不明。182は頁岩を石材とする打製土掘具の基部である。183は安山岩の磨石・敲石で，平坦面は磨られ，側面が敲打されている。

8号住居（第29図）

184～187は甕形土器である。184は内湾気味に口縁部分が立ち上がる。ハケ目後ナデてある。185はやや外開きに，186は口縁部が欠落するが，若干内湾するものと考えられ，184と同様の器形となろう。187はやや小型の甕形土器である。188は高坏の杯部で，杯部の屈折は弱く，ナデで仕上げてある。189は高坏の脚部で，裾部と脚柱部で屈折するが，弱い。外面はヘラミガキされる。190は土師器の坩で，外面はヘラミガキされる。191は弥生時代中期の甕形土器の底部で充実脚台である。192～195は底部であるが，あげ底気味で脚台は高くない。196・197は手づくね土器である。198は縄文時代後期後葉の注口土器と考えられ，本遺跡で三万田式土器が出土していることから，その時期の可能性がある。内外面ともにヘラ研磨される。199は花崗岩を石材とする凹石・磨石である。200は花崗岩を石材とする凹石である。

9号住居（第30・31図）

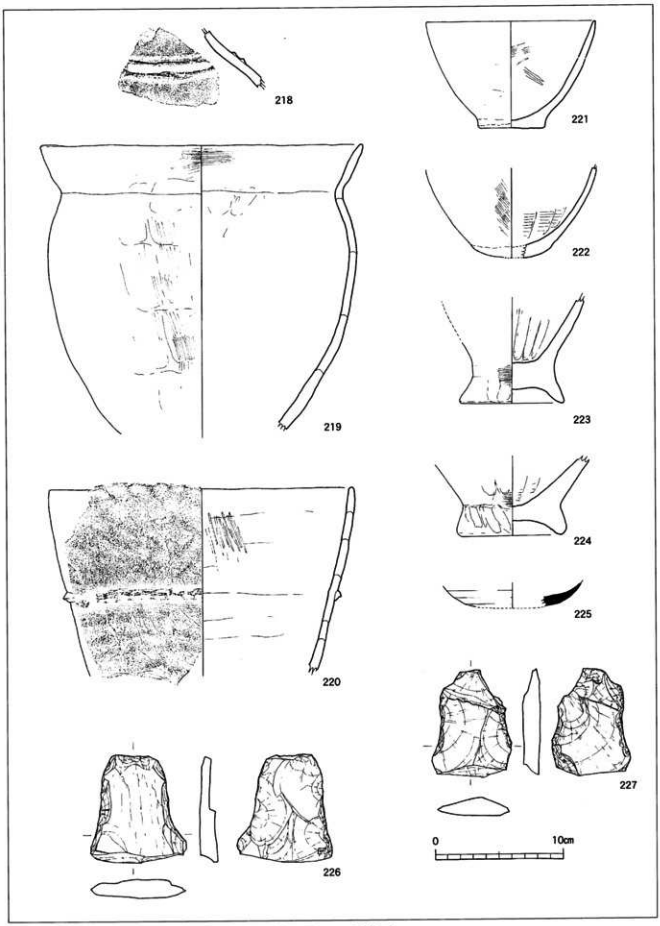
201は突帯文土器で，器面は条痕後ナデ消されている。202は突帯文土器に伴う精製台付鉢形土器で，内外面がヘラミガキされる。203は弥生時代中期の小型甕形土器の口縁部である。204は同じく弥生時代中期中葉の特殊壷形土器の胴部と思われる。205は甕形土器で，口縁部が内湾気味に立ち上がり，全体として砲弾形の細身の器形をなし，短いあげ底様の脚台である。外面は工具によるナデで，内面は一部にハケ目が残るが全体にナデで仕上げられ，組み合わせ部が段違いの貼り付け突帯が巡る。206・207は甕形土器の突帯部分であるが，口縁部が外反していくと考えられる。208は壷形土器の頸部突帯部分である。209は高坏で，口縁部は外反して立ち上がり杯部の中央部で屈曲する。脚柱部は円筒状である。ヘラミガキ痕が観察できる。210・211・212は低い脚台付きの底部である。213・214は手づくね土器である。215は砂岩を石材とする敲石で，両端部に敲打痕がある。216は花崗岩を石材とする磨石・敲石で，側面を敲打している。217は花崗岩を石材とする磨石である。

10号住居（第32図）

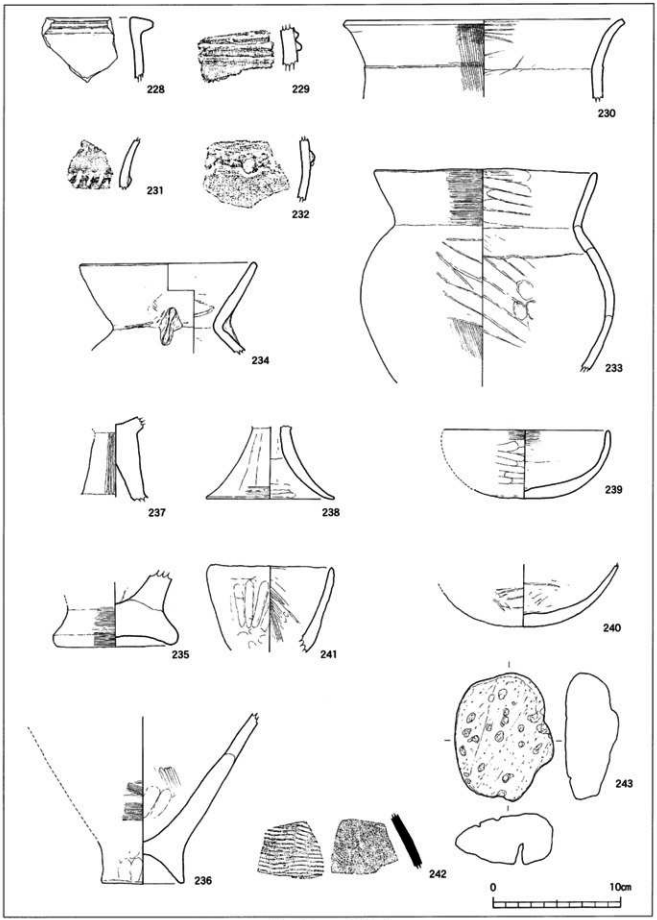
218は弥生時代の壷形土器の頸部下の突帯部分で，外面はヘラミガキ，内面はナデ調整である。弥生時代中期前半のものと考えられる。219は土師器の甕で，口縁部はヨコナデ，胴部は工具ナデである。220は外面が黒褐色を呈する甕形土器で，内湾する口縁部で，突帯の位置がかなり下がる。外面はナデられており，内面は工具痕が残り工具によりなでられる。221は椀で内外面ともにナデられる。222は土師器の壷の胴部下半で，外面はナデ，内面はハケ目調整である。223・224は短い脚台の底部である。225は須恵器の杯身の底部付近で，内側に灰釉がかかる。226・227は頁岩製の打製土掘具の基部である。

11号住居（第33・34図）

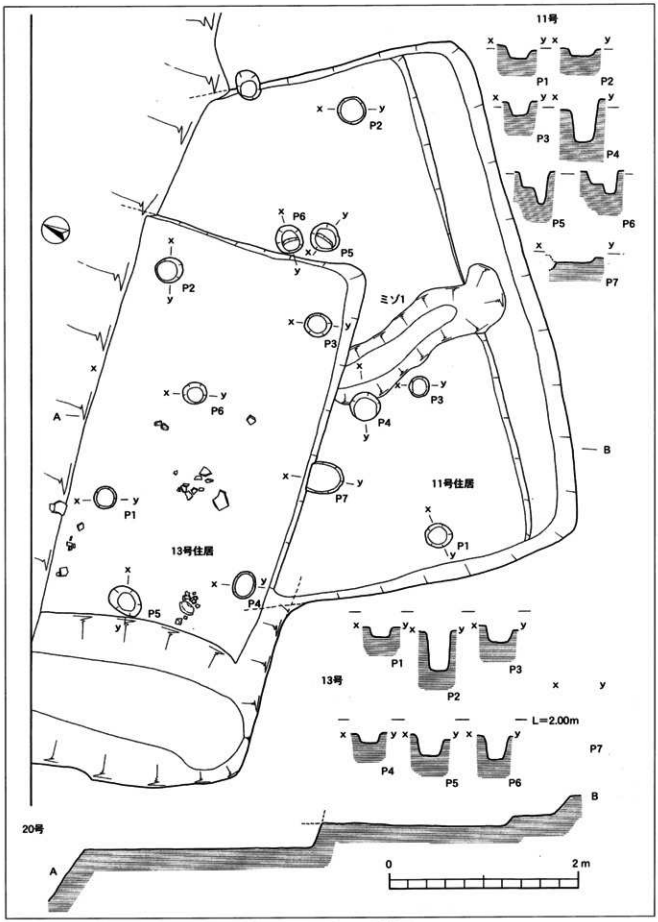
228は弥生時代中期前半の甕形土器の口縁部である。229は弥生時代中期の壷形土器で，胴部突帯部分である。230は土師器の甕で，頸部にハケ目調整具で段をつくる。外面はハケ目，内側は工具でナデられている。231は甕形土器の突帯部分で，232は壷形土器の突帯部分である。233は土師器の壷で，短く外反する口縁部に丸形の胴部で，外面は工具ナデ，内面はナデで調整される。



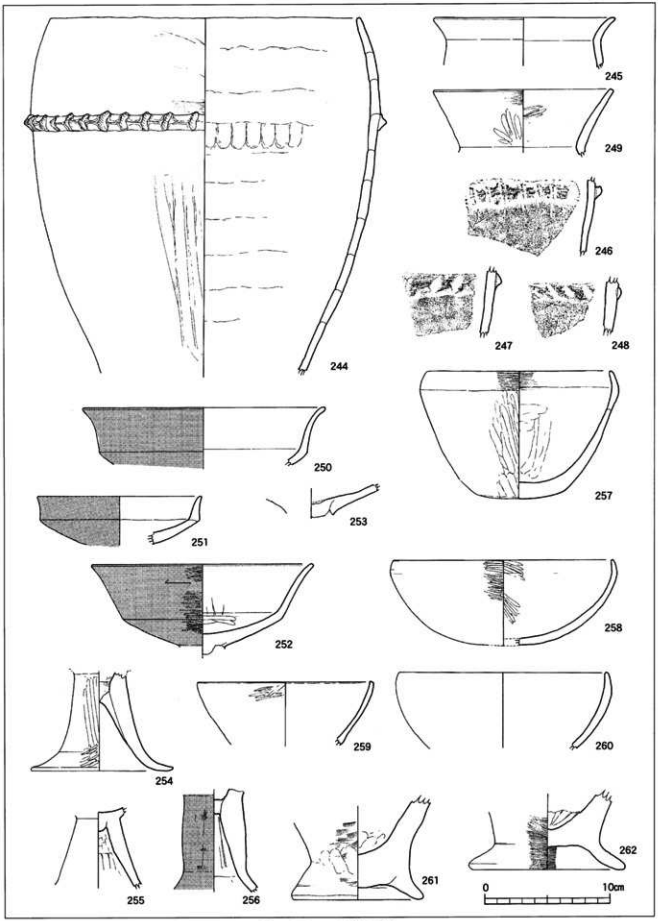
第32図　10号住居


228
229
230
231
232
233
234
237
238
239
235
241
240
243
236
242
0
10cm

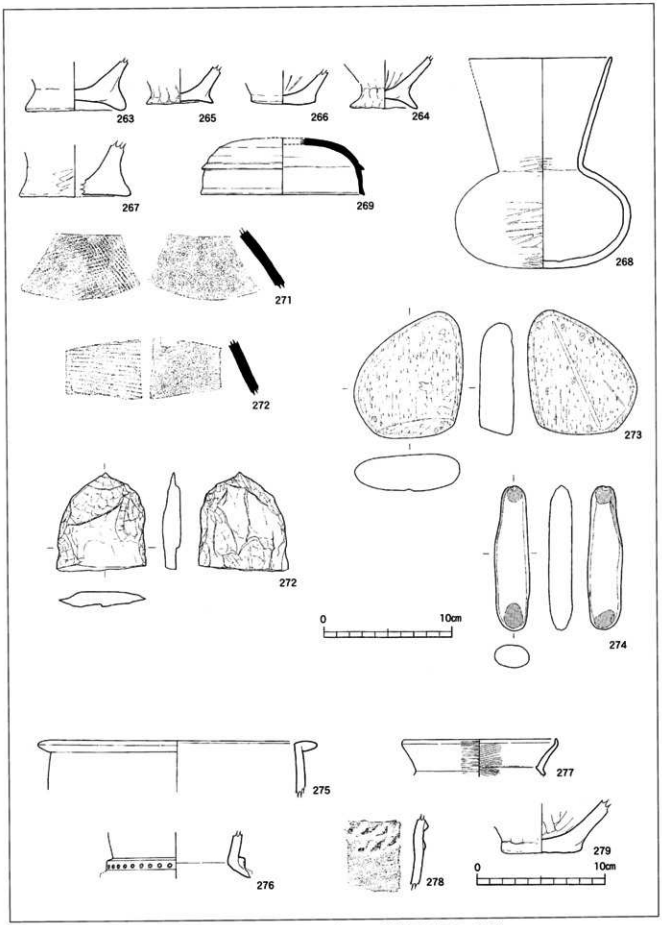
第33図　11号住居



第34図　11号・13号住居


244
245
249
246
247
248
250
257
253
251
252
258
254
259
260
255
256
261
262
0
10cm

第35図　13号住居(1)



第36図　13号(2)（263～274）・12号住居（275～279）

胴部は加熱により器面の剥落が激しい。234は土師器の壷で，頸部に縦長の外耳状の突起を有する。235はあげ底気味の底部である。236は甕形土器の胴部下半で，底部は短い脚台となる。237は高坏の脚柱部で，外面はヘラミガキされている。238も高坏の脚部で，屈折せずに緩やかに開いていく。239は土師器の椀で，内外面ともにヘラ研磨される。240は土師器の壷の丸底の底部である。241は手づくね土器である。242は須恵器で甕の胴部破片で，外面が平行叩きで，内面は同心円叩きをナデ消している。243は抉りのある可能性のある軽石である。

13号住居跡（第34・35・36図）

275は弥生時代前期の甕形土器の口縁部である。276は跳ね上げ口縁の甕であり，やや古手の土師器であろう。277は壷形土器で，頸部突帯には円形の刺突文を施す。278は甕形土器の突帯部分で，つなぎ目にあたる。279は平底の底部である。

14号住居跡（第37・38図）

244は内湾する口縁部の甕形土器で，内外面ともにナデで仕上げてあるが，工具痕が残る。突帯の内面に指頭圧痕と，粘土の積み上げ痕が顕著である。上半部は黒化し，下半は加熱により器面の剥落が激しい。245は，土師器の小型甕である。246～248は甕形土器の突帯部分である。249は土師器の壷であろう。250～252は高坏の杯部で，外面が丹塗りされ，胴部屈折部分の稜が明確である。250は真っすぐに立ち上がった口縁部の端部がさらに外反する。251は口縁部が短く外反して立ち上がる。252は口縁部が大きく外反して，内外面ともにヘラ研磨される。253は杯部と脚部の接合部分で，器面は内外面ともにヘラミガキされる。254～256は高坏の脚部で，いずれもよく研磨されている。256は外面丹塗りである。257は小型鉢で，外面はヘラミガキされ，内面は工具ナデと一部ヘラミガキされる。258・259・260は椀形土器で，内外面がヘラミガキされ，外面と内面の口縁部下に丹塗りされる。261～267は底部で，261・262は甕形土器のもの，262は脚が外側に大きく広がる。263～266は小型の土器の底部で，265・266・267はほぼ平底である。268は土師器の長頸壷で，外面はヘラミガキされている。269は須恵器の蓋杯の蓋で，須恵邑のⅠ－3段階までさかのぼる可能性がある。270・271は須恵器で甕の破片である。外面は平行叩きで，内面は同心円叩きを丁寧にナデ消している。272は頁岩製の打製土掘具の基部，273は軽石製品で，偏平に磨られ，一面に溝を有する。274は砂岩を石材として，両先端に滑面があり，捏ね棒として使われた可能性がある。

14号住居跡（第37・38図）

280は弥生時代中期中頃の大型の甕形土器の口縁部である。281・282は弥生時代中期前葉の甕形土器の口縁部で，283・284は弥生時代中期の壷形土器の突帯部分である。285は甕形土器の突帯部分で，286は壷形土器の幅広の胴部の突帯部分である。287は甕形土器の突帯部分で，ハケ目調整されている。288は高坏の脚部の脚柱部で，裾部が急角度に開くものである。外面は縦方向のヘラミガキである。289は高坏の脚部で，裾部へ緩やかに広がっていく。290は平底であるが，不安定な底部で，指頭圧痕跡が顕著である。291は土師器の坩で，外面はヘラミガキされる。292は平底の底部。293は手づくね土器である。294は頁岩製の撥形の打製土掘具で，先端部が欠損したものである。295は花崗岩を石材とする凹石で，4面に凹部がある。296は細粒砂岩を石材とする有溝砥石である。297は花崗岩を石材とする磨石・敲石である。

15号住居跡（第39図）

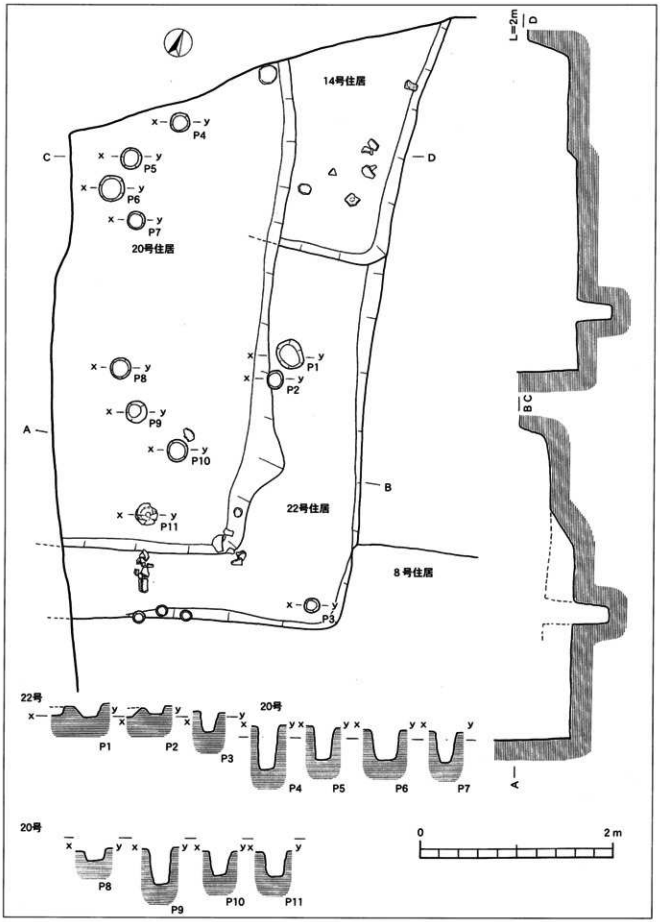
298は弥生時代中期後半の凹線文を模した壷形土器の口縁部である。299は甕形土器で，突帯を巡らす頸部で，内側に稜をもって外反していく。内外面ともにナデ調整される。300・301は甕形土器の突帯部分，302は甕形土器の胴部下半で，高い脚台となる。303はあげ底ぎみに成形するが，指頭圧痕がよく残る。304～306は椀である。304は尖り底で，口縁部はヨコナデで，それ以外は研磨痕が観察できる。外面は黒褐色，内面は茶褐色を呈する。305・306は小さな平底をつける椀で，外面はヘラミガキ，内面はハケ目調整される。307も小さな底部を持ち，やや形が異なるが椀としておきたい。外面はヘラミガキ，内面はハケ目で調整される。308は砂岩の磨石・敲石である。309は粘板岩を石材とする砥石である。

16号住居跡（第40図）

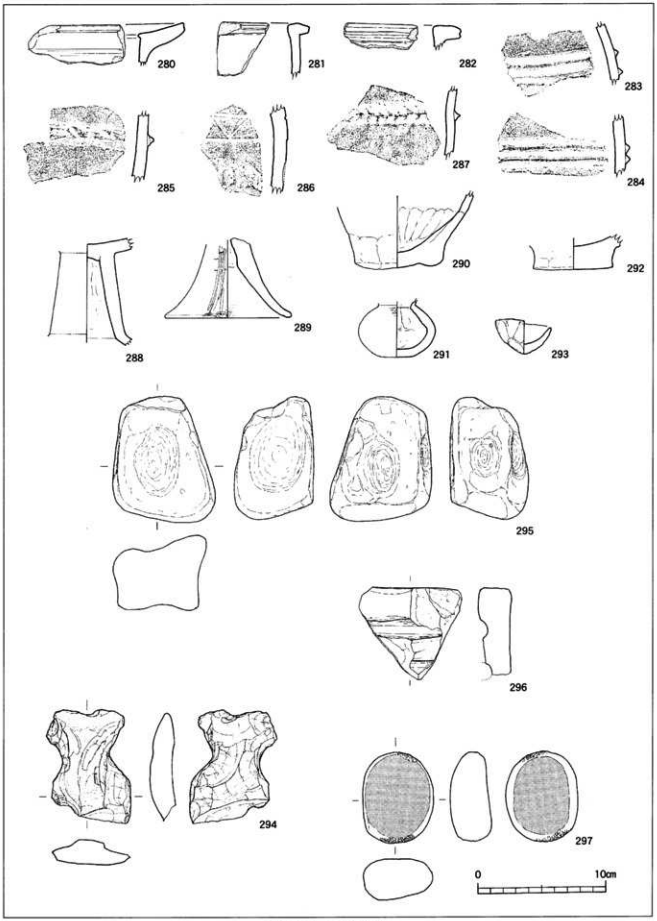
310は細身の甕形土器で，口縁部が直立する。内外面ともハケ目調整されている。311は土師器の二重口縁の壷で，工具でナデられている。312は手づくね土器である。313は頁岩製の打製収穫具の可能性がある。

21号住居跡（第41～43図）

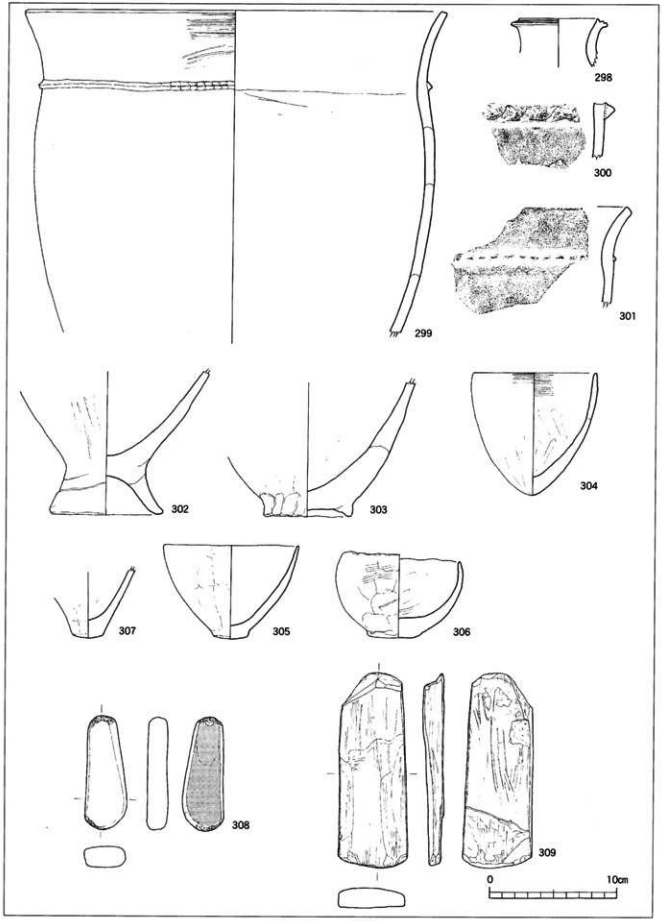
325・326は甕形土器の突帯部分である。327・328は高坏の杯部で，327は口縁端部は外反するが，胴部屈曲部は目立たずかなり深めとなる。内外面ともにヘラミガキされる。328は短く外反する口縁部で，屈折部分に明瞭な稜をつくる浅い杯部である。329は高坏の脚柱部，330は底部で脚台である。331は手づくね土器である。332は突帯文土器で，器面調整は条痕ナデ消しである。333は弥生時代中期の甕形土器で，3条の突帯を貼り付け，ヨコナデで調整される。334は弥生時代中期の壷形土器の肩部で，4条の突帯下にヘラ状工具で強弱をつけて押し引き，沈線を描く。内外面ともにヘラミガキされる。335は短い口縁部が外反し，半円形の胴部をなす鉢形土器である。口縁部の内側から外側にかけて丹塗りしている。内外面ともにヘラミガキされる。336は壷形土器もしくは椀形土器の底部で，底部にわずかに粘土を貼り付けあげ底気味につくる。337は甕形土器のあげ底気味の底部。338～340は高坏の杯部で，338は口縁部が外反し，杯部の中央部で屈折して明瞭な稜がある。内面の口縁部分と外面に丹塗りされており，内外面ともにヘラミガキされる。339は真っすぐ外側に立ち上がる杯部で，杯部中央に沈線を入れて見かけ上



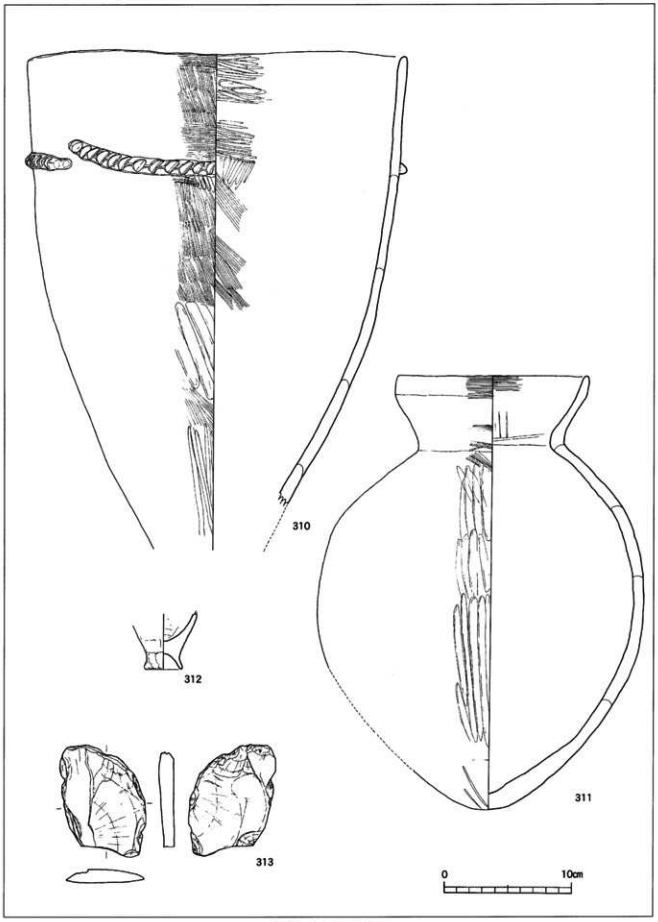
第37図　14号・20号・22号住居


280
281
282
283
285
286
287
284
290
292
288
289
291
293
295
296
294
297
0
10cm

第38図　14号住居



第39図　15号住居



第40図　16号住居

の屈折を表している。内外面ともによくナデ調整される。340は椀状の杯部で，内外面ともにヘラミガキされる。内面は器面が荒れている。341は高坏の脚部で，裾端部が外反する。外面は縦方向のヘラミガキがなされ，丹塗りされる。342はコップ形の土器で，口縁部分内側と外側に丹塗りされる。外面はヘラミガキで，内面は工具ナデ後に一部ヘラミガキされる。343は頁岩を石材とする打製土掘具の完形品である。344は頁岩を石材し，一部磨製の土掘具で完形品である。345は頁岩を石材とする打製土掘具の基部である。346は砂岩の砥石，347は花崗岩の敲石で両端に敲打痕がある。

22号住居跡（第46図）

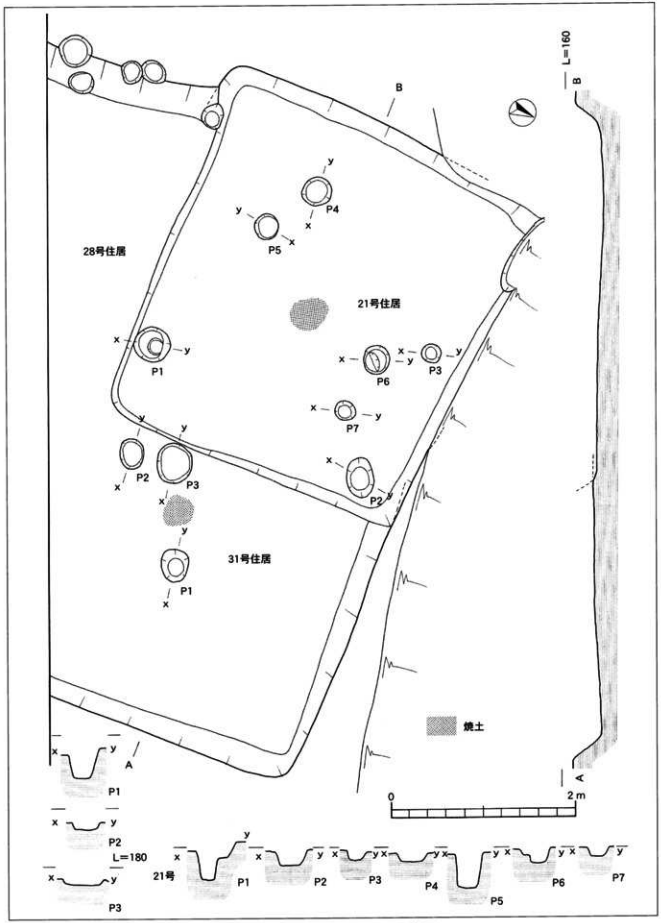
314は甕形土器で，口縁部が内湾して立ち上がり，内湾の度合いが強く器高がやや低めとなると考えられる。外面は工具でナデられ，内面も工具痕が明瞭に残る。粘土の積み上げ痕が残る。315は口縁部がわずかに内湾しながら，ほぼ直立する。316はやや外反する口縁部で小型である。317は坩の口縁部で，外面はよく研磨され，内面はヨコナデで調整される。318は高坏の杯部で，口縁端部は外反するが，胴部屈曲部は目立たずかなり深めとなる。一部に研磨痕があるが，内外面ともによくナデられている。319は同じく高坏の杯部で，粘土を肥厚して外見上は屈曲部が明瞭であるが内面では明瞭でない。320は甕形土器のあげ底気味の底部である。321は丸底で大型の土師器の甕の底部と考えられる。322・323は手づくね土器である。324は砂岩の敲石で，両端部に敲打痕がある。

24号住居跡（第44・45図）

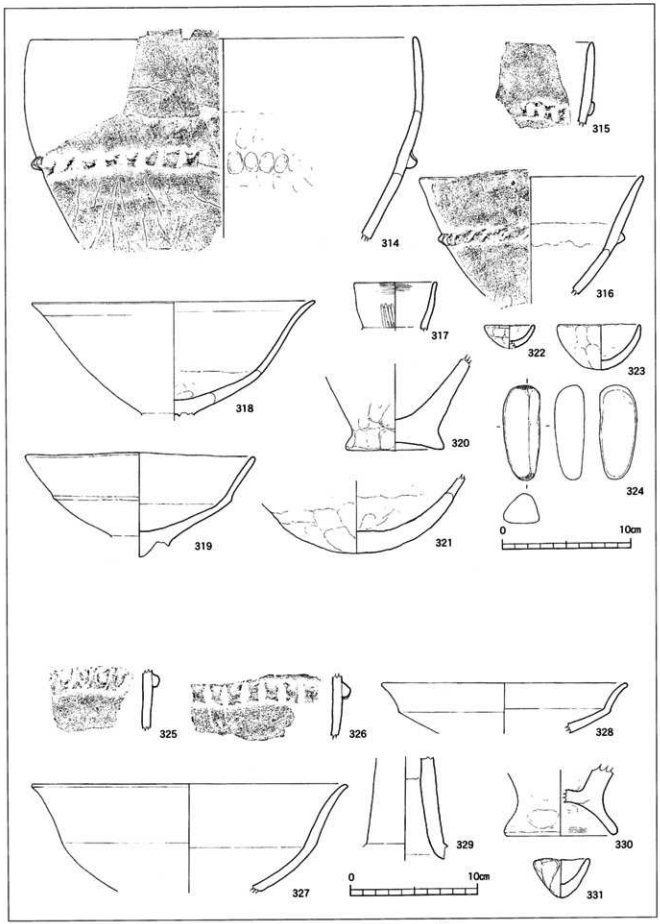
348は甕形土器で，縄文時代晩期のものと考えられる。内外面がヘラミガキされる。349は二重口縁の壺形土器であるとみられるが，時期は不明である。ヨコナデで調整される。350は土師器の甕で，外面はヨコナデ一部研磨様に工具ナデされてあり，内側は工具ナデされる。炭化物が胴部最大径部分から下位に付着している。351は甕形土器で，口縁部が内湾して立ち上がるものである。淡赤褐色で，口縁部分のみヨコナデされ，内外面が工具ナデされている。352は甕形土器の突帯部分，353は甕形土器の突帯部分の突帯のつなぎの段違いする部分である。354は高坏の杯部で，口縁部が外反し，中央で屈折するが，稜はほとんど見られない。ナデ後に一部研磨痕が残る。355は外反する口縁部は立ち上がり気味で，杯部中央で屈折して，明瞭な稜をつくる。内外面ともにヘラミガキされる。356はあげ底ぎみの底部で，外面に指頭圧痕跡を残す。357は甕形土器の底部，ヘラ調整痕が残る。358は須恵器の壺の口縁部で の可能性もある。櫛描波状沈線が巡る。口縁部端部から内側に灰釉がかかる。359・360は頁岩製で，打製土掘具の欠損品である。361は土製円盤で，外面はヘラミガキ，内面は工具ナデされており，弥生時代の可能性がある。

25号住居跡（第46図）

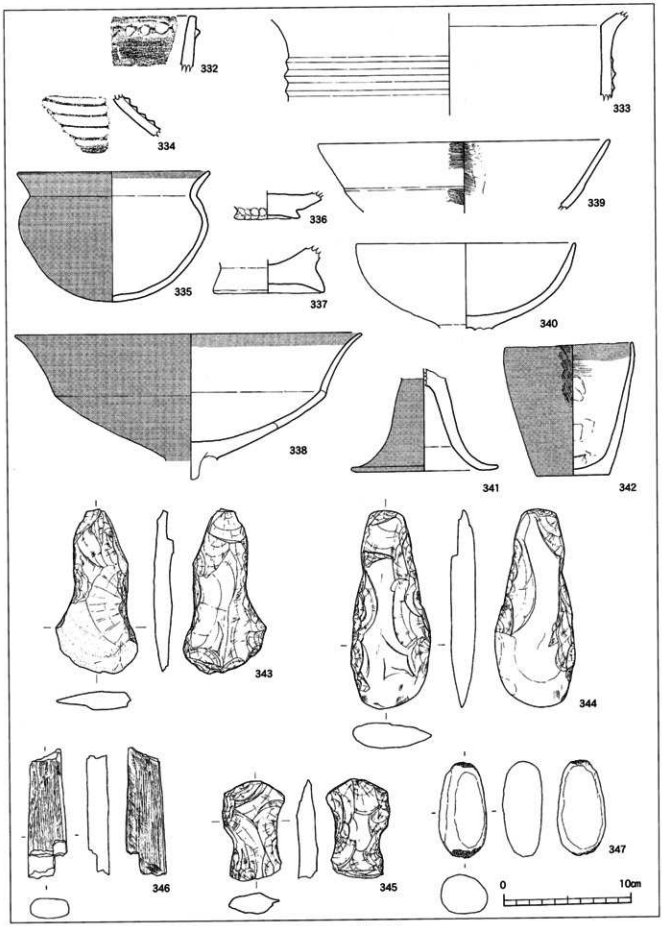
362は突帯文土器に伴う精製の台付鉢形土器で，黒褐色を呈し，内外面ともにヘラミガキされる。363は内外面ともにハケ目を残し，鉢形土器の口縁部の可能性が高い。364は甕形土器の突帯から上の口縁部分で，炭化物が付着している。365は弥生時代中期初頭の甕形土器の口縁部で，366は弥生時代中期の壺形土器の突帯部分である。367は土師器の壺の楕円形の胴部である。内外面ともに工具ナデされる。368は高坏の脚部で，脚柱部から大きく屈折して裾部が大きくひろ



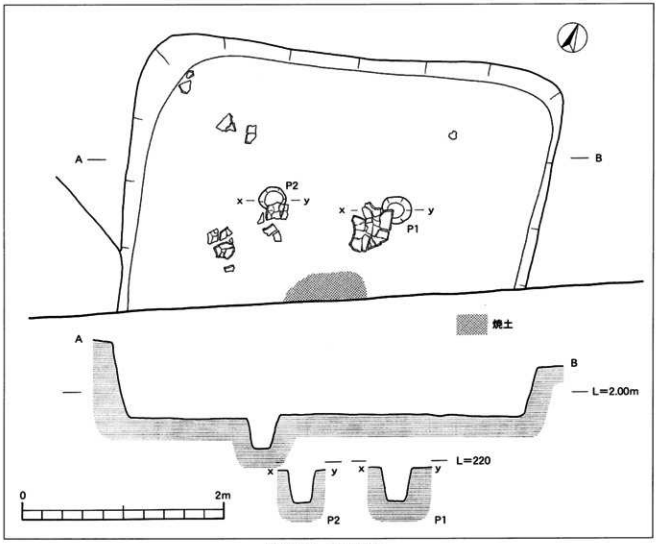
第41図　21号・28号・31号住居



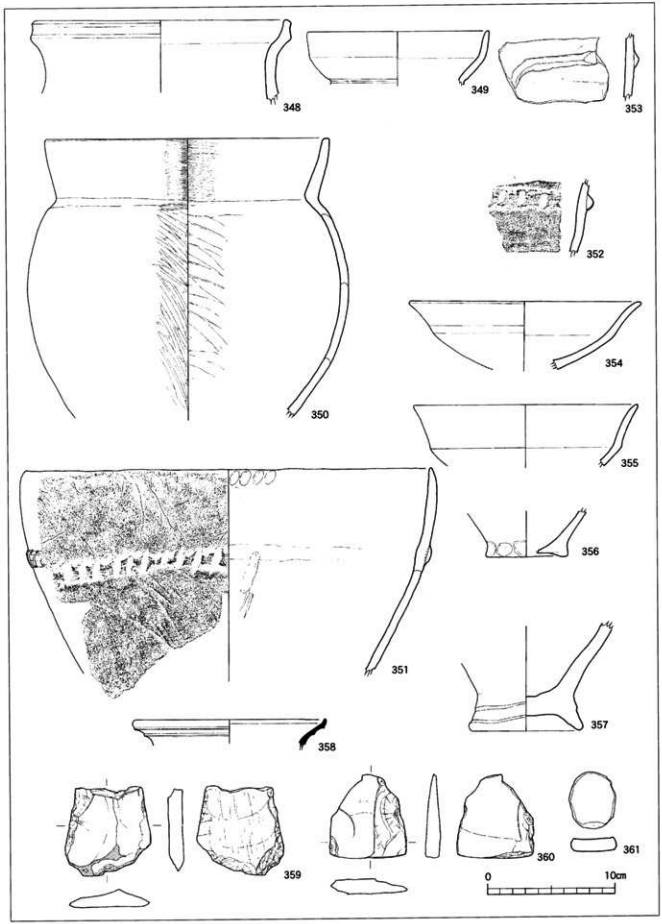
第42図　22号（314～324）・21号(1)住居


332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
0
10cm

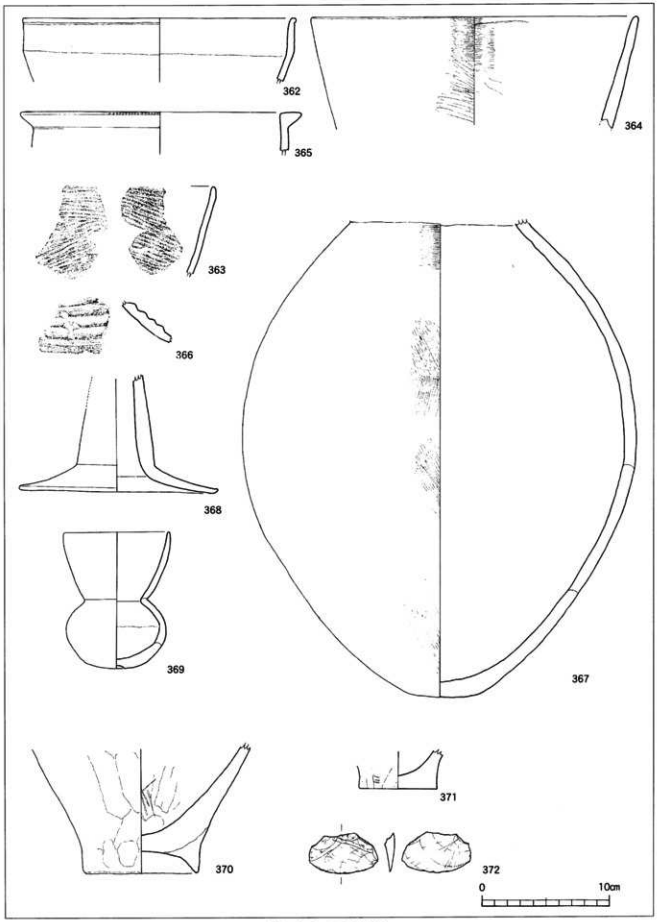
第43図　21号住居(2)



第44図　24号住居



第45図　24号住居



第46図　25号住居

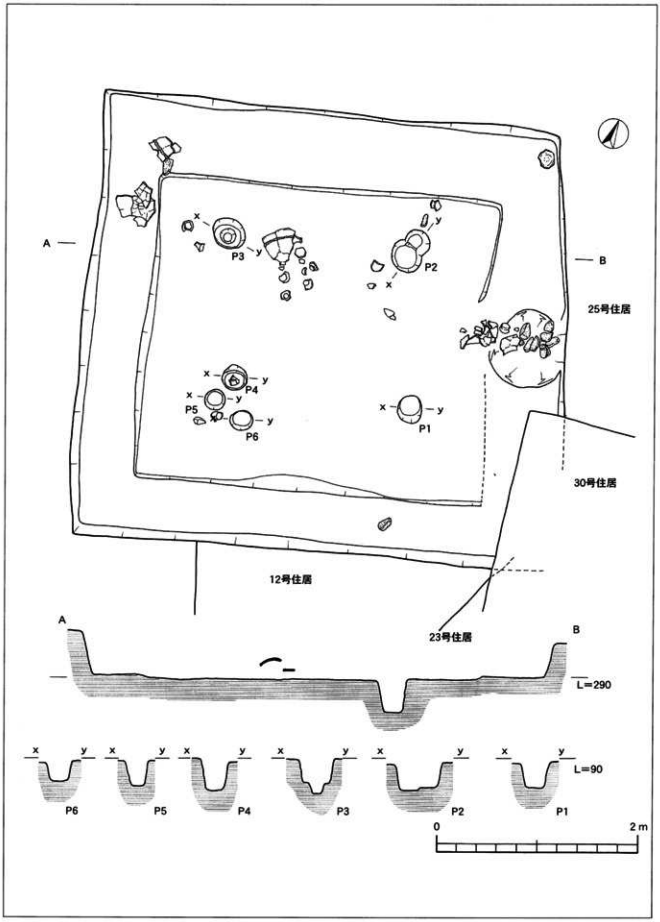
がる。外面はヘラミガキされる。369は坩で，口縁部が胴部より若干大きくなる。外面はヘラミガキされ，口縁端部ヨコナデ，口縁内面はナデ調整されていく。370は甕形土器の底部で，あげ底気味で炭化物が付着している。371は平底の底部で，弥生時代のものの可能性が高い。372は頁岩の剥片である。

26号住居跡（第47～49図）

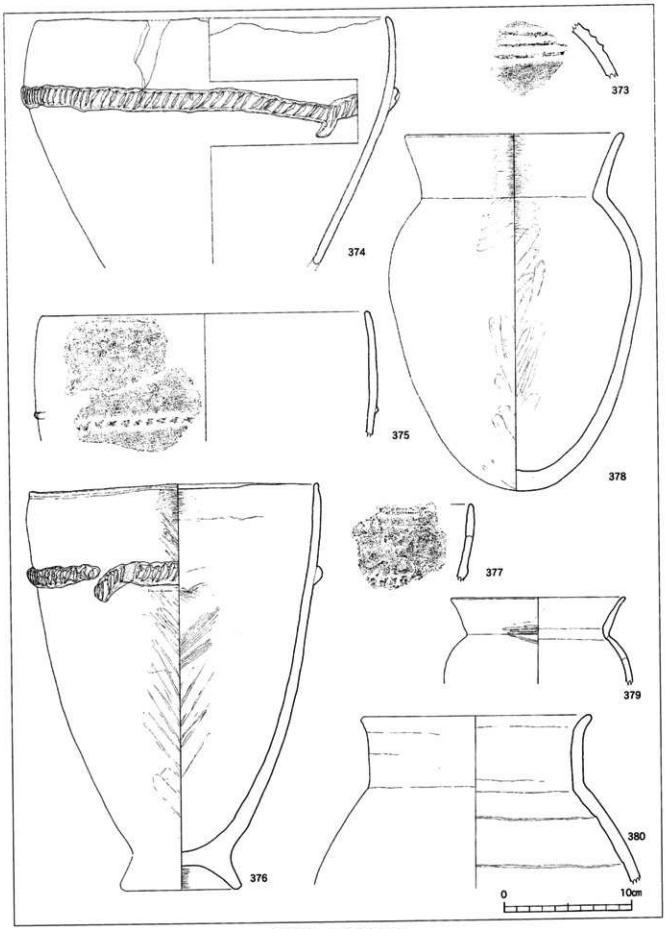
373は弥生時代中期の壺形土器の肩部で，内外面ともにヘラミガキされる。374は口縁部が内湾して立ち上がる甕形土器で，灰褐色を呈する。胴部は研磨様の工具ナデで，その後口縁部付近はナデられている。指頭圧痕が残る。375は同じく内湾するが，374程顕著でない。内外面ともに工具ナデである。376も口縁部が若干内湾ぎみに立ち上がる細身の甕形土器で，底部は低い脚台となる。外面は研磨様の工具ナデされ，突帯下から胴部にかけて炭化物が残る。内面は工具ナデされている。377も同様の甕形土器で，内外面ともに工具ナデされている。粘土積み上げ痕跡が顕著である。378は土師器の甕で，口縁部が外反して，楕円形の胴部がつく。口縁部はヨコナデで，胴部外面は工具ナデ，内面も工具ナデで調整される。胴部は加熱による器壁の剥落が激しい。379は土師器の小型壺で，口縁部内面から外面はヘラミガキされ，外面には炭化物が付着する。380は土師器の壺で，内外面ともに研磨様の工具ナデがなされ，内面はナデられている。粘土積み上げ痕跡が顕著である。381・382は高坏の杯部で，杯部中央で屈折して稜をつくる。内外面ともにヘラミガキされている。383は高坏の脚部で，円柱状の脚柱部に裾部が大きくひろがる。外面はヘラミガキされている。384は椀で，口縁部内側は明赤褐色を呈して，口縁部はヨコナデであるが，内面は放射状にヘラミガキされ，暗文風に仕上げている。外面は横方向のヘラミガキである。385は坩で，ヘラミガキで丁寧に仕上げている。386は坩の口縁部で，ヨコナデ一部ヘラミガキ痕が残る。387は坩の胴部で扁平化が見られる。外面ヘラミガキで仕上げられる。胴部下半は黒褐色である。388～395は底部で，388は平底の底部，389は縄文時代晩期の鉢の底部で，内側はヘラミガキされる。390・392・393はあげ底気味の底部，391・394・395は脚台，396は平底である。397は須恵器壺の口縁部で，398は須恵器の高坏の脚部である。399・400は須恵器の甕の肩部で，外面が平行叩きで，内面は同心円叩きをナデ消してある。398はやや焼きが甘く淡い青灰色をなしている。401は土師器の把手で，甑のものであろう。402～404は頁岩を石材とする打製土掘具の欠損品である。403は完形品。

27号住居跡（第50～52図）

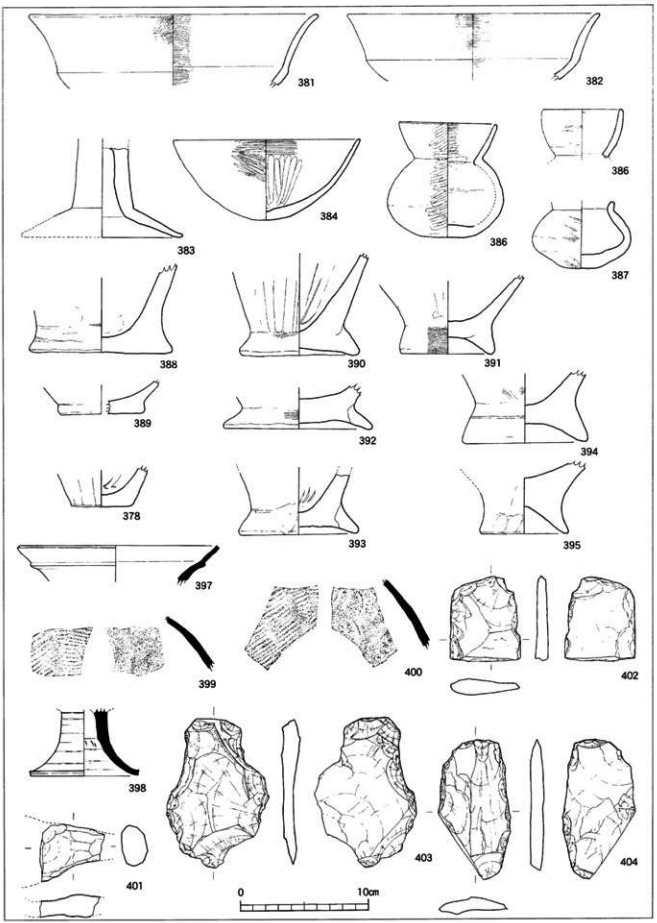
405～408は甕形土器で，内湾して立ち上がる口縁部に，細身の胴部で，あげ底気味の短い脚台のつく底部を有し，最大径は口縁部下にある器形のものである。405は口縁部がヨコナデで，内外面ともに工具ナデされ，突帯が指でつまみ出される。406は刻みに繊維圧痕があり，突帯の内側に指頭圧痕が顕著である。口縁部はヨコナデされ，内外面ともに工具ナデである。407は口縁部がヨコナデ，内外面ともに工具ナデされる。408は内外面ともに上半分がハケ目調整され，下位は工具ナデで縦方向に調整される。409は土師器の二重口縁の壺で，ヨコナデされている。410は土師器の小型壺で，ハケ目調整される。411～414は高坏で，411～413が杯部，414が脚部である。411は口縁部が外反し，杯部の中央で屈折する，稜の明確な杯部で，内外面ともに



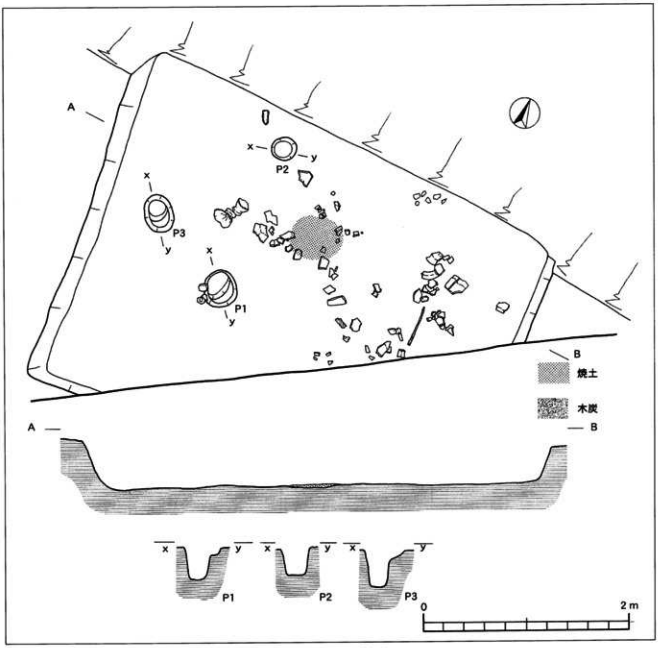
第47図　26号住居



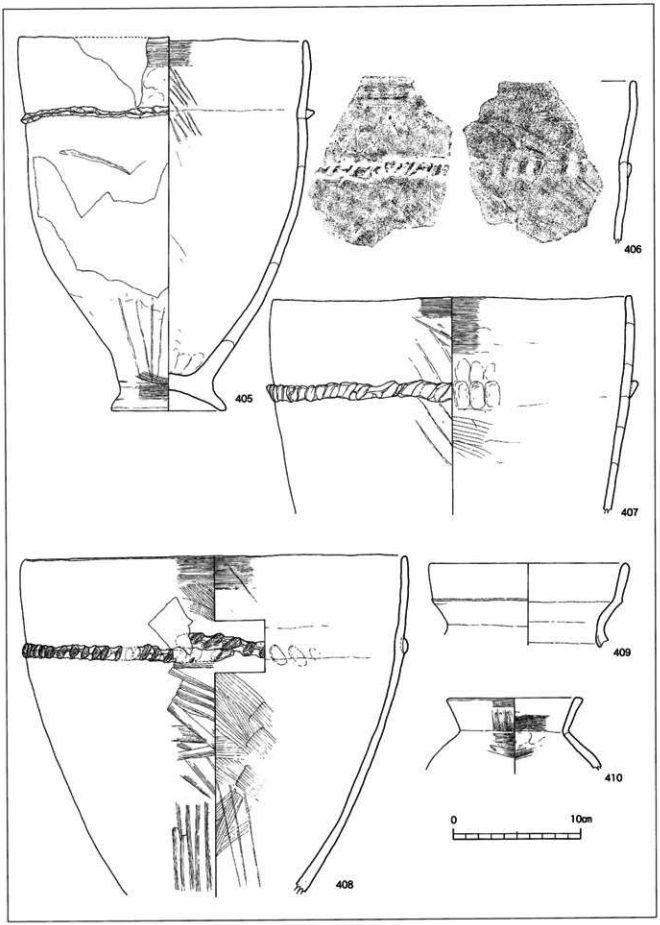
第48図　26号住居(1)


381
382
383
384
386
386
387
388
390
391
389
392
394
378
393
395
397
399
400
402
398
403
404
401
0
10cm

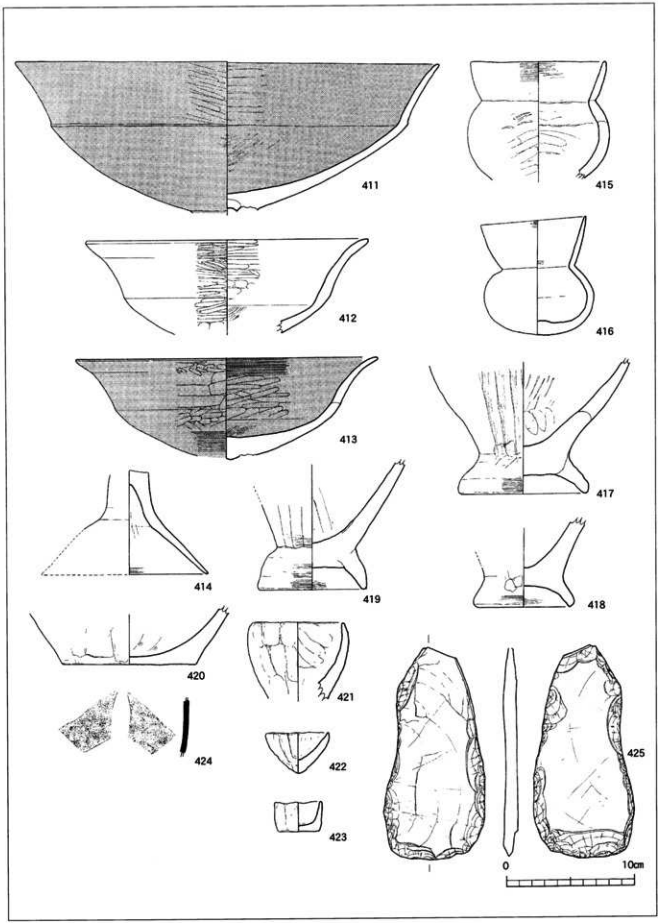
第49図　26号住居(2)



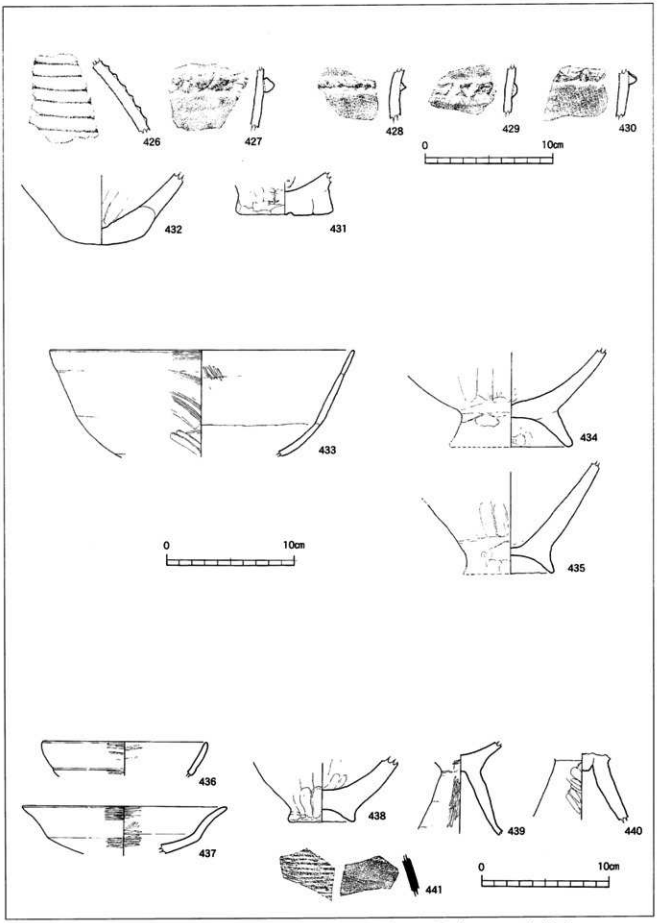
第50図　27号住居



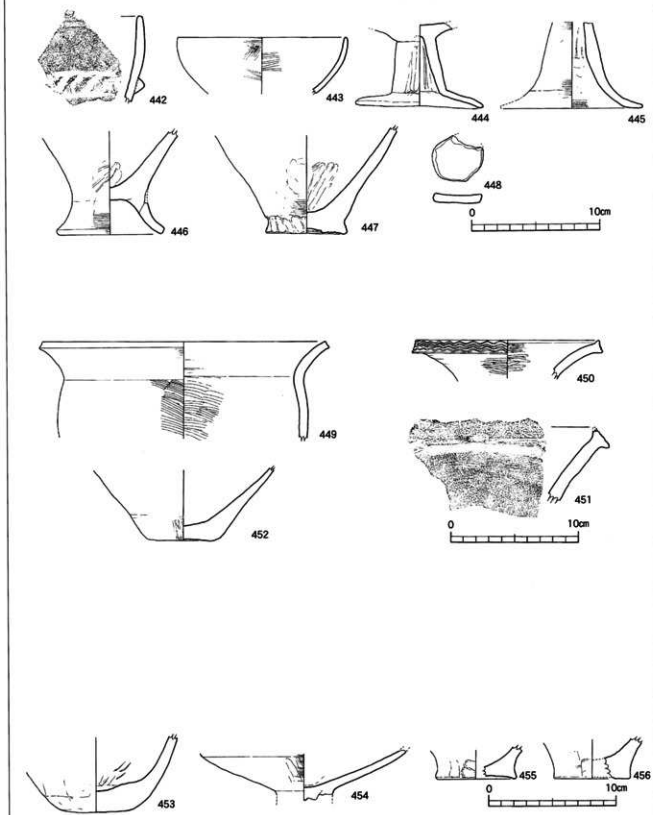
第51図　27号住居(1)


411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
0
10cm

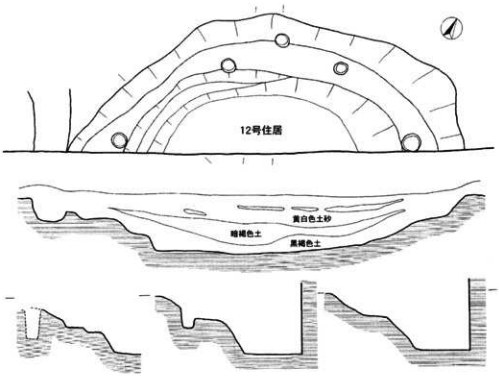
第52図　27号住居(2)



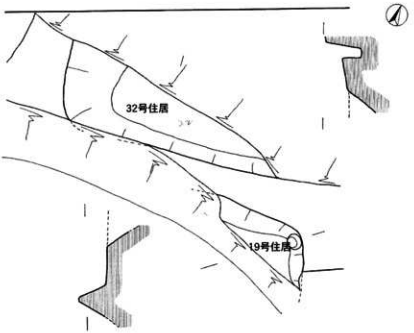
第53図　28号（426～432）・29号（433～435）・30号（436～440）住居



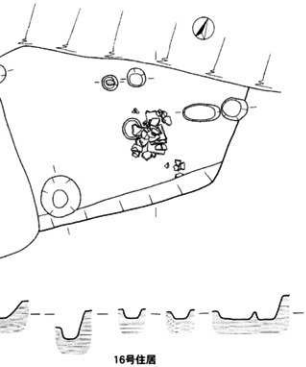
第54図　31号・34号・35号住居



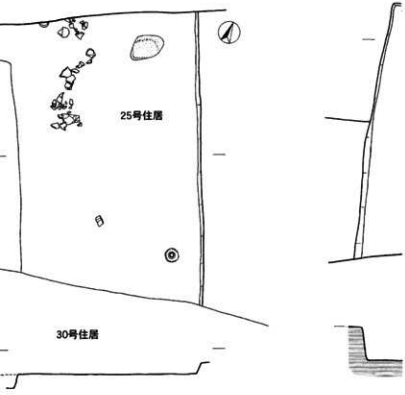
12号住居



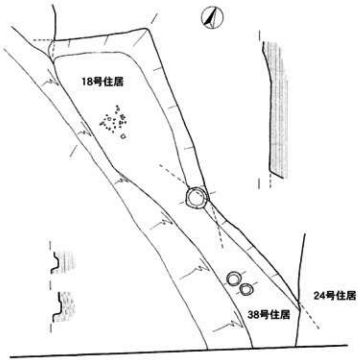
26号住居

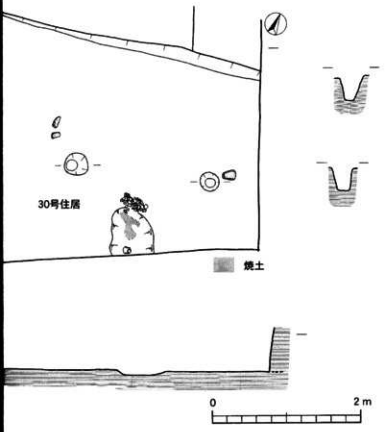


16号住居



第55図　竪穴住居実測図


18号住居
24号住居
38号住居


30号住居
焼土
0
2 m

ヘラミガキされ，丹塗りされている。412はやや下方で屈折するが，稜が顕著でない。内外面ともにヘラミガキされる。413は口縁部は大きく外反し，杯部の下半は椀状となり，稜は顕著でない。内外面ともにヘラミガキされ，丹塗りされている。414は脚柱部が短く，裾部は内湾気味に開いていく。415・416は坩で，415は粗雑なつくりである。416は器壁も薄く，ヘラミガキされる。417～420は底部で，417～419は脚台，420は平底で弥生時代のものである可能性が強い。421～423は手づくね土器である。424は須恵器で，瓶の破片の可能性がある。425は頁岩を石材とする打製土掘具の完形品である。

28号住居跡（第53図）

426は弥生時代中期の壷形土器の肩部で，突帯6条あり，外面ヘラミガキで内面はナデ調整される。427～430は甕形土器の突帯部分であり，427は突帯の刻み部分に繊維圧痕がある。431は平底の底部で，432は壷形土器の底部である。

29号住居跡（第53図）

433は高坏の杯部で椀状をなし，稜がない。調整はナデの後にヘラミガキされる。434・435は底部で中空脚台である。

30号住居跡（第53図）

436は高坏の杯部で，杯部中央に沈線をめぐらす。内外面ともにヘラミガキされる。437は大きく外反する口縁部に，杯部中央で屈折し稜をつくるもので，内外面ともにヘラミガキされる。438はあげ底状の底部である。439・440は高坏の脚部で，439は外面に縦方向のヘラミガキがなされる。441は須恵器の甕の破片で，外面は平行叩きで内面はナデてある。

31号住居跡（第54図）

442は甕形土器で，内湾して立ち上がる口縁部はヨコナデされ，外面は工具ナデされる。443は椀で，内外面ともにヘラミガキされる。444・445は高坏の脚部で，444は脚柱部から大きく屈折して裾部がひろがる。外面はヘラミガキされる。445は屈折部がはっきりせず，自然とひろがる裾部で，外面がヘラミガキされる。446・447は甕形土器の底部で，446は脚台が付き，447はあげ底気味の平底で，指頭圧痕の押さえが顕著である。448は土製円盤である。

34号住居跡（第54図）

449は土師器の甕で，口縁部はナデられ，口縁部以下は内外面ともにハケ目調整される。450は壷形土器の口縁部で，口縁端部外面に櫛描文が波状に施される。内外面ともにヘラミガキされる。451も口縁端部外面に櫛描文が波状に施される壷形土器で，内外面ともにヘラミガキされる。弥生時代末の時期が考えられる。452はあげ底気味の底部である。

35号住居跡（第54図）

453は壷形土器の底部である。454は高坏の杯部で，口縁部がないが，屈折して外反していくものと考えられる。外面はヘラミガキされる。455・456平底の底部である。

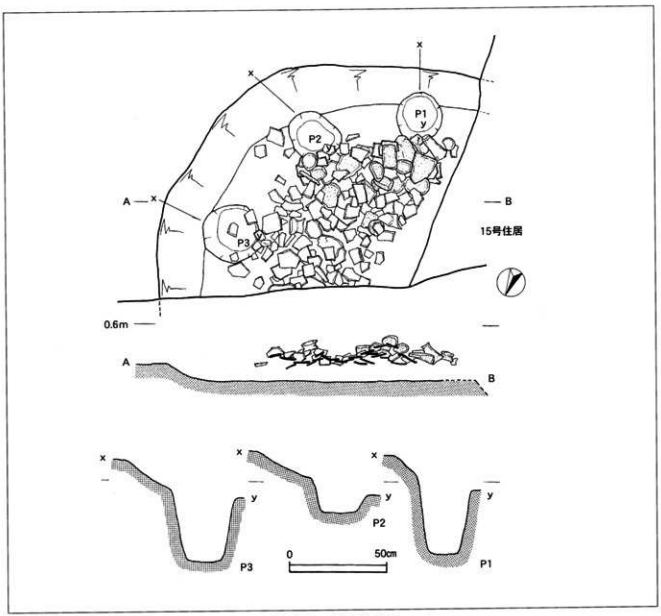
土器は金雲母を多く含み，遺跡の南側の国見山系が花崗岩体を中心としていることから，在地の粘土を使用して土器製作を行った。住居跡に石製土掘具が伴うのが一般化できる。また磨石・敲石も花崗岩の円礫が目立つ。

③ 土器溜まり（第80図）

A7区から検出された土器溜まりである。遺構北側半分は調査区外に広がり，西側半分は15号住居で断ち切られているが，楕円形を呈するものと思われる。現存する径は130m，深さ22cmである。土器の破片が密集して出土した。甕形土器・壺形土器・高坏形土器・鉢形土器・打製石斧及び凹石である。

出土遺物（第57・58図）

457～463は甕形土器である。457は復元口縁径36cm，器高31cmを測り，底部は中空の脚台を有し，胴部は張らないタイプである。口縁部は外反し，頸部内側に弱い稜を持つものである。内外面はヘラ及びナデを中心に調整している。458は口縁部から胴部にかけての破片で，復元口縁径24.8cmを測る。胴部はやや張り，頸部に弱い段を有し，口縁部は外反する。内外面の調整は，胴部がヘラを中心とし，口縁部はナデを中心とした調整である。459も458と同様に口縁部から胴部にかけての破片である。胴部は張らず，口縁部で外反し，口縁端部は鋭くおさめている。



第56図　土器だまり

内外面は，内面がヘラ及びナデ調整で，外面がヘラ ナデ及び指頭ナデで，両面ともにその調整は粗く，器壁も凹凸が激しい。460はやや小型の歪な甕形土器で，低い脚台を有し，胴部は若干張っている。口縁部は外反し，頸部内側には弱い稜を持つものである。内外面の調整は，ヘラ調整の後指頭ナデを中心とするが，その調整は粗く，459と同様に器壁は凹凸が激しい。461・462は外反する口縁部片で，頸部に一条の刻目貼付突帯を施ものである。内外面のは，ハケの後に丁寧なナデ調整を中心とする。463は中空の胴部から脚部にかけての破片である。内外面は，内面がヘラ，外面がヘラ及び指頭ナデ調整である。特に，脚台付近は指頭よるナデが著しい。

464は胴部最大径21㎝を測る壷形土器の頸部から胴部にかけての破片である。胴部最大径よりやや上位の部位に2条の刻目貼付突帯文を施している。内外面は，内面が指頭によるナデの後にナデを斜位から横位に施し，外面の頸部付近では，縦位から斜位のナデ，胴部付近は横位のナデ調整である。465・466は高坏形土器の脚部破片である。465は坏部を欠損し，脚裾部が大きく内湾し，脚裾径23.4㎝を測る器形である。脚部には柱脚部と脚部の境及び柱脚部には，径8㎜の透孔を外側より穿つが，柱脚部と脚部の穿孔は内側周辺が欠落している。柱脚部は上位はハケ，その下位はヘラ磨き，裾部は指頭ナデ後横位のナデ調整を施す。466は円筒状の柱脚部で坏部及び脚部は欠損している器形で，縦位及び斜位のヘラ磨き調整である。

467は小型の鉢形土器で，復元口縁部径14.4㎝，底径7㎝，器高14.4㎝を測る。内外面は，粗いヘラによる調整である。468は甕形土器，469は壷形土器の底部破片で，ともに指頭ナデ後粗いナデによる調整を施す。

470と471は扁平な打製石斧である。470は両面を大きい剥離で調整し，側縁部は大小の剥離整形し，刃部を欠損する。471は基部側に若干の抉りをもつ形状が推定される石斧破片で，中ほどから刃部側を欠損し，大小剥離により調整されている。472は凹石で両面及び片側面とが使用により窪み面をもち，一部には磨面が観察され，周側縁部は敲打痕を顕著に認め，磨石や敲石の役割も兼ね備えている。

(2) 出土遺物（第59～62図）

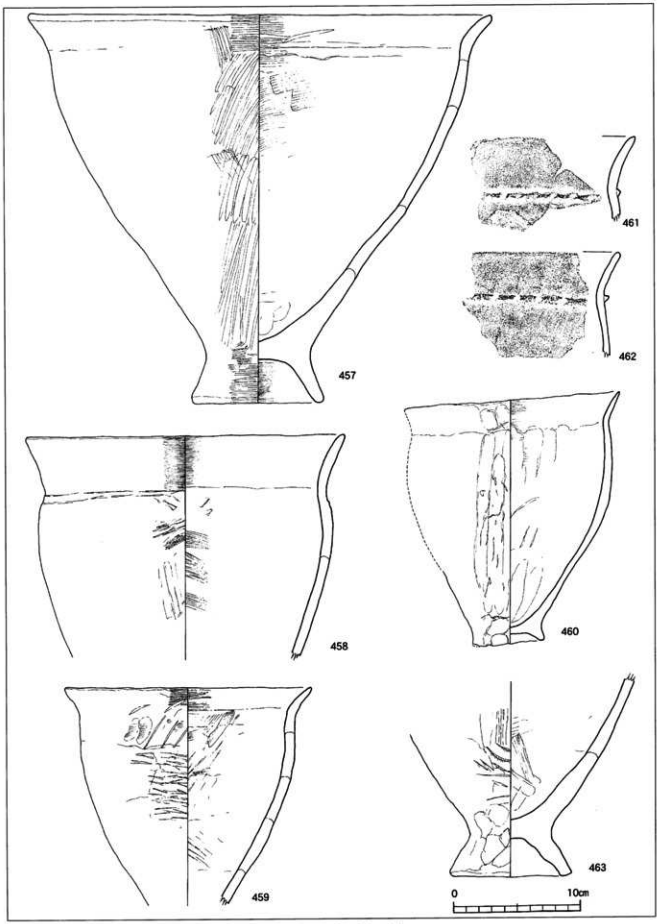
① 土 器（第60～64図）

出土遺物には甕形土器，壷形土器，高坏形土器，鉢形土器及び坩形土器，手捏ね土器，紡錘車がある。

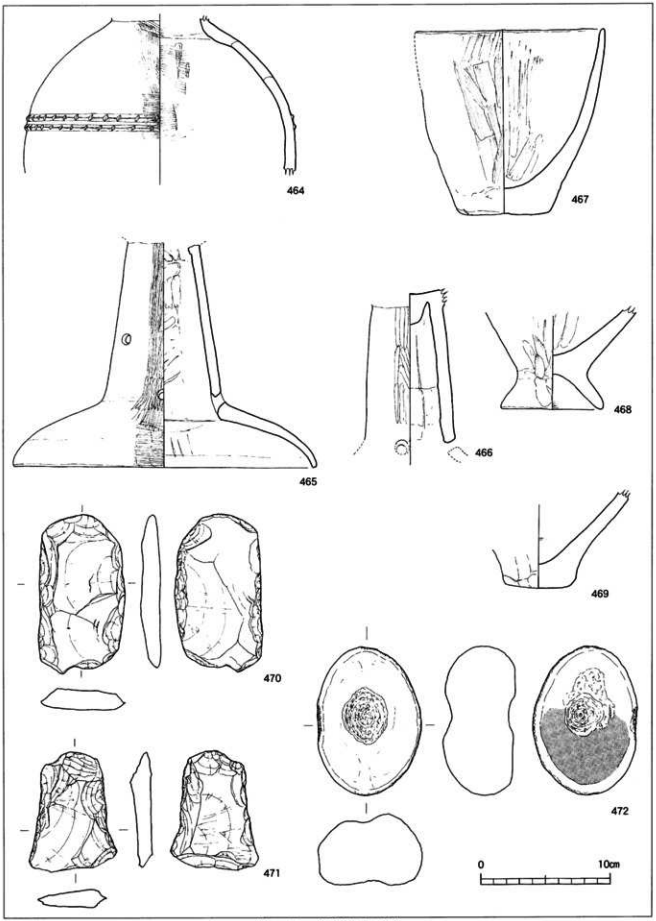
473は複合口縁をもつ壷形土器の口縁部破片で，口縁径12㎝を測り，内径すると思われる頸部から急に開き，拡張部が内径する比較的高い口縁部で，口唇端部はやや丸く仕上げている。外面の調整は，横位のナデ，内面の上位はハケ，その下位はナデを施す。474は口演部から胴部下位にかけての甕形土器て，やや内湾気味の口縁部を呈し，口縁径20.8㎝を測り，頸部には斜位に刻目突帯を巡らし，胴部の張りのない器形である。内面の上位には，横位及び斜位のナテで，その下位はヘラで，外面の上位は，横位のナデ，突帯から下位は，斜位のヘラによる調整を施す。

475・476は甕形土器の胴部破片の貼付突帯で，475は，幅4㎝の略台形状の貼付突帯で，ヘラ状施文具によるX字状の刻目突帯で，475のヘラ状工具により斜位に刻目突帯である。

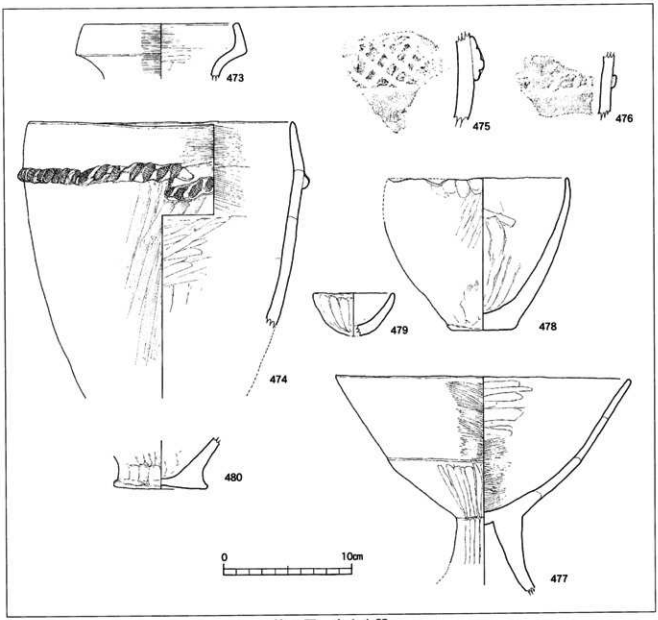
477は高坏土器の坏部から柱脚部一部にかけての器形で，坏部の口縁部は外開きの椀形を呈し，坏部の外側に屈折部をもつ，坏部の口縁径22.9㎝，坏部高11㎝を測る。



第57図　土器だまり(1)



第58図　土器だまり(2)



第59図　出土土器

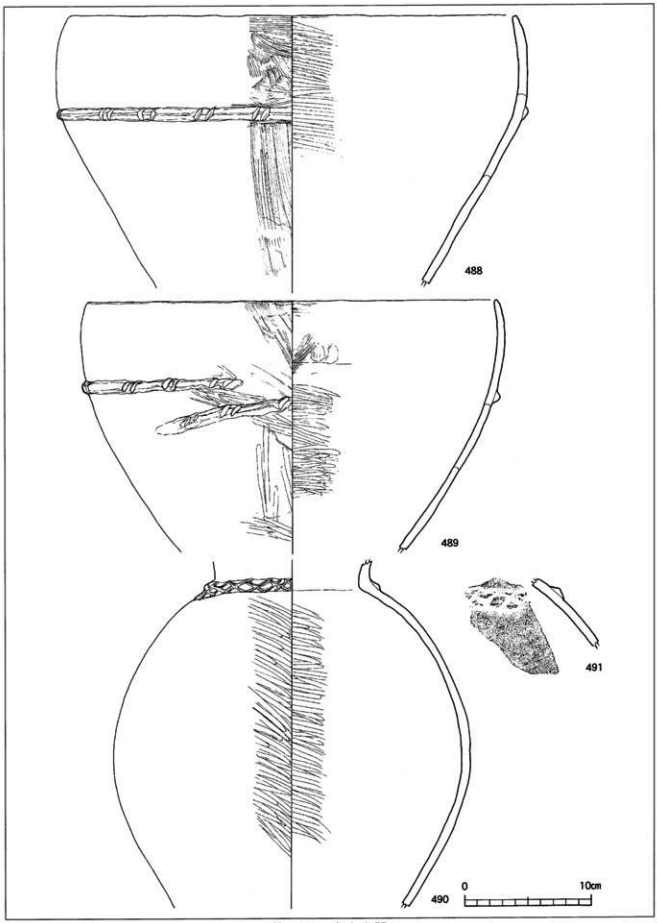
柱脚部の中程から欠損しているため，その形状は不明である。内外面ともにヘラ磨きによる調整をが施す。

478はほぼ完形な鉢形土器で，若干歪な器形を呈し，復元口径14㎝，底径10㎝，器高が12㎝を測り，平底の小型である。内面の調整は，粗い指頭によるナデ，外面は，口縁部の一部には指頭によるナデや粗いヘラによるナデの調整痕を認める。479は小型の鉢形土器で，口縁径が6.2㎝を測り，外面には指頭によるナデ調整を施す。480は，時期不明な底部破片である。

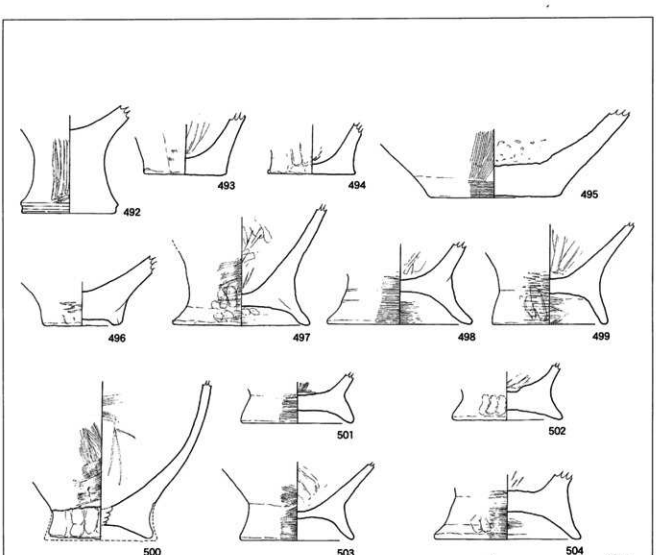
481～489は甕形土器で，481は大きく外反する口縁部で，口唇部端部は平坦におさめる。

口縁部から頸部にかけての破片で，復元口径30.6㎝を測り，頸部にはヘラ状工具による刻目貼付三角突帯を巡らす。内外面ともに丁寧なハケによる調整を施す。482は口縁部から胴部下位にかけての破片で，口縁径28.4㎝を測り，外反する口縁部で口縁端部は丸くおさめる。胴部にはヘラ状工具による2つの刻目を等間に配しているように刻目貼付突帯を巡らす。内外面には，横位及び斜位にヘラなで，外面の一部にヘラ磨きを施し調整する。483・485～487は直口する口縁部破片で，ともに刻目貼付突帯を巡らす。

第60図　出土土器



第61図　出土土器

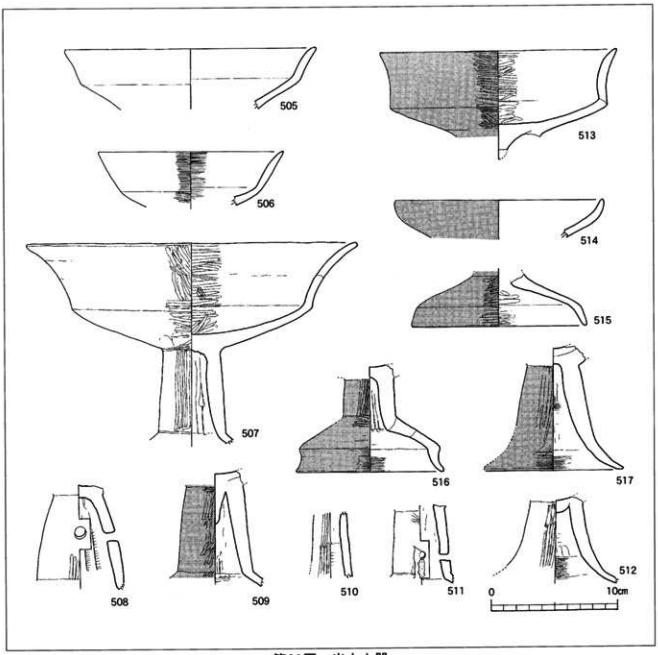


第62図　出土土器

485～487は僅かに内傾する口縁部破片である。483は復元口縁径30.4㎝，484は復元口縁径23㎝，485は復元口径26.6㎝，486は，復元口径30.8㎝，487は，28.8㎝を，それぞれ測る。ともに内外面の調整は，丁寧なハケによる調整を施す。

488・889は甕形土器で底部を欠落した土器である。

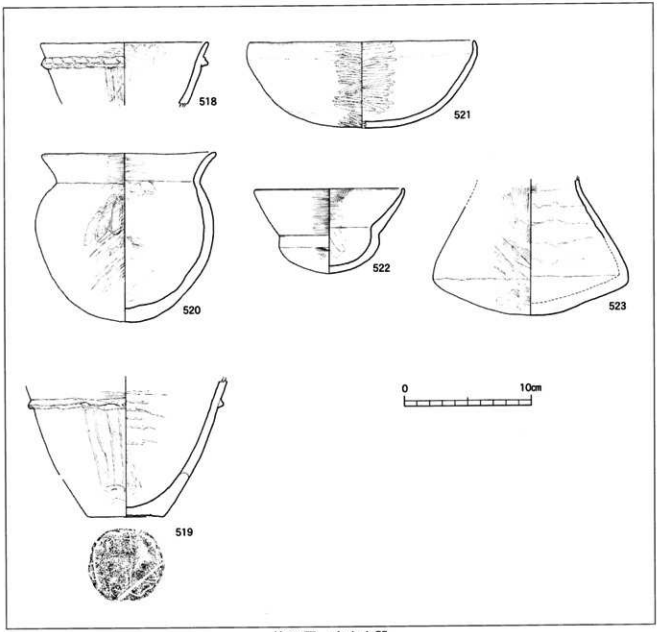
488・489は内傾する口縁部で，ともに口縁部から胴部下位にかけての破片である。頸部には482と同様な刻目貼付突帯を巡らすが，489の突帯は，一巡らすがずれて貼付がされる。488は，復元口縁径34.8㎝を測り，胴部上位が張るような形状を呈している。内面は，横位及び斜位にともにヘラなで，外面は口縁部から突帯までは，ヘラなでをこまめに横位及び斜位に施し，突帯の下位はヘラを中心に縦位のナテ調整である。489は復元口縁径38㎝を測る。内面は指頭による調整やヘラを中心になで，外面は粗いヘラなで調整を施す。



第63図　出土土器

490・491は壺形土器である。490は口縁部と底部付近が欠落し，491は頸部の小破片である。490は胴部径28㎝を測り，頸部にはヘラ状工具によるX字状の刻目貼付突帯を巡らし，内外面ともに斜位のヘラを中心に調整を施す。491は頸部付近にX字状に刻目貼付突帯を巡らすと思われる破片である。

492～504は弥生時代から古墳時代にかけての底部破片である。492は，弥生時代中期の甕形土器の充実した脚台である。底径8㎝を測り，裾の広がりはあまりなく，裾の端面は凹線状を呈し，外面の調整は縦位のヘラ中心の調整を施す。493・494は鉢形土器か壺形土器の平底の破片で，ともに底径6.6㎝で，493は裾端部が僅かに張り出す。495は弥生時代中期の壺形土器の平底の破片で，底径10㎝を測り，内側の底面付近は剥落し，外面はヘラ磨きによる調整を施す。



第64図　出土土器

496～504は底面が窪む破片で，指頭やヘラなで，ヘラ磨きによる調整が中心である。496は，僅かに窪み，底径6.4㎝を測る。497・498は底面の裾部が大きく張り出し，499の裾の張りはない。497は底径10.8㎝で，若干大きく窪む破片で，498・499は大きく窪んだ破片で，498は底径11.2㎝で，499は底径9㎝を測る。500は一部が剥落しているため不明であるが，若干窪む破片である。501～504は小破片のため器種の同定はできないが，弥生時代後期の松木薗遺跡にみられるようなタイプで，底面が僅かに窪むもの大きく窪むものがある。501・503は底径8.9㎝，502は底径8.6㎝，504は，底径11.4㎝をそれぞれ測る。

505～507・513・514は高坏形土器の坏部の破片である。505は，内外面ともに磨滅を受け調整は観察されない。506は内外面ともに丁寧なハケなで調整を施すか，一部外側にヘラ磨きにより調整を施す。507の坏部は，内外面とも横位や斜位に丁寧なヘラけずりやヘラ磨きにより調整し，脚部の柱状部は縦位のヘラけずりにより整形する。

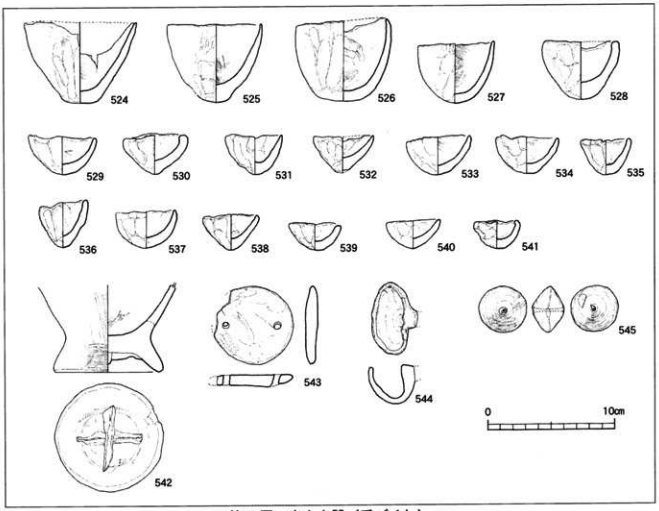
513～514はともに丹彩研磨を施すが，513は内外面ともに丁寧なヘラ磨き調整後に丹彩を施している。

508～512・515～517は高坏土器の脚部破片で，508～511は柱状部だけの破片で，512・515～517は脚部だけの完形品である。508は屈曲部へ大きく広がる柱状部の破片で，その中央部に径10㎜の穿孔を有するもので，一部にヘラみがきの調整痕を残す。509は屈曲部の内外に稜線が鮮明に観察でき，横位や斜位にヘラけずり調整後に丹彩を施す。510は柱状部のみの小破片で，縦位のヘラけずりが観察できる。511は柱状部のみの破片で，屈曲部側よりに径5㎜の穿孔をもつもので，一部を欠落するが屈曲部の内外側に稜線をもつものである。512は柱状部から裾部にかけての破片で，裾端部へ大きく開き端部を欠落している。内側裾側は，横位のハケなで，外面は縦位のヘラけずりが施される。515は脚部低く大きく開き，柱状部の裾端部近くで内湾気味で短い。脚部の内側の坏部付近ではヘラ削り，裾付近は丁寧な横位のハケ目調整で，外側は，横位や斜位の丁寧なヘラ削りの後に丹彩を施す。516は柱状部は短く，その屈折部から大きく外反し，裾端部の付近くに屈曲部を設けて僅かに外反するが短く裾端部を造り出している。裾端部と脚部の屈曲部外側は窪みを呈するような形状である。裾部の内外側は，丁寧なハケ目調整で，柱状部の外側には，縦位のヘラけずり後丹彩を施す。517は柱状部から裾部へ外反する形状を呈し，裾端部は尖ったように仕上げている。裾部の内外面は丁寧な横位のハケ目を施し，柱状部外側は縦位のヘラけずり後丹彩による調整である。515の裾端部径は13.9㎝．516の裾端部径は，11.4㎝，517の裾端部復元径は，11㎝を，それぞれ測る。

518～523は鉢形土器・坩形土器である。518は鉢形土器で，底部を欠損している。口縁部は直口気味外反し，復元口径13.4㎝を測り，頸部付近には貼付絡状突帯を巡らす。内面は，指頭による調整を縦位に施し，外面はヘラけずりを中心とした調整である。519は口縁部を欠損した鉢形土器であるが，その形状及び突帯は518と同タイプの器形である。底部は底径6.2㎝の平底で，木の葉底である。内面は横位のヘラとハケなで，外面は斜位のヘラ中心とした調整を施す。520は丸底の鉢形土器の完形品で，口縁部口径14㎝，胴部径14㎝，器高13.4㎝を測る。頸部より大きく外反するが短く，口縁端部は丸く収め，頸部の内外面には稜線をもつもので，胴部は球状を呈する。221はマリ形土器の完形品で，口縁部は僅かに内径するが口唇端部を尖ったように仕上げ，口縁口径17.4㎝，器高7㎝を測る。調整は，内外面ともに斜位にヘラ磨きを中心に調整を施す。

522・523は坩形土器である。522は小型丸底で，口縁部口径11.4㎝，器高6.8㎝を測る完形品で，頸部はしまり，頸部と器体のつぎ目に稜を有し，外向しながら口唇部をなす器形である。内面器体部は，指頭によるナデ，屈曲部から口縁部にかけては，斜位及び横位のナデを中心とした調整で，外面の横位のナデ調整を施す。523は口縁部を欠損した器形で，底部は丸底である。この器形は，頸部に稜が無く器体のつぎ目から僅かに内向し外反する頸部となり口縁へ移行するタイプの坩形土器である。外面の調整は，縦位及び斜位のヘラなで中心の施文である。

525～524は手捏ね土器で，そのほとんどが完形品で，粗製の小型の土器であり，土器製作時の指圧痕を顕著に残し，器壁も厚いものとなるものが多い。器形の大小はあるが，その大半が丸底状の鉢形土器である。口縁部径及び器高は一覧表のとおりである。



第65図　出土土器（手づくね）

表-4　手づくね計測表

単位はcm

番号	口径	器高	番号	口径	器高	番号	口径	器高
524	9.0	6.4	530	5.0	3.4	536	4.0	3.9
525	6.4	6.2	531	4.4	3.2	537	4.8	3.0
526	7.0	6.6	532	4.6	3.0	538	4.4	2.8
527	6.0	5.0	533	3.0	3.0	539	4.0	2.0
528	5.8	4.6	534	5.0	3.0	540	4.0	2.4
529	4.4	3.0	535	4.0	3.0	541	3.4	2.2

542は甕形土器の底部破片で，底面の窪み部に断面三角状の帯を十字状に貼付けている。543は，土盤である。径6cm，厚さ10mmの円盤の2か所に，径4mmと径6mmの円孔を穿っており，器の蓋に使用された可能性が考えられる。

544は土製の杓子型土器が考えられる破片で，柄と想定される部分は欠損し，杓の部位の整形は，柄側の部位から外側へ外反しながら立ち上がりる器径で，その端部は丸く収め，長径5.4cm，短径3.0cm，深さ3cmを測る規模である。

545は算盤玉を彷彿させるような紡錘車で，径3cm，厚さ2.4cmを測る本体の中心部には，径4～6mmの円孔が片側より穿かれている。

② 出土石器（第66～69図）

東田遺跡の出土石器には，X層の遺物包含層を中心に，縄文晩期，弥生時代，古墳時代該当の土器などと共に出土した。石器の器種には，磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧・石包丁・鎌状石器・棒状敲石・石錘・スクレイパー・砥石・敲石・磨石など多種多様なものが出土した。素材としては，安山岩・砂岩・花崗岩・ホルンフェルスなどを利用している。

546は安山岩を素材にした定角状の局部磨製石斧である。最大長は13.5㎝，最大幅4.8㎝，最大厚2.1㎝，重量215ｇを測り，側縁部を交互剥離に整形したもので，表面及び裏面の一部に剥落がみられる。刃部は両刃で表裏面ともに入念な研磨が施さ，一部に使用痕を認める。

547は安山岩を素材にした磨製石斧である。現存最大長は6.9㎝，現存最大幅5.4㎝，現存最大幅2.1㎝，重量116ｇを測り，石斧のほぼ半分以上を基部側にかけて欠損している。裏面の一部に剥落を認められるが，両面ともに入念な研磨が施され，刃部は両刃で蛤刃状に仕上げられ，刃こぼれと思われる使用痕を認める。548～550は安山岩を素材にした短冊状の打製石斧である。003は最大長が18.8㎝，最大幅7.5㎝，最大厚2.1㎝，重量288ｇを測る。自然面をうまく利用して側縁部を大小の交互剥離で整形し，側縁部に敲打痕を部分的に認める。刃部は，両刃で使用によるものか磨滅がみられる。549は最大長16.8㎝，最大幅7.5㎝，最大厚2.1㎝，重量247ｇを測る。交互剥離により整形された素材を利用し，側縁部は敲打による交互剥離により調整いてる。刃部は，使用により片半分が大きく欠損している。550は最大長16.8㎝，最大幅7.2㎝，最大厚1.8㎝，重量282ｇを測る。自然面をうまく利用した素材に，側縁部は大小の敲打による交互剥離の整形で仕上げているが，基部片側は，一部を欠落している。刃部は，使用のためか磨滅を受けている。551は安山岩を素材にした定角状の局部磨製石斧と思われるが，刃部を欠損している。現存最大長は，7.5㎝，現存最大幅4.5㎝，現存最大厚1.5㎝を測る。両側縁部は，大小の敲打による調整により整形されたのか敲打痕が観察される。表面の一部及び基部端部は，磨面が観察される。552は扁平な安山岩を素材にした短冊状の打製石斧である。側周縁部は，大小の交互剥離により整形され，刃部は大きく欠損している。現存最大長は6.6㎝，現存最大幅3.9㎝現存最大幅0.8㎝，重量36ｇを測る。553は大小の剥離にる安山岩の剥片を素材とした打製石斧で，刃部の大半を欠損している。素材をうまく利用し，側縁の一部に敲打調整により整形したものである。現存最大長は，11.1㎝，現存最大幅5.7㎝，現存最大厚1.2㎝，重量114ｇを測る。554は扁平な安山岩を素材とした打製石斧である。表面の側縁部は，敲打により調整して整形しており，裏面は，剥離面を利用したものである。刃部は，使用のためか片側を中心に小剥離が観察できる。最大長は，9.3㎝，最大幅5.1㎝，重量77ｇを測る。555は安山岩を素材にした短冊状の打製石斧であるが，基部・刃部を欠損している。側縁部は，剥離及び敲打により整形している。現存最大長は，6.6㎝，現存最大幅6.6㎝，現存最大厚1.2㎝，重量91ｇを測る。556～565は，ともに安山岩を素材とした打製石斧である。この打製石斧は，基部下位の両側に抉りを施したもので，分銅形石斧とか有肩石斧と呼ばれているものである。556は完形品で，557は，側縁部を欠損しているが，その形状が推察できる石斧である。556は表面に自然面を残し，裏面は敲打による大きい剥離により整形され，裏面の側縁部を中心に大小の敲打により調整で整形されている。最大長は，13.8㎝，最大幅6.6㎝，最大厚2.1㎝，重量192ｇを測る。557は扁平な素材の薄片を利用したもので，基部と抉部を中心に敲打よる大小の剥離により調整されている。

器面は，表面の抉部の下位から側縁部，さらに刃部にかけて欠損しているが，使用によるためか磨滅が確認できる。現存最大長は，12.3㎝，現存最大幅12㎝，現存最大厚1.2㎝，重量124ｇを測る。558は基部及び抉部を残し，刃部を欠損した石斧で，表裏面ともに大きい剥離面を残した素材を利用し，表面の側縁部を中心に敲打による調整で整形されている。現存最大長は12㎝，現存最大幅7.2㎝，現存最大厚2.1㎝，重量113ｇを測る。560・561は基部の一部と刃部を欠損した石斧である。560は素材から大きく剥ぎ取られた剥片を用い，表面には自然面を残し，裏面には剥ぎ取られた面をそののまま残し，抉部付近のみの敲打による整形している。現存最大長は，12㎝，現存最大幅8.4㎝，現存最大厚2.1㎝，重量261ｇを測る。561は板状の素材を用いた石斧で，基部の一部及び刃部を欠損している。調整は，素材の側縁部を大小の交互剥離で整形である。現存最大長は，9.6㎝，現存最大幅8.7㎝，現存最大厚0.75㎝，重量106ｇを測る。

559・562・563は，基部と抉部だけの破片で，564・567は，片側の抉部まで欠損している。559は抉り付近のみを調整剥離で整え，敲打により整形している。562は基部及び抉部の側縁部を調整剥離で整え，敲打で丁寧に整形し，563～565の抉部は，ともに雑に仕上げている。

566・567はともに扁平なホルンフェルスを素材とした石包丁の破片である。566は2か所に円孔を穿っているが，製作を途中で中断した未製品が考えられるものである。567は大半を欠損した破片で，石包丁の右側部分と思われる部位に，径0.7㎝の穿孔が両面より施されているが，その部分から欠損しているため詳細は不明である。

568は扁平な安山岩をの素材として利用した石鎌と考えられる石器で，一部を欠損している。表面は剥離された面をそのまま残し，裏面の下位には，連続した剥離により整形されているが，ともに磨滅を受けている。刃部と思われる表面の部位には，敲打による調整剥離で整えている。現存最大長は，12㎝，現存最大幅5.0㎝，現存最大厚0.9㎝，重量84ｇを測る。

572・573はホルンフェルスを素材として利用し，ともに上端部及び下端部に敲打痕をもつ敲石が考えられる石器である。572は大きめの楕円礫を素材として用いている敲石である。最大全長は，12.6㎝，最大幅12.0㎝，最大厚3.0㎝，重量400ｇを測る。表面は，磨滅が観察できるが，上端は全面に敲打痕を，下端部は，一部に敲打痕が観察できる。

573は，歪な棒状の楕円礫を用いた敲石である。器面の上・下端面ともに，使用による大小の敲打痕が観察される。最大全長は，10.2㎝，最大幅0.3㎝，最大厚0.3㎝，重量94ｇを測る。

574～576・577は石錘で，ともに砂岩製の扁平な楕円礫を利用している。

574・575は，片面抉部を欠損している。574は抉部は，両面よりの敲打により調整剥離で整形しているが，磨滅を受けている。現存最大長は，6.9㎝，現存最大幅5.1㎝，現存最大厚1.2㎝，重量80ｇを測る。575は片側の抉部を大きく欠損している。現存最大長は6.0㎝，現存最大幅5.7㎝，現存最大厚2.1㎝，重量108ｇを測る。576は，表面のみの側縁部の僅かな上位に，敲打により打ち欠いて抉りを作り出している。下端面の側縁部には，敲打痕が観察され，一部敲く作業も併用していたみられる石器である。最大長は8.1㎝，最大幅8.4㎝，最大厚1.5㎝，重量149ｇを測る。577は，細粒砂岩の小円礫を素材として利用し，両側端面には，三角形状の切り込みを入れ，石錘状の仕上げている。574～576の石錘とは，用途を異にする石器と思われるものである。最大長は，4.2㎝，最大幅3.0㎝，最大厚2.1㎝，重量30ｇを測る。

570はフォンフェルスを，569・671は，安山岩を素材としたスクレイパーである。

569は扁平で大きく剥ぎとられた横長の剥片を利用し，表面の側縁部を敲打による大小の剥離により調整され，刃部も同様での剥離により調整である。復縁部の一部を欠損している。裏面は，一部の側縁部のみを敲打による剥離で整形し，大半は剥片の剥離面を残している。最大長は，10.2㎝，最大幅15.3㎝，最大厚1.2㎝，重量110ｇを測る。

570は大きく剥ぎ取られた扁平な横長の剥片を利用し，側縁部を大小の剥離調整で整え，片側からのみの剥離による整形で，刃部を作り出している。最大長は10.8㎝，最大幅6.9㎝，最大厚0.9㎝，重量119ｇを測る。571は，扁平な縦長の剥片を利用し，側縁部は大小の粗い交互剥離により整形されている。刃部は調整剥離で整え，敲打により整形し，使用のためか器面全体が磨滅を受けている。最大長は，12.9㎝，最大幅6.3㎝，最大厚1.2㎝，重量110ｇを測る。

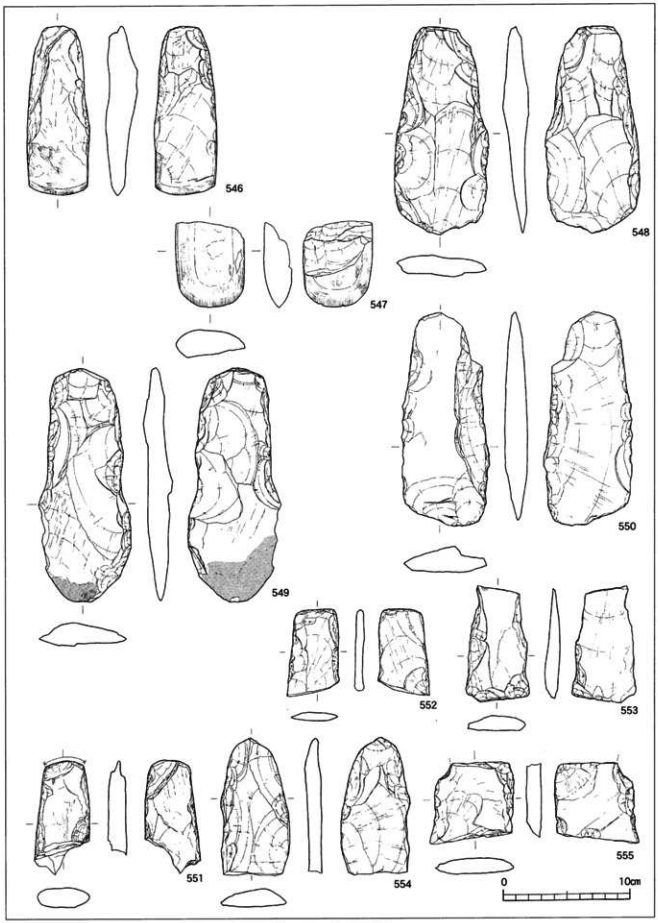
578・579はともに砂岩を素材とした砥石である。578は，扁平な素材を利用し，両面及び側面ともに使用による磨面が確認され，表面は部分的に剥落を受けている。現存最大長は，7.8㎝，現存最大幅6.3㎝，現存最大厚1.5㎝，重量104ｇを測る。579は，頻繁に使用されたためか角柱状を呈し，四面の使用が顕著に認められる。最大長は，6.9㎝，最大幅3.0㎝，最大厚1.5㎝，重量73ｇを測る。

580～583は凹石・磨石である。580・581は花崗岩を素材とした凹石で，580は両面に窪み面をもつもので，最大長は9.6㎝，最大幅7.2㎝，最大厚4.2㎝，重量450ｇを測る。

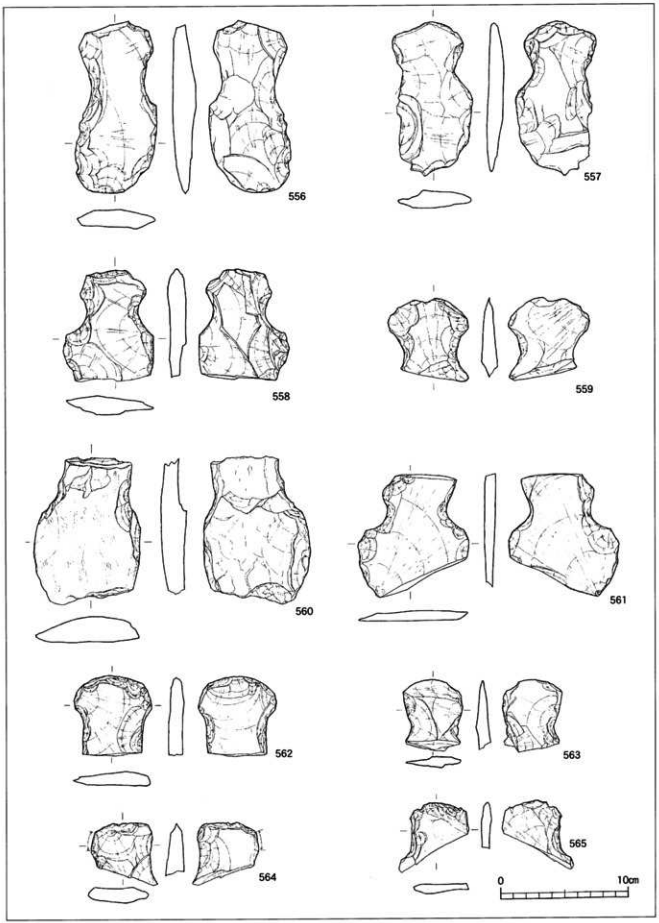
581は片面のみに窪み面をもつもので，最大長は，8.4㎝，最大幅6.9㎝，最大厚4.5㎝，重量370ｇを測る。582・583は磨石で約半分ほどを欠損している。582は安山岩を素材として用い，両面とまに使用による磨面が顕著に観察され，片面には窪み面を認め，磨る作業も兼ね備えていたものと思われる。現存最大長は6.9㎝，現存最大幅8.4㎝，現存最大厚4.5㎝，重量390ｇを測る。583は砂岩を素材に用いた磨石で，大半を欠損している。片面の一部に稜線が確認されるほど磨る作業に使用し，一部周辺には敲打痕が観察でき，敲く作業も兼ね備えていたものと類推できる。現存最大長6.0㎝，現存最大幅8.4㎝，現存最大厚8.5㎝，重量380ｇを測る。

③ 須恵器（第70・71図）

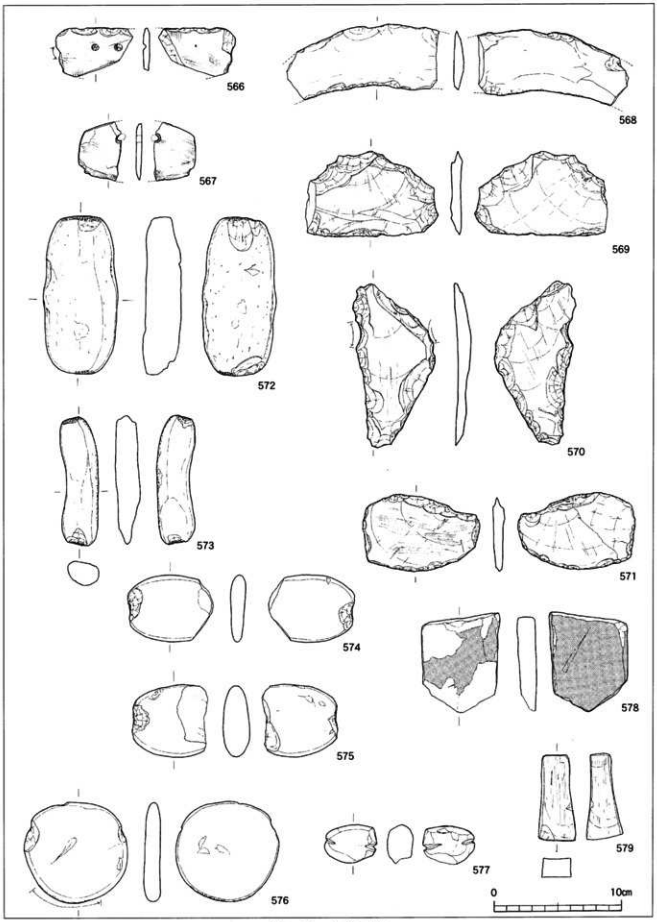
616～619は蓋である。616の天井部外面は時計回りのヘラ削り，内面はナデ調整。稜上面傾斜変換部は凹面を成す。稜下面は稜境で凹面を成し，端部は鋭く水平にのびる。口縁部は内湾気味に垂直に下りやや外反し，端部は内傾する凹面を成す。617は稜上面傾斜変換部で凹面を成す。稜下面は稜境で凹面を成し，端部は鋭く水平にのびる。618は稜上面傾斜変換部でわずかに凹面を成す。稜下面は稜境で凹面を成し，端部は鋭く水平にのびる。口縁部は下外方に下り，端部近くで外反し，端部は内傾する凹面を成す。619の口縁部は外反しながら下外方へ下り，端部は内傾する凹面を成す。620～624は杯身である。620はたちあがりが内傾しながらのび，端部は内傾する凹面を成す。受部上面は受部境で屈曲し，平面を成してやや上外方にのび端部は丸い。受部下面は下内方に下り，傾斜変換部は凹面を成す。底体部外面はヘラ削り調整。621はたちあがりが内傾しながらのび，端部は丸い。受部上面は受部境で屈曲し，平面を成して水平にのび，端部は丸い。受部下面は下内方に下り，傾斜変換部はわずかに凹面を成す。622の受部上面は受部境で僅かに溝を成し，水平にのび，端部は丸い。受部下面は下内方に下り，傾斜変換部はやや凹面を成す。623の受部上面は受部境で溝を成し，上外方にのびて端部は丸い。



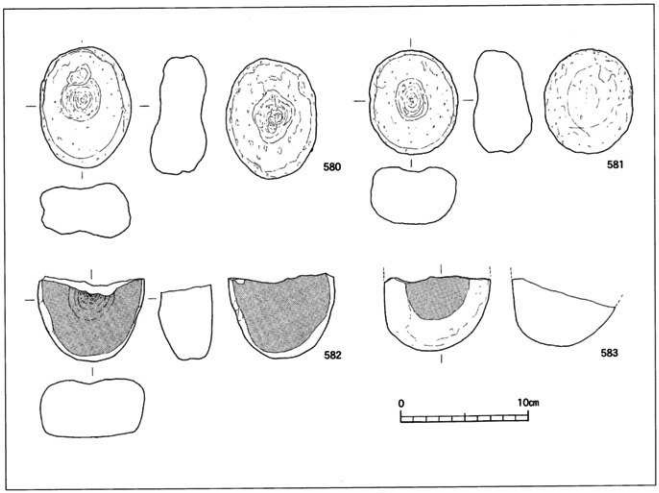
第66図　出土石器



第67図　出土石器

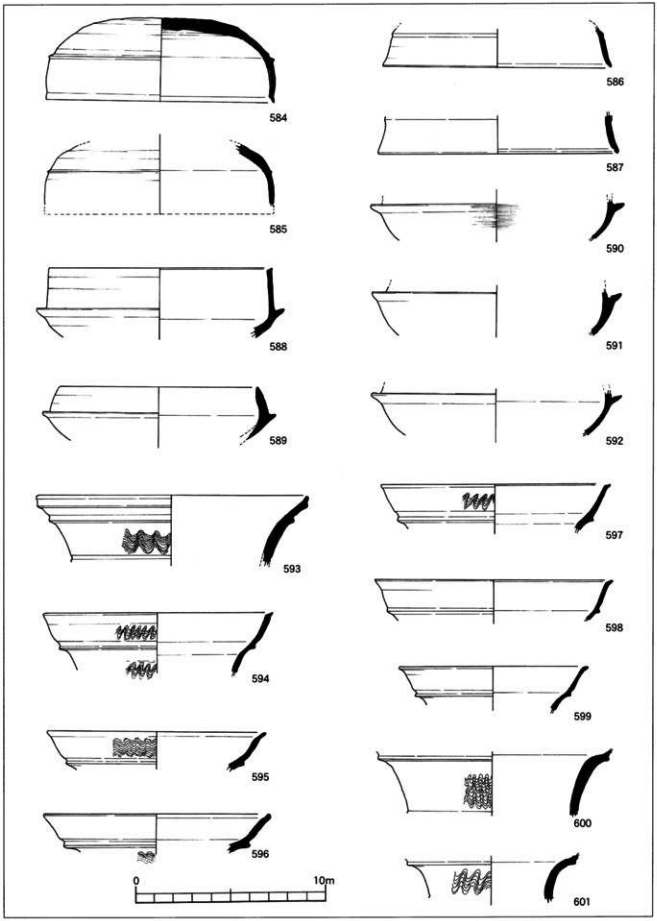


第68図　出土石器

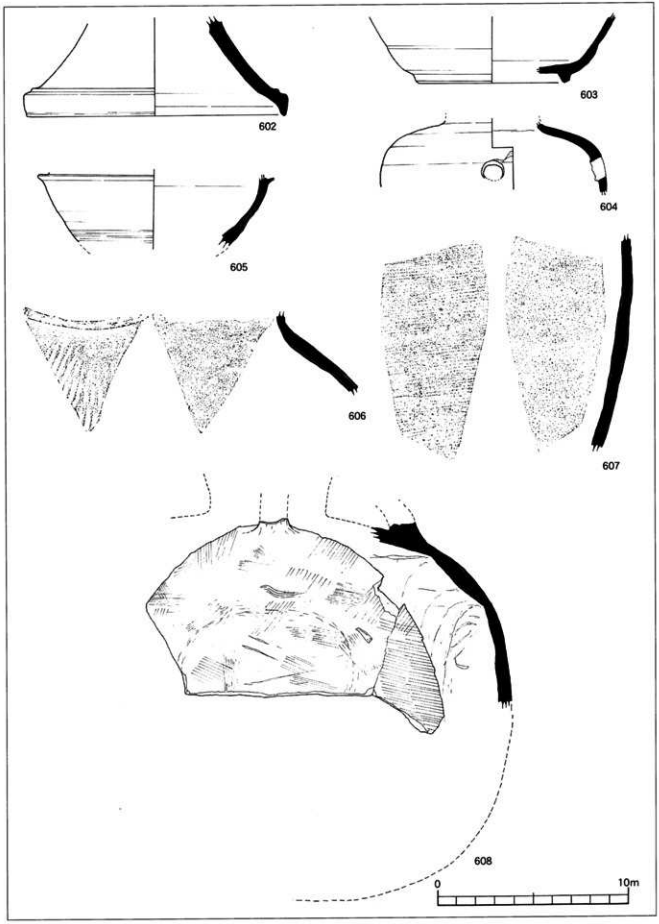


第69図　出土石器

受部下面は下内方に下り，傾斜変換部は凹面を成す。624の受部上面は受部境で溝を成し，やや上外方にのびて端部は鋭い。受部下面は下内方に下り，傾斜変換部は凹面を成す。625の口頸部は外湾気味に上外方にのび，口縁部は鋭い1本の凸帯を巡らせ，外反後凹面を成して垂直に近い上外方へのび，端部は丸い。凸帯下方に櫛描波状文1条（13本）を施す。波状文下方にもう1本鋭い凸帯が巡る可能性有。626の口頸部はやや外反気味に上外方にのび，1本の凸帯を巡らし，口縁部はやや内湾気味に上外方へのび，端部は内傾する平面を成す。口縁部・頸部外面にそれぞれ1条ずつ（5～6本，4本以上）の小型の櫛描波状文を有す。627の口縁部は鋭い1本の凸帯が巡り，内湾気味に上外方へのび，外反後端部は内傾する平面を成す。外面に波状文。628の口縁部は1本の凸帯が巡り，上外方へのび，端部は内湾する凹面を成す。629の口縁部は1本の凸帯が巡り，やや内湾気味に上外方へのび，端部は内傾する凹面を成す。外面に櫛描波状文1条（5～6本）を細かく施す。630の口縁部は1本の凸帯が巡り，わずかに内湾しながら上外方へのび，外反後端部は内傾する平面を成す。631の口縁部は1本の鋭い凸帯が巡り，わずかに内湾しながら上外方へのび，外反後端部は内傾する平面を成す。632の口頸部は外湾気味に上外方へのびる。外面には1条の櫛描波状文（11本？）を施す。633の口頸部は外湾しながら上外方へのびる。外面には1条の櫛描波状文（13本）を施す。616～633は陶邑Ⅰ～Ⅱ段階に相当する。


584
585
588
589
593
594
595
596
586
587
590
591
592
597
598
599
600
601
0
10m

第70図　須恵器（1）



第71図　須恵器（2）

634は高杯の脚部で外湾気味に下外方へ下り，裾部で段を成すように1本の凸帯を巡らせ，下外方後下内方に下る。端部は丸い。透かしを伴う。635は低い高台を持つ杯身で，体部は平らな底部から上外方へのびる。高台端部は外傾する平面を成し，内端面で接地する。陶邑Ⅲの時期に相当する。636は・で，肩部は外下方に張り出して下る。体部上位に円孔が穿ってある。637は器種は不明であるが蓋の可能性もある。638は肩部が下外方に下り，外面は平行タタキ痕を有す。639は体部がやや内湾気味に下内方へ下り，外面は横位のカキ目調整。640は瓶と思われ，肩部に小型の把手が設けられている。外面カキ目，ナデ調整。胎土に白い石灰分？の粒子を含む。

大　溝

A9～AB15に調査区を南東から北西にかけて斜めに横切る2本の大溝が，検出された。東側に位置する11号・13号・16号・17号・18号～20号・27号・32号・39号・40号住居の大半はこの2本の大溝で切られている。溝1は幅約7m前後，深さ約60cm，溝2は幅約4m前後，深さ約40cmである。調査区の東端は国見山系延びた丘陵袖部と沖積平野との境で低湿地帯の基部にあたる。古墳時代以降，地形や地状によって自然に形成された川と思われる。

出土遺物（第72図）

大溝からは，縄文時代後期・縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代などの遺物が混在して出土した。

(1)　土　器

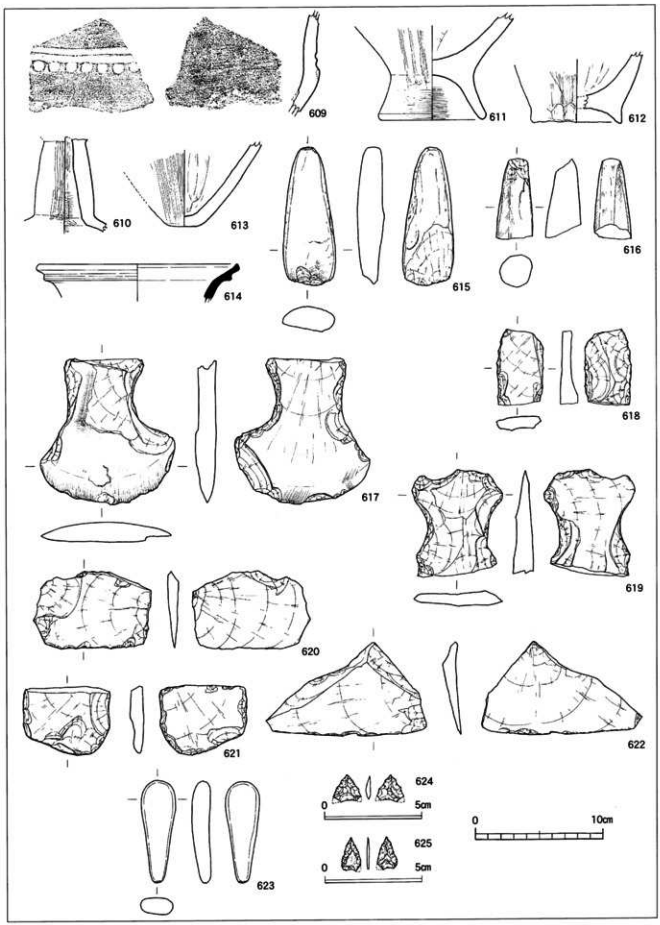
609は縄文時代後期後葉の深鉢形土器で，器壁の厚い破片である。胴部の屈曲部付近には，二条の沈線を施し，その下位には凹点文を連続して施している。器壁は厚く，胎土には石英・長石・金雲母などを含み，色調は，外面が暗茶褐色，内面は明茶褐色を呈している。

611は古墳時代の成川式土器の甕形土器の中空をもつ底部破片で，裾部端面は丸く仕上げている。調整は外面が縦位のハケなでを中心に，一部に横位のなでを施し，内面は指頭による調整後にハケなで，脚部の内外面ともに指頭調整後，横位のハケなで調整である。色調は外面が明茶褐色で，内面は黒褐色を呈し，胎土には石英・長石・金雲母などを含んでいる。

612は弥生時代後期終末と考えられる鉢形土器の底部破片である。底部裾部を含めて，指頭による調整で整形され，底面は僅かに窪んでいる。調整は内外面ともに指頭により整形され，その上位に縦位のハケなでを施している。色調は，内外面ともに明赤茶褐色を呈し，胎土は石英・長石・金雲母などを含んでいる。613は弥生時代の壷形土器の底部破片で，底径は2.8cmを測る。内面は指頭による調整後鮮明さを欠くがハケなで，外面は縦位のハケなで調整を施す。色調は，外面が茶褐色で，内面は赤茶褐色を呈し，胎土は石英・長石・金雲母などを含んでいる。610は古墳時代の高坏土器の脚部で，坏部や脚部の屈曲部から裾部を欠損した柱状部破片である。内面は横位のハケなで調整で，外面が縦位のヘラ磨きを施した後，磨耗のために丹採が施されている。色調は外面が赤茶褐色で，内面し明褐色を呈し，胎土には石英・長石・金雲母などを含んでいる。614は古墳時代の須恵器で，壷形土器の口縁部破片である。復元口径は，16.5cmを測り，口縁部は，大きく外反し，口縁部端部は平坦状に収め，内面の中程には弱い稜線を持っている。器面内外ともにヘラ状工具により横位のなでを施している。

(2)石器（第71図）

615は磨製石斧で，敲打により整形し，基部は乳棒状に仕上げている。特に，側縁部には敲打痕がみられる。刃部は，使用によるためか剥離され，裏面は剥離が大きい。


609
611
612
610
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
0
5cm
0
5cm
0
10cm

第72図　大溝

616は磨製石斧の基部破片で，基部端部や本体の中程から刃部にかけて欠損している。617・619は安山岩を素材とした有肩をもつ扁平な打製石斧で，617は安山岩の表面に自然面を残し，裏面は敲打による大きい剥片を素材として利用し，敲打により抉り部を作り出し，基部端部は欠損している。本体の刃部側は，両面ともに研磨が施され，刃部は，円弧状を呈し，使用による刃こぼれを随所に認める。現存最大長は，11.7㎝，最大幅11.1㎝，最大厚1.8㎝，重量250ｇを測る。619は安山岩の素材を大小剥離により調整され，敲打によるり抉り部を作り出し，基部は，端部の一部を欠落し，抉り部下位から刃部にかけては，欠損している。現存最大長は，8.4㎝，現存最大幅7.2㎝，現存最大厚1.8㎝，重量120ｇを測る。618は扁平な安山岩を素材した剥片を利用したもので，基部と刃部を欠損している打製石斧である。片側側縁部は，敲打により調整され，裏面は敲打により大きく剥離を受けている。現存最大長は8㎝，現存最大幅3.6㎝，現存最大厚1.5㎝，重量44ｇを測る。617・619は安山岩の扁平な剥片を利用した剥片石器で，617の下面には片側のみの部分に小剥離により刃部を作り出している。620は最大長8㎝，最大幅9.6㎝，最大厚1.8㎝，重量75ｇで，622は最大長7.5㎝，最大幅12.6㎝，重量100.5ｇを，それぞれ測る。621は安山岩を素材にした扁平な打製石斧の刃部破片で，側縁部は敲打により整形され，刃部は使用によるのか大小剥離面が観察される。現存最大長は5.4㎝，現存最大幅6.9㎝，現存最大厚1.8㎝，重さ70ｇを測る。623は安山岩の棒状の楕円礫を素材とした礫器で，僅かであるが上下端部に敲打痕を確認する。最大長は8.1㎝，最大幅2.7㎝，最大厚1.5㎝，重量50ｇを測る。624・625は小型の打製石鏃である。624はハリス安山岩を素材としたもので，正三角形の形状を呈し，交互剥離により整形されているが，基部の片側が僅かに欠損し，現存最大長1.3㎝，現存最大幅1.3㎝，最大厚0.1㎝，重量0.5ｇを測る。625は粘板岩を素材としたもので，二等辺三角形の形状を呈し，交互剥離により整形されている。基部の片側は僅かに欠損し，現存最大長が1.0㎝，現存最大幅1.2㎝，最大厚0.1㎝，重量0.3ｇを測る。

まとめにかえて

遺跡は，北側前面に串良川が肝属川と合流する肥沃な三角州が形成された沖積平野が広がる水田地帯と南側は国見岳から延びた丘陵裾部（この裾部に現在の集落が点在する）に挟まれた標高約４ｍの微高地に立地する。なお，西側約２kmの地点に塚崎古墳群や肝属川を越えて岡崎古墳群が位置する。

調査の結果，主な遺構として，縄文時代後期末～晩期初頭の竪穴住居１基と弥生中期のU字溝と後期末の方形周溝１基，古墳時代の竪穴住居40基が発見された。

縄文時代については，古墳時代の住居と重複して円形竪穴住居が１基発見された。本県における縄文時代の住居の発見例は縄文早期を除いて極めて少なく，後期～晩期の住居は浅川牧遺跡（西之表市－一湊式土器に伴う）の離島を除くと，縄文後期の市来式土器を伴う立神遺跡（田代町大原遺跡）で１基，縄文晩期前葉の水の谷遺跡（鹿屋市上祓川）で６基が報告されている。いずれも円形竪穴住居で位置的にも近い関係といえる。早期の住居は方形竪穴住居が主流となるが，後期の住居は類例は少ないものの，後期になると円形竪穴住居の形態となる傾向にある。なお，縄文晩期前葉の上加世田遺跡の住居は方形竪穴住居である。

縄文時代円形竪穴住居の編年的位置については，住居内出土土器から考察すると，肩部に凹点文を施す中岳Ⅱ式相当の深鉢土器が決め手となる。河口貞徳氏によって調査された中岳洞穴出土土器の一群は中岳Ⅱ式と命名され，西平式土器から三万田式土器への移行過程のものとして位置づけられている。その後，中岳Ⅱ式土器が中村遺跡（宮崎県山田町）や平畑遺跡（宮崎学園都市遺跡群）から出土し，日高幸治氏・北郷泰道氏・菅付和樹氏によると縄文晩期初頭，後期末から晩期前葉に位置けされ，さらに乗畑光博は中岳Ⅱ式について形態や文様施文等，細部にわたる再検討をし，三万田式と御領式土器に併行する可能性が強いとしている。研究者によってその位置づけは異なっているが，凹線文系三万田式と御領式土器と関係するものであることは共通するとし，現状では縄文後期後葉から晩期の間に位置づけられると考えられる。

南九州の古墳時代の遺跡は，弥生時代に比べ遺跡の数は急増し県内各地に数多く見られるが，集落としての規模の大きい遺跡は限られ，辻堂原遺跡（吹上町104基）・萩原遺跡（姶良町78基）・成岡遺跡（川内市16基）などで報告されている。いずれも丘陵台地に立地する遺跡である。

東田遺跡の主体は，現地表面から約２ｍ下の砂層（X層が遺物包含層）の古墳時代の竪穴住居群である。調査対象区の道路幅約７ｍ，長さ150ｍ，面積1,200㎡の範囲内に40基もの竪穴住居が密集していた。標高約２ｍの微高地に形成された古墳時代の集落跡である。

微高地及び低地に形成された古墳時代の比較的規模の大きい集落は少なく，鹿児島大学構内遺跡（鹿児島市）は低地に形成された集落跡で，本遺跡と低地という共通性をもつ遺跡である。両遺跡とも，集落を形成する立地条件や水田耕作による稲作を主体とした生産地としての遺跡の在り方を加味したことを考慮する必要がある

竪穴住居は大半が切り合い関係にあり，調査時における埋土の状況での変化はつかめなかったことや出土遺物にも時期的な開きは少なく，先後関係をつかむことは困難であった。

集落の時期と集落の期間については，住居内からの出土土器は，５世紀末～６世紀に相当するするものであり，入来遺跡・花牟礼遺跡・辻堂原遺跡に類例がある土器群である。土器による形式的な時期差の幅は狭く近郊するものであることや本遺跡が標高約２ｍの微高地の低地に立地すること，国見岳山系からの土砂流失物の堆積砂層，あるいは肝属川によって形成された沖積平野の低湿地の末端に立地していることからも，地形的なにはかなり制約された条件の中での集落地

であることが窺われ，長期間，集落として存在しなかったものであることが推察できよう。なお，集落地の範囲であるが，幅は調査区全体の東西約150mの範囲として捉えることが出来るが，住居跡の件数や密集度，切り合い関係，地形から当地点からさらに南北に集落が拡大した大集落であるものと思われる。

これらの住居の位置関係については，竪穴住居の軸の方向を基本にすると3つのパターンがみられる。1パターンは1号住居・5号住居・8号住居・9号住居・27号住居・30号住居，2パターンは2号住居・4号住居・6号住居・14号住居・18号住居・21号住居・22号住居・25号住居・28号住居・31号住居，3パターンは3号住居・11号住居があげられ，集落における住居の位置関係・同時性について示唆してくれるのではないか。

今回の調査で。出土する土器は南九州独自の様相を呈し成川式土器と呼んでいる。今日，河口貞徳氏等，研究者によって甕形土器・壺形土器・高坏等と共に，須恵器との共伴関係から形式分類・編年がなされている。住居内出土や出土土器は，口縁部が内湾気味に立ち上がる甕形土器で，キザミ目文突帯を施すものを主体にするもので，5世紀末～6世紀に位置づけられる。

当遺跡は微高地に営まれた集落であり，辻堂原遺跡・萩原遺跡・西ノ平遺跡とほぼ同時期かあるいは若干新しい時期の遺跡として捉えたい。

鹿大構内遺跡の立地（低地）と共通することは先ほど述べたが，古墳時代の低地における集落の在り方，選定，肝属平野をひかえた稲作との係わり，隣接する塚崎古墳との関係等，今後の研究課題としたい。

参考文献

長野眞一　山口俊博　「水の谷遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　鹿屋市教育委員会1986年

吉永正史　東和　幸　「立神遺跡」田代町埋蔵文化財調査報告書(2)　田代町教育委員会1990年

青崎和憲　「浅川牧遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(8)　鹿児島県立埋蔵文化財センター1994年

平田信芳　池畑耕一　「萩原遺跡」姶良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査　姶良町教育委員会1978年

平田信芳　青崎和憲　「萩原遺跡(Ⅱ)」姶良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査　姶良町教育委員会1980年

出口　浩　池畑耕一　彌栄久志　「辻堂原遺跡」吹上中学校建設に伴う埋蔵文化財報告書 吹上町教育委員会1977年

青崎和憲　繁昌正幸　「上加世田遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)1985年

池畑耕一他　「成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)1983年

桑畑光博　「東南部九州におけるある縄文土器の形式組列」　鹿児島考古23号1978年

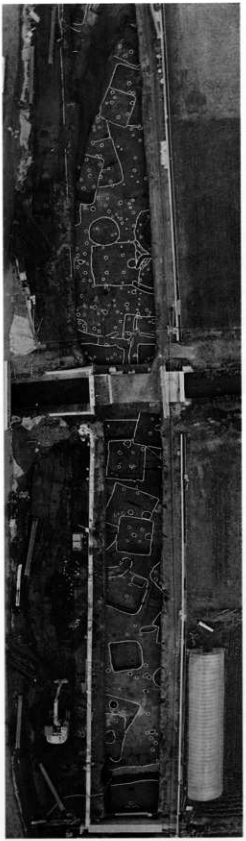
河口貞徳編　「中岳洞穴」末吉町教育委員会1980年

日高孝治　「中村遺跡」山田町文化財調査報告書第1集 山田町教育委員会1983年

曽付和樹　「宮崎県の縄文時代後期土器について」宮崎考古学会例会発表資料宮崎考古学会1986年

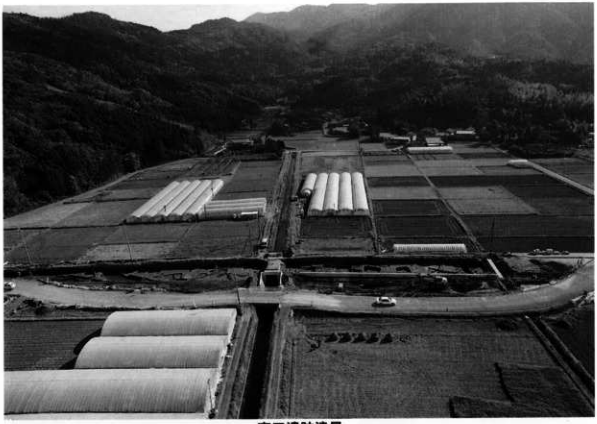
宮内克巳　「三万田式土器の研究」『古文化談』第8集九州古文化研究会1981年

図　　版



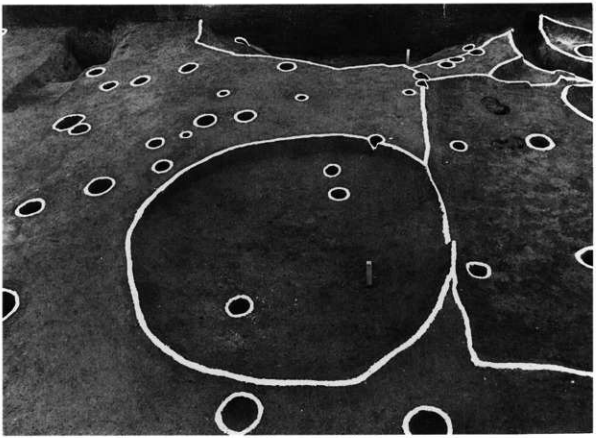
東田遺跡竪穴住居群

図版2

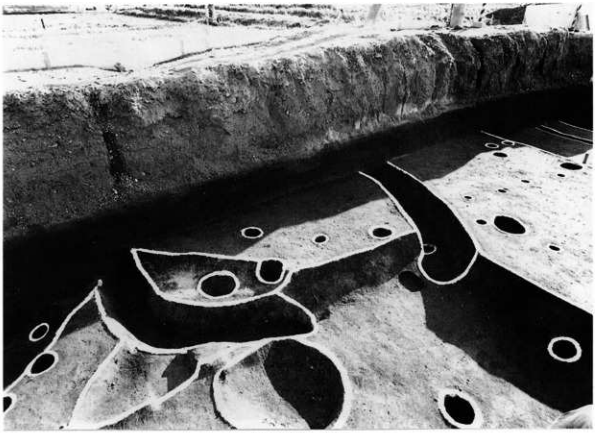


東田遺跡遠景

調査風景

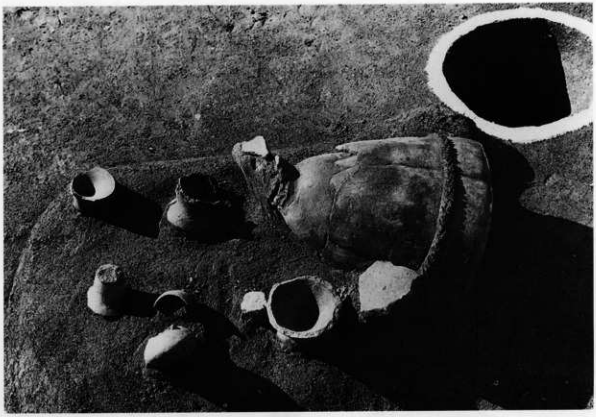


縄文時代　円形竪穴住居



弥生後期　周溝

26号住居（西より）



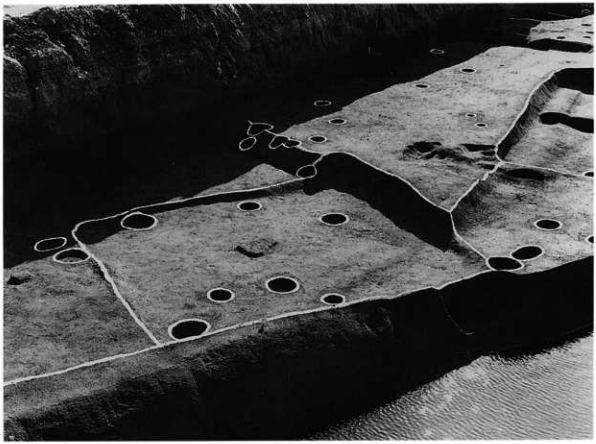
26号住居内土器出土状況

26号住居他

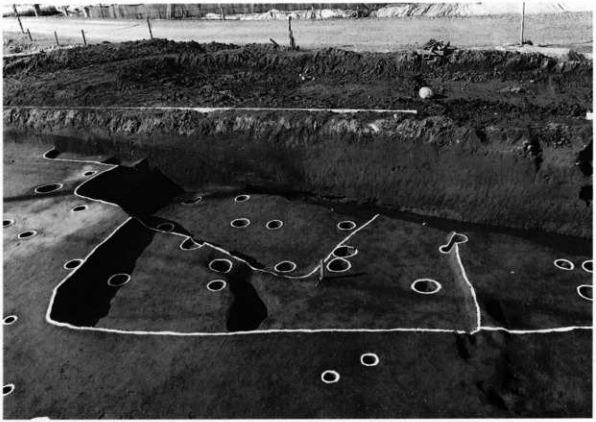
5号・6号住居

3号住居

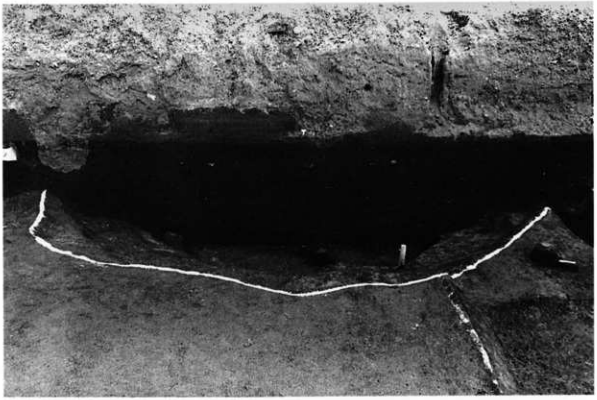
9号住居・方形周溝



21号住居他



21号住居他

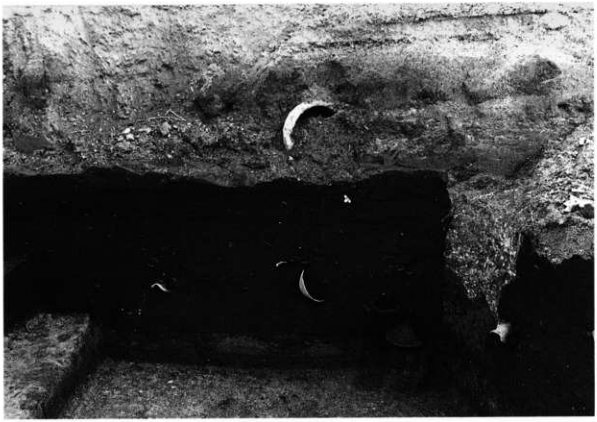


12号住居

24号住居

大溝他

U字溝



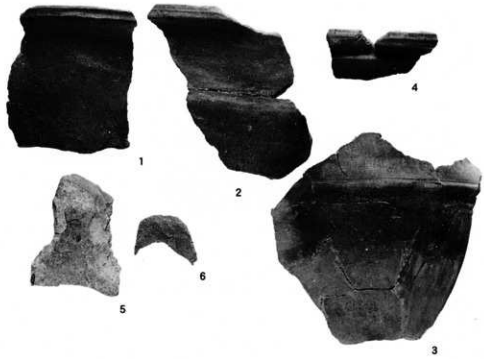
土器出土状況

土器出土状況

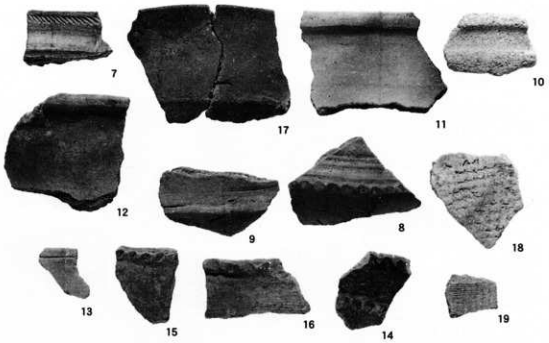
土器出土状況

土器出土状況

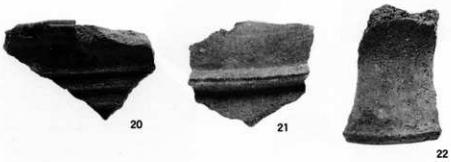
土器だまり



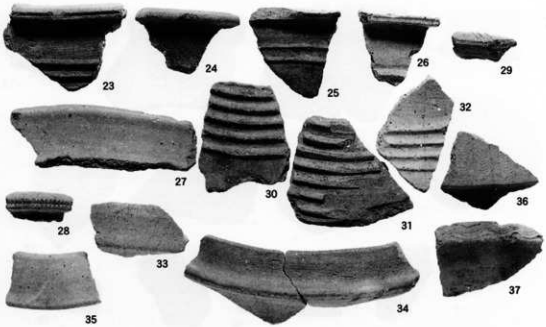
円形竪穴住居内出土



出土遺物



U字溝出土遺物



出土遺物

38

46

39

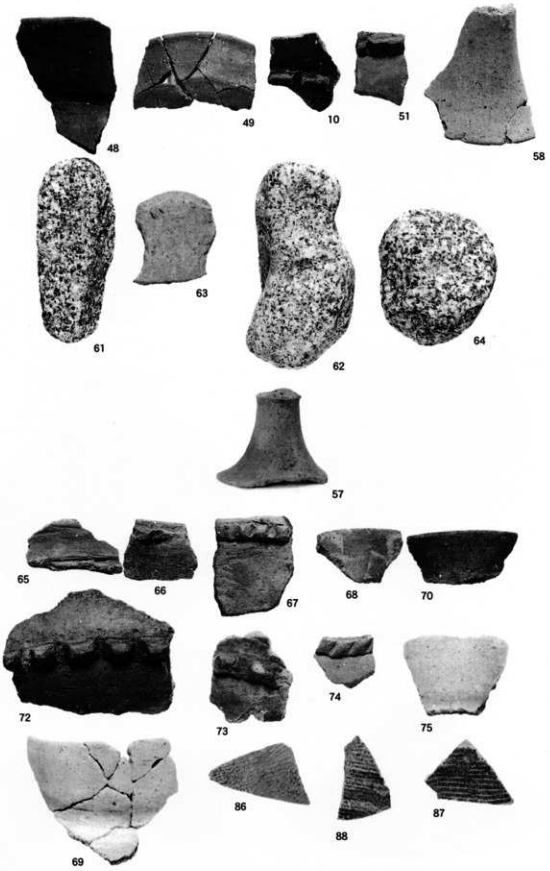
47

41

42

44

方形周溝内出土遺物



出土遺物

71

76

77

90

81

79

89

91

100

92

93

97

95

96

94

98

99

102

103

104

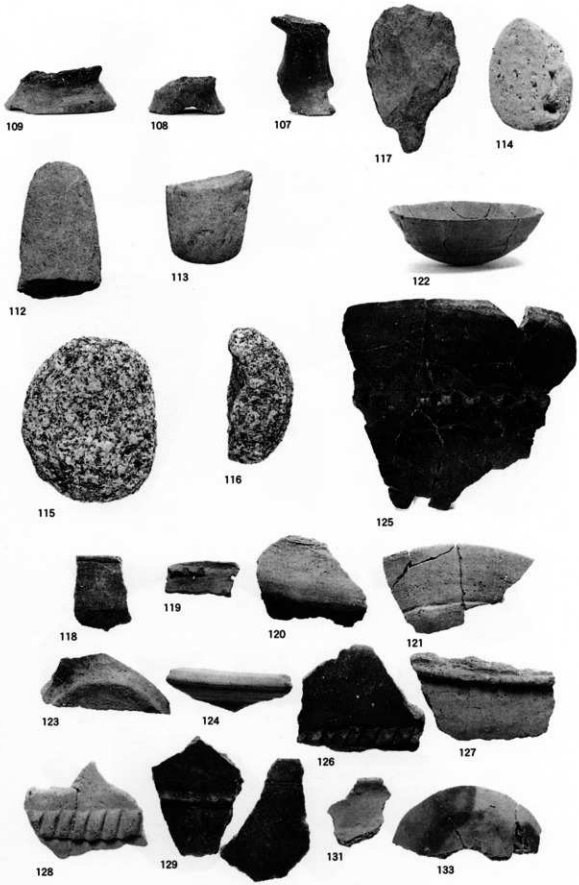
105

106

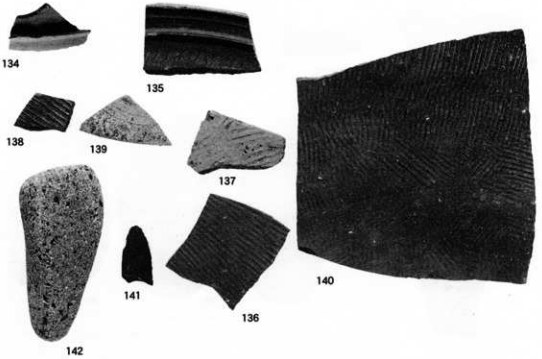
110

111

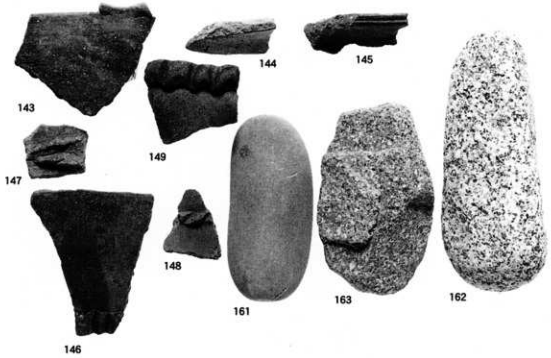
出土遺物

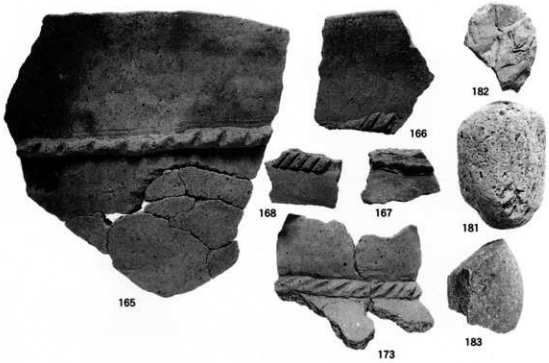

109
108
107
117
114
112
113
122
115
116
125
118
119
120
121
123
124
126
127
128
129
130
131
133

出土遺物



出土遺物


143
144
145
149
147
148
161
163
162
146


182
166
168
167
181
165
173
183

出土遺物

170

178

177

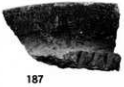
176

180

184

185

199


187

186

198

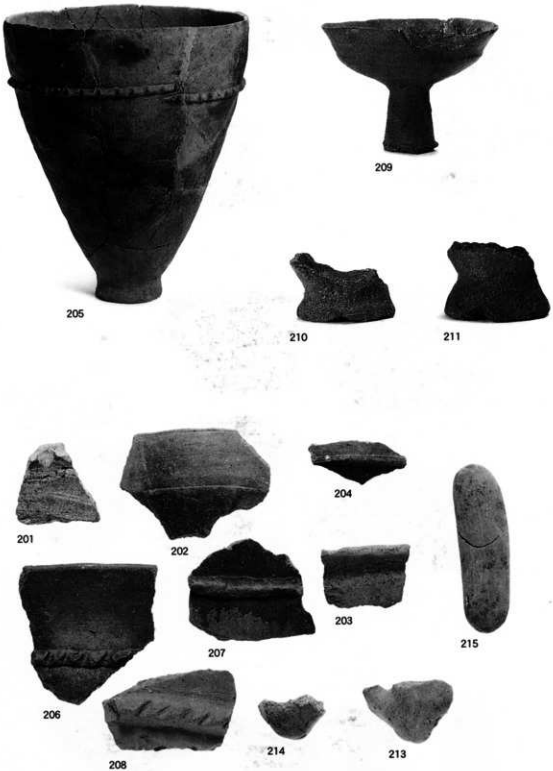
189

191

195

188

出土遺物



出土遺物

233

235

239

238

236

240

275

276

277

278

244

252

257

258

268

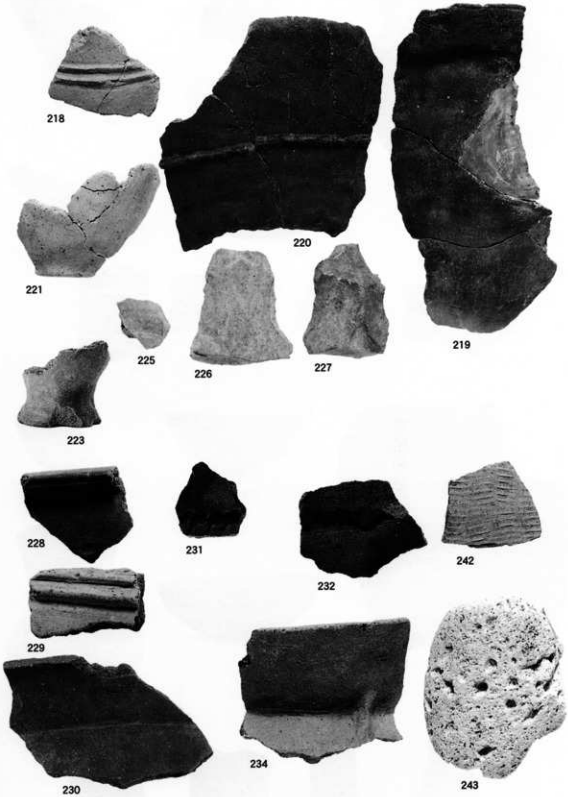
254

256

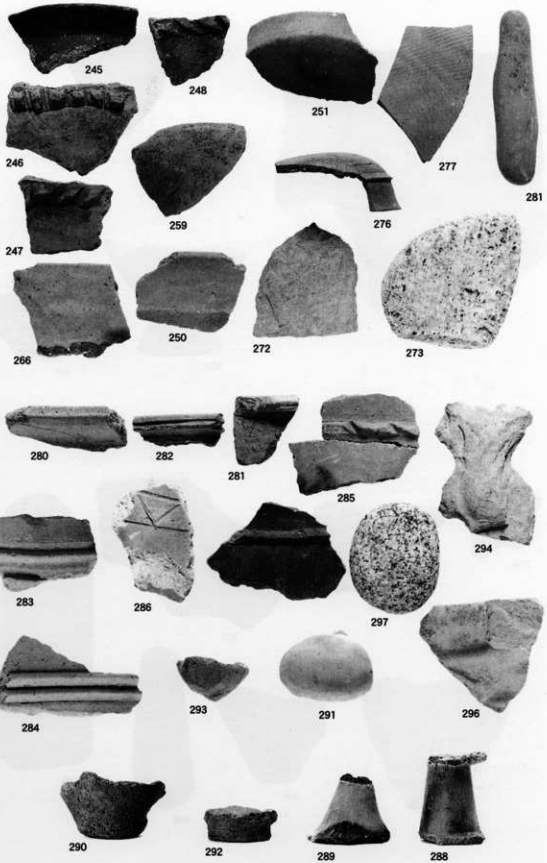
262

261

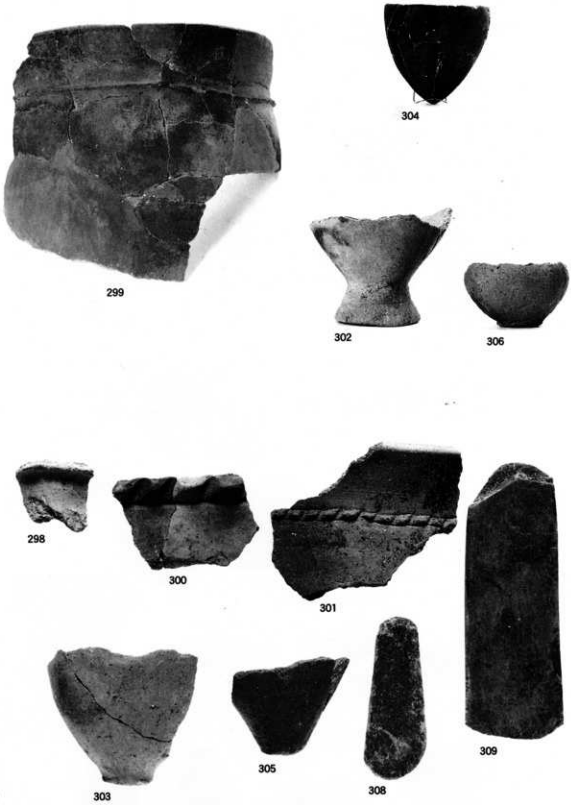
出土遺物



出土遺物


245
248
251
277
281
246
259
276
247
266
250
272
273
280
282
281
285
294
283
286
297
284
293
291
296
290
292
289
288

出土遺物



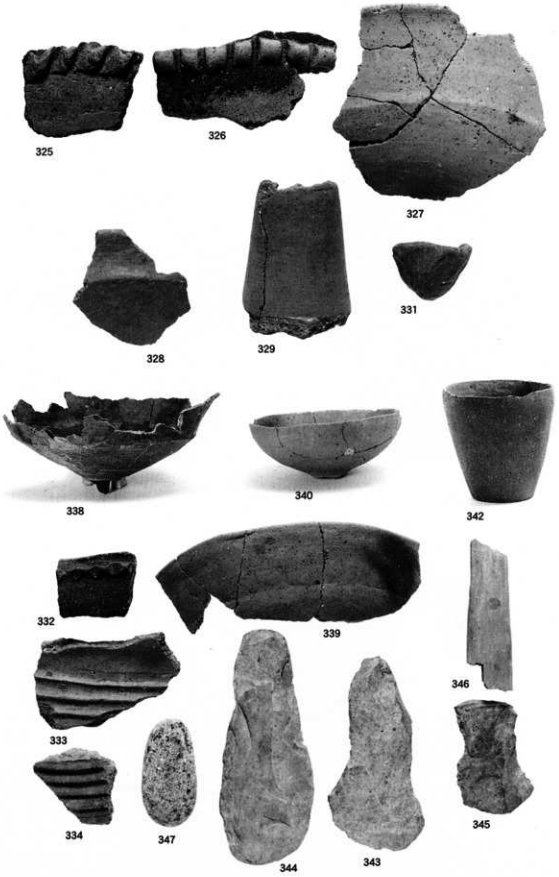
出土遺物

310

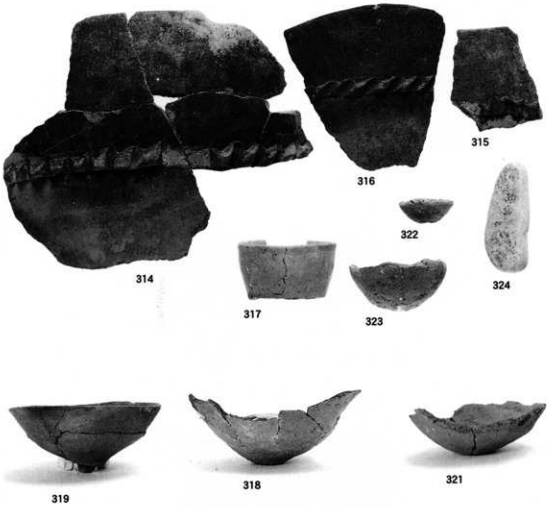
311

312

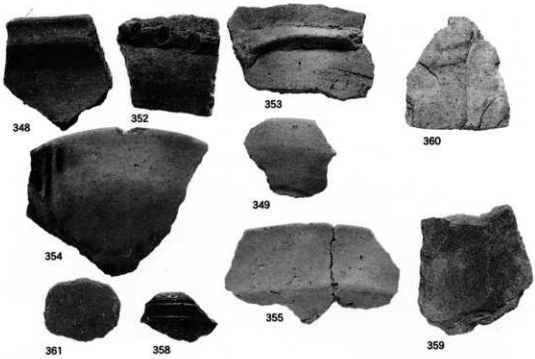
313


325
326
327
328
329
331
338
340
342
332
339
346
333
334
347
344
343
345

出土遺物



出土遺物



出土遺物

364

369

365

362

363

366

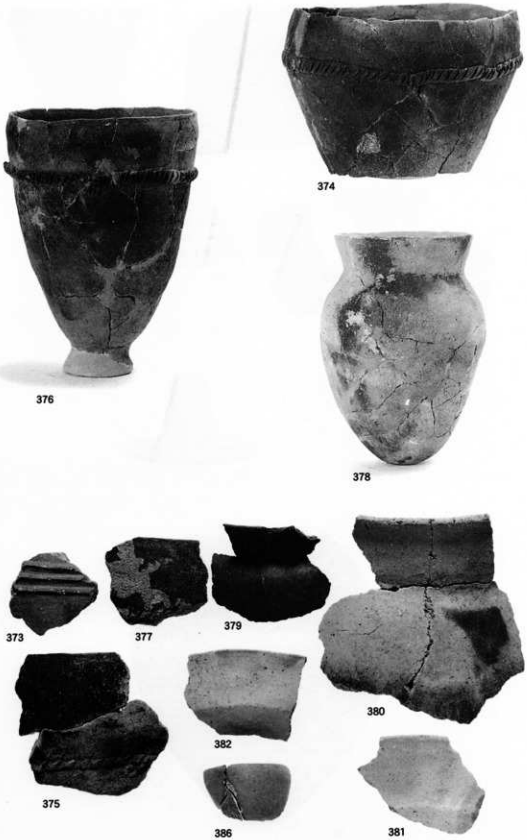
372

371

368

367

出土遺物



出土遺物

385

398

380

384

383

393

390

391

397

400

404

403

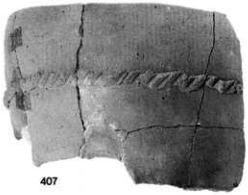
399

402

401

出土遺物

405



407

408

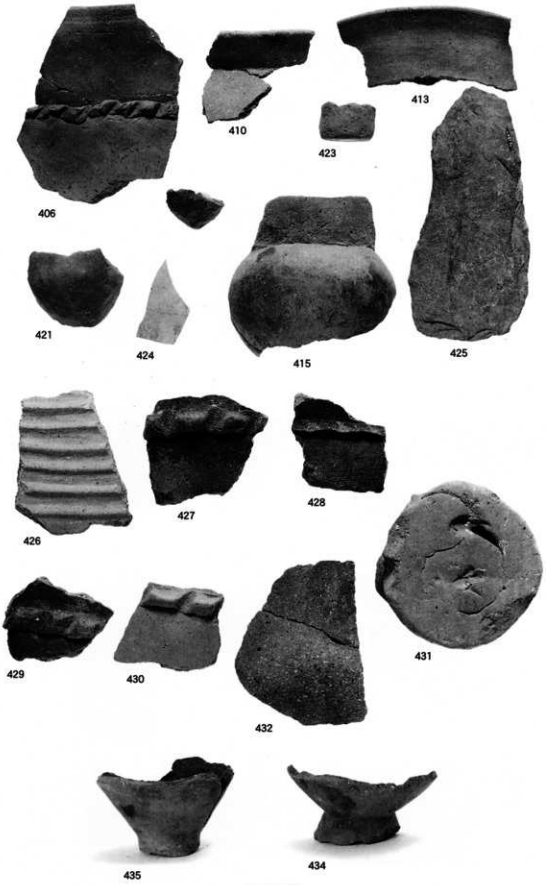
411

414 412

409

416 419 417

出土遺物


406
410
413
423
421
424
415
425
426
427
428
429
430
431
432
435
434

出土遺物

437

440

443

436

442

441

439

448

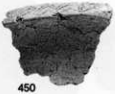
444

445

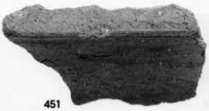
446

447

449


450

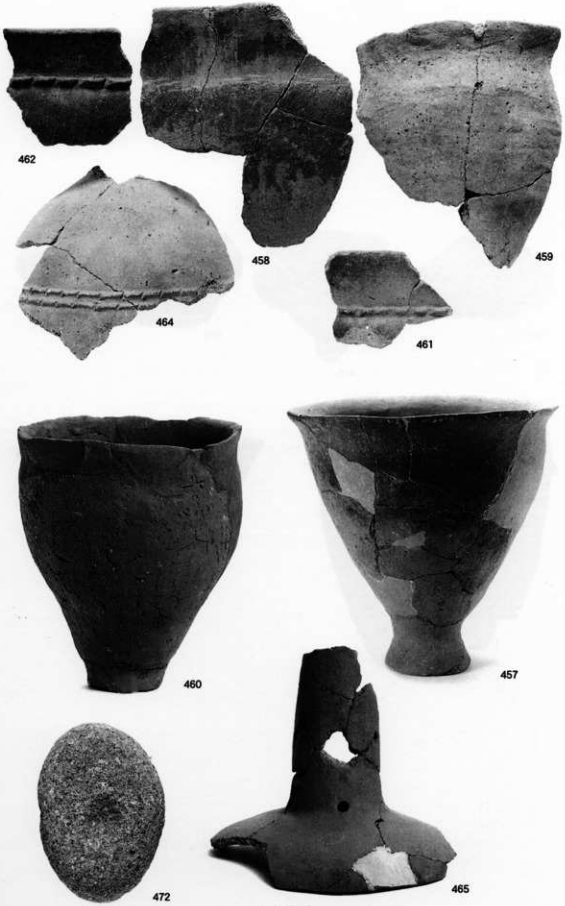
454


451

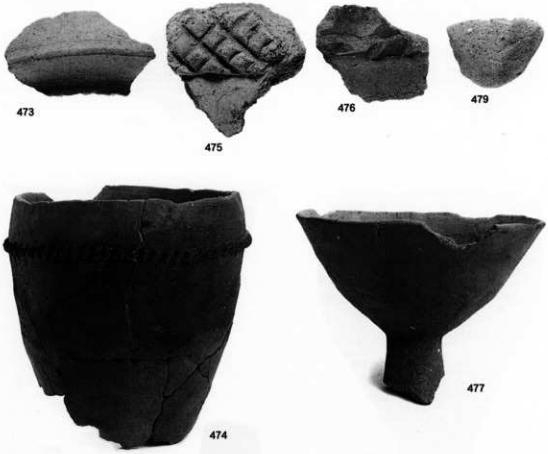
456

455

出土遺物



出土遺物



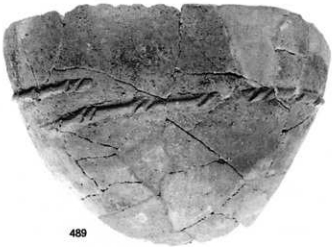
出土遺物

481

484

485

487


489

492

495

497

498

490

499

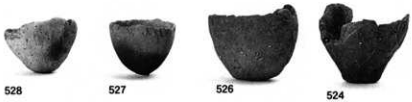
500

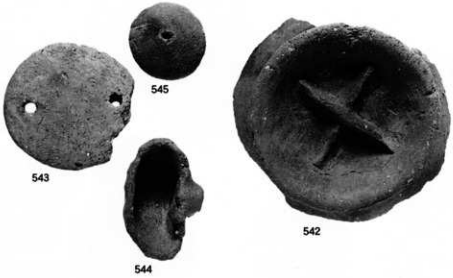
503

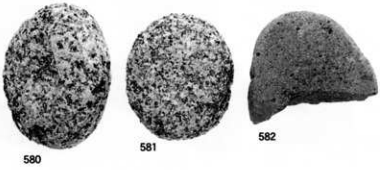
502

出土遺物

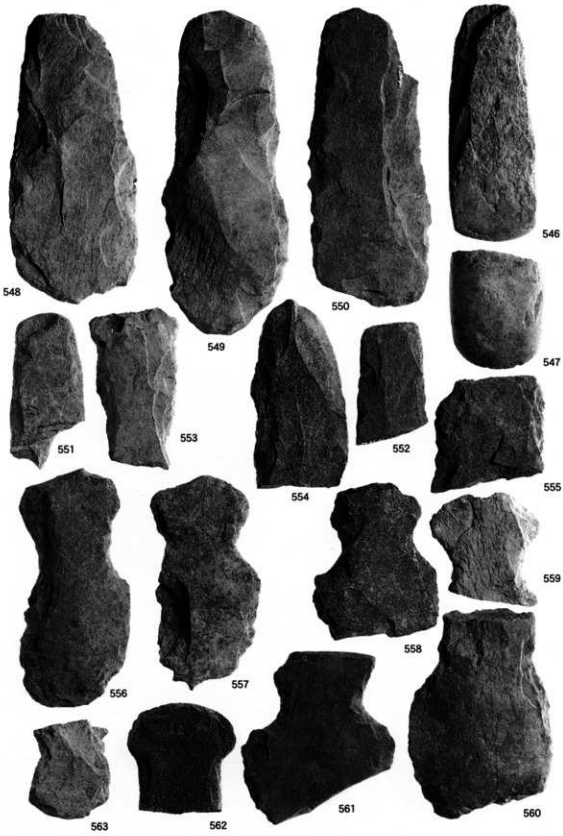
出土遺物



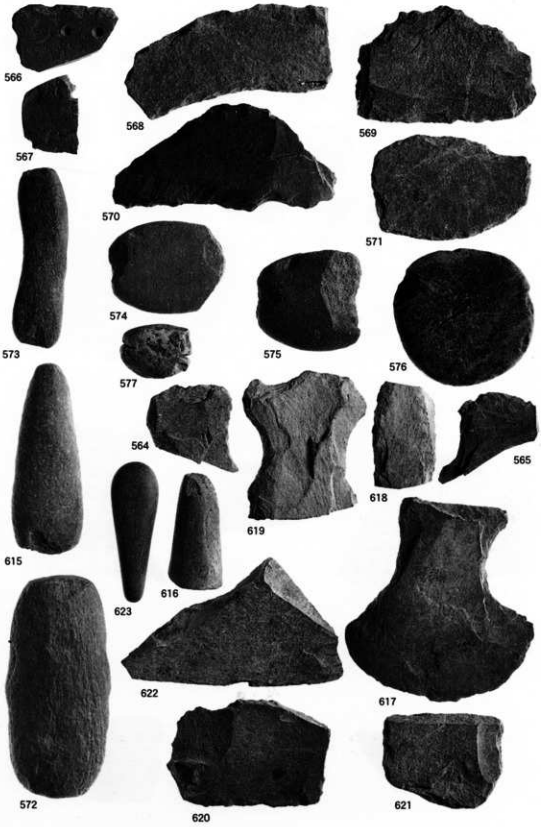




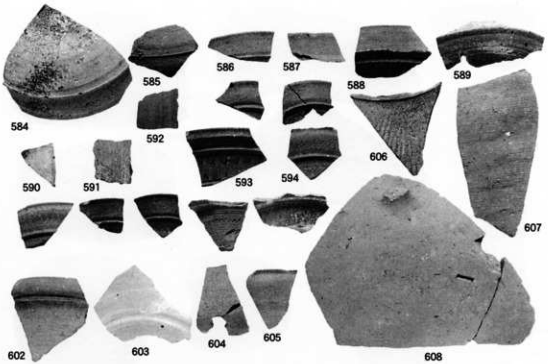
出土遺物

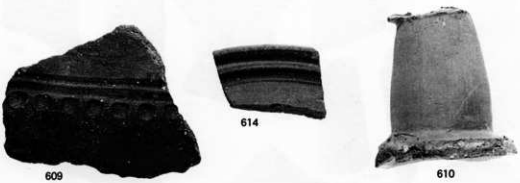

548
549
550
546
547
551
553
552
554
555
559
556
557
558
563
562
561
560

出土遺物


566
567
568
569
570
571
573
574
575
576
577
564
565
618
615
619
623
616
622
617
572
620
621

出土遺物


584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
606
607
602
603
604
605
608


609
614
610

613
612
611

出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（16）

東田遺跡

発　行　1996年2月

編　集　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-56　姶良郡姶良町平松6252番地
TEL 0995（65）8787

印刷株式会社　トライ社
〒892-08　鹿児島市南林寺町12-16
TEL 099（226）0815